大阪府教育委員会文化財調査事務所年報

12

平成20年（2008年）11月

大 阪 府 教 育 委 員 会

はじめに

文化財調査事務所の事業には２本の大きな柱があります。一つは府内の発掘調査、遺物整理、報告書作成事業、もう一つは、普及広報活動事業を行っています。

文化財調査事務所では、開所以来府内での発掘調査を毎年 70 件前後実施してきました。平成 19 年度の調査はやや減少しましたが 60 件を数える調査を実施しました。

普及広報事業は、発掘調査により蓄積された資料を用いて、府庁舎内や資料館での展示を行い、各機関や個人からの閲覧、貸出、撮影などの要望に応じた活用を積極的に行っています。

発掘調査により、我々の目の前に姿を現した考古資料は、そのままの姿では歴史を語ることはできません。出土品から丁寧に情報を取り出す作業を重ねることにより、文化財として活用することが可能となります。

調査事務所では、今に生きる人々が未来を見通す指針の手助けとなるため、先人が残した文化財という遺産を活用できるように、発掘調査の成果を報告書として情報公開し、普及広報活動を通して社会に還元して行きたいと考えています。これまで以上に文化財の保存と活用に努めて参りますので、なお一層のご協力とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成 20 年 11 月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　冨尾　昌秀

例　言

１．本書は、大阪府教育委員会文化財調査事務所年報第 12 冊である。

２．本書には、本府教育委員会が実施した平成 19 年度の発掘調査及び普及啓発活動等の記録を記載している。

３．埋蔵文化財調査の中の主要なものについては、その概要報告を掲載した。各概要報告の表題に示す数字列及び番号は以下の内容を示している。

なお、概要報告表題の調査番号は表３・４の調査番号と一致する。

遺跡名（平成 19 年度調査番号）

（１）所在地

（２）調査の原因となった事業

（３）調査担当者

４．各項の執筆分担は次のとおりである。

「平成 19 年度における埋蔵文化財調査の概況」	調査管理グループ　宮野淳一
「調査概要報告」	調査第一・二グループ
「資料紹介」	調査管理グループ
「平成 19 年度普及啓発・広報事業及び資料」	調査管理グループ
「平成 19 年度大阪府教育委員会文化財保護課刊行物一覧」	調査管理グループ
「平成 19 年度資料の貸出・掲載・閲覧事業一覧」	調査管理グループ
「平成 19 年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図」	調査管理グループ

５．本書の編集は、調査管理グループが行った。

６．本書は 500 部作成し、一部あたりの単価は 372 円である。

目　次

はじめに
例　言
目　次
挿図目次
表目次
グラフ
平成19年度における埋蔵文化財調査の概況 …… 1
【主要発掘調査の概要報告】
府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡　（０７００１）…… 6
桜井駅跡　（０７００３・０７０２９）…… 7
林遺跡・国府遺跡　（０７００４）…… 8
雁屋遺跡　（０７００５）…… 9
高木遺跡　（０７００６）…… 10
芹生谷遺跡　（０７００７）…… 11
九頭神遺跡　（０７００９）…… 12
陶邑窯跡群　（０７０１０）…… 13
福井遺跡　（０７０１１）…… 14
寺田遺跡　（０７０１３）…… 15
大町遺跡　（０７０１５）…… 16
呉竹遺跡　（０７０１８）…… 17
蔀屋北遺跡　（０７０１９）…… 18
銭塚古墳　（０７０２４）…… 19
橋本野岸ノ下遺跡　（０７０２７）…… 20
ミクリ遺跡　（０７０２８）…… 21
安威城跡　（０７０３２）…… 22
久宝寺遺跡　（０７０３３）…… 23
千里丘遺跡　（０７０３８）…… 24
禁野本町遺跡　（０７０３９）…… 25
太井遺跡　（０７０４０）…… 26
高木遺跡　（０７０４１）…… 27
高向神社南遺跡　（０７０４２）…… 28
山城廃寺　（０７０４３）…… 29
大岩地区の石組水路　（０７０４６）…… 30
田尻遺跡　（０７０４７）…… 31
【資料紹介】
陶邑窯跡群TK２３０－Ⅰ号窯出土須恵器 …… 32
平成19年度普及啓発・広報事業及び資料 …… 39
平成19年度大阪府教育委員会文化財保護課刊行物一覧 …… 41
平成19年度資料貸出・掲載・閲覧事業一覧 …… 42
平成19年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図 …… 49

挿図目次

図１　調査位置図……5
図２　これまでの調査地点と05－11区平面図…6
図３　調査位置図……7
図４　調査区南壁断面と礫の広がり……7
図５　調査区全景（第８層上面）……7
図６　唐櫃山古墳と周辺の古墳……8
図７　鍋塚古墳北の調査トレンチ位置図……8
図８　雁屋遺跡調査区位置図……9
図９　調査区位置図……10
図10　東半部建物群（西より）……10
図11　竪穴住居跡（東より）……10
図12　里境跡（北より）……10
図13　芹生谷遺跡範囲図……11
図14　調査区位置図　（１区～27区）……11
図15　九頭神遺跡調査位置と周辺の遺跡……12
図16　方形周溝墓１（南から）……12
図17　調査区位置図……13
図18　調査区配置図……13
図19　Ａ区西壁　（東から）……13
図20　古墳平面図……14
図21　古墳検出状況（東より）……14
図22　須恵器大甕……14
図23　調査区配置図……15
図24　弥生時代遺構全景……15
図25　竪穴住居跡　（北から）……15
図26　石組井戸015立面（南西から）……16
図27　第２面全景（北より）……17
図28　掘立柱建物１（北より）……17
図29　掘立柱建物２（北より）……17
図30　Ｋ４調査区　古墳時代中・後期遺構面全景…18
図31　掘立柱建物跡Ｋ４－１……18
図32　区画溝……18
図33　埴輪列出土状況……19
図34　百舌鳥古墳群……19
図35　調査範囲図……20
図36　調査位置図……21
図37　Ｂ区北半部第１面……21
図38　19－１区（南から）……22
図39　19－２区北半部（南から）……22
図40　調査地遠景（北西から）……23
図41　調査区位置図……23
図42　調査位置図……24
図43　Ａ区南壁断面（下面は第３面西半）……24
図44　Ａ区第３面東半……24
図45　Ａ地区西半部全景（西から）……25
図46　調査区位置図……25
図47　太井地区の景観……26
図48　中世作土の棚田状造成……26
図49　土石流堆積……26
図50　中世作土下の柱穴……26
図51　高木遺跡の景観……27
図52　高木遺跡の位置……27
図53　遺跡位置図……28
図54　調査区全景……28
図55　遺構全体図……28
図56　山城廃寺溝・柱穴列（西から）……29
図57　山城廃寺遺跡範囲図……29
図58　石組水路のガマ口……30
図59　調査した石組水路全景……30
図60　調査地点位置図……31
図61　粘土採掘坑検出状況１……31
図62　粘土採掘坑検出状況２……31
図63　TK230－Ｉ号窯出土須恵器①……34
図64　TK230－Ｉ号窯出土須恵器②……35
図65　「法器寺」銘刻書須恵器花瓶……36
図66　福井遺跡現地説明会……39
図67　高木遺跡現地説明会……39
図68　埴輪の棺 - 埴輪を棺に使った埋葬 -……40
図69　平安時代の須恵器 - 陶邑に白煙が絶えるころ -…40
図70　陶磁の置物Ⅲ - 薩摩焼・唐津焼などの人物置物 -…40
図71　瓦 - 屋根を飾った文様 -（８階ロビー）……41

表目次

表１　原因別調査種別表……1
表２　地域別調査面積・件数一覧表……1
表３　平成19年度調査箇所一覧表（１）……3
表４　平成19年度調査箇所一覧表（２）……4
表５　ＴＫ230－Ｉ号窯須恵器観察表……33

グラフ

グラフ１　原因別調査面積の推移……2
グラフ２　地域別調査面積の推移……2

═ 平成１９年度における埋蔵文化財調査の概況 ═

調査面積と件数

平成19年度、本府教育委員会が実施した調査は60件である。別掲の表及びグラフ、とりわけ次頁のグラフで明らかなように、ここ十年の推移の中で最も少ない件数にとどまった。

調査の内訳は発掘調査21件、確認調査8件、立会調査22件、試掘調査が9件である。発掘調査は昨年度より1件増えているが、対象面積は24,800㎡余りで昨年度から4,000㎡ほど減少している。また、道路建設に先立つ試掘調査で、新たに1遺跡を発見した。

府の公共事業に伴う埋蔵文化財の取扱いを主務とする本府の調査事業において、件数と面積の減少は、予算削減による公共事業の減少や規模の縮小と連動する。なかでも、従前、発掘調査の中心を占めていた府営住宅事業と農林関係事業の逓減が大きく影響している。

次に府内の地域別に調査量をみると、18年度に比べ北河内と三島の両地域で12,500㎡ほど調査面積が減っている。この減少率が総量の減少を招いている。逆に、大きく面積増加に転じたのは泉北地域があり、中河内地域も面積は小さいものの、倍増している。試掘調査面積も含んだ数字だが、中河内地域はかつての河内湾そして河内湖と変遷した土地で、遺構深度が深く、調査の対象となる遺構面も多い。また泉北地域も、海浜に近い部分は河成堆積で複数の遺構面が残る。狭い面積で手間のかかる作業となり、多分に非効率的な調査となる。安全面も考慮すると、本書に掲載した幾つかの遺跡のように、必ずしも満足できる調査が行うことができない状況が生じる場合もある。しかし、どのような状況であれ、事業者と連絡調整を重ね、必要な調査を進めていく所存である。

主な調査成果

平成19年度の調査のうち、主な26遺跡の調査成果は次項以下に要約している。ここでは時代ごとに19年度成果の大略を記すことにしたい。

縄文時代では、泉北地域の和泉市府中遺跡で中期後半から後期にかけての土器が出土した。18年度に続くものだが、とりわけ中期後半の土器は泉州地域の後期文化の展開を考える上で重要な資料となる。また、泉南地域の岸和田市大町遺跡では、下層から縄文土器が出土した。周辺に縄文時代の遺跡は少なく、貴重な発見である。

弥生時代では、北河内の枚方市九頭神遺跡で中期の方形周溝墓3基を検出した。微高地上に墓域が広がりそうである。南河内の松原市高木遺跡では、後期の円形竪穴住居と方形竪穴住居各々1棟を発見した。前者は住居の拡張を示し、また後者は主柱穴が相対する2本の構造である。泉北地域の和泉市寺田遺跡では、中期後半から後期にかけての円形竪穴住居2棟、土坑、溝、ピットなどを検出した。古墳時代前期の集落跡である寺田遺跡が、弥生時代から続くものであることが判明した。このほか、和泉市府中遺跡で中期の土坑を発見した。

古墳時代の成果では、まず泉北地域の堺市銭塚古

表１　原因別調査種別表

	8年度		9年度		10年度		11年度		12年度		13年度		14年度		15年度		16年度		17年度		18年度		19年度	
	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数
住宅	10,696	15	16,304	10	26,271	21	23,590	15	19,623	14	11,340	11	7,905	10	12,522	19	13,817	17	15,453	7	14,730	15	11,169	10
農林	11,539	15	15,482	10	15,026	21	9,242	17	13,817	18	15,250	14	8,147	12	12,441	7	10,308	6	9,068	9	1,970	4	1,564	5
道路	8,870	16	14,074	15	9,590	19	4,159	17	3,504	14	1,518	18	4,256	20	11,008	21	11,423	18	12,712	33	7,468	22	11,422	24
下水	1,948	7	294	10	4,355	9	4,149	6	5,066	9	22,698	14	16,846	12	13,017	6	13,150	7	8,174	9	2,181	5	180	3
河川	1,738	9	2,351	9	1,125	6	841	7	530	3	1,389	6	146	4	1,598	4	5,204	5	9,063	2	3,883	2	204	2
高校	1,844	7	1,680	2	750	1	8	1	425	3	526	4	8	1	1,054	7	144	9	809	7	24	8	12	1
その他	207	7	3,946	9	665	9	2,046	9	9,220	9	2,000	6	1,199	6	745	6	246	10	2,793	12	1,269	12	2,788	15
合計	36,842	76	54,131	65	57,782	86	44,035	72	52,185	70	54,721	73	38,507	65	52,385	70	54,292	72	58,072	79	31,525	68	27,339	60

＊　面積は㎡である

表２　地域別調査面積・件数一覧表

	8年度		9年度		10年度		11年度		12年度		13年度		14年度		15年度		16年度		17年度		18年度		19年度	
	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数
大阪市	70	6	143	3	296	6	572	4	0	0	1,880	2	1,304	3	258	5	238	6	245	2	120	4	0	0
泉南	9,882	14	2,901	17	5,206	20	8,638	19	9,810	12	5,723	17	450	5	8,971	8	4,782	11	1,417	13	4,794	8	4,069	8
泉北	6,760	7	15,359	8	5,922	12	3,531	6	6,240	8	834	6	5,043	10	3,897	9	7,861	16	7,357	13	465	7	6,519	8
南河内	2,692	8	20,144	8	26,178	19	9,324	18	11,450	19	19,747	16	9,381	18	14,250	14	8,388	12	16,433	15	4,942	10	6,534	9
中河内	2,099	14	6,676	11	1,205	8	665	8	8,768	12	3,385	15	949	14	3,319	13	887	9	50	11	1,225	16	2,104	11
北河内	4,664	11	3,738	9	7,948	10	10,396	5	4,978	10	16,263	4	17,664	4	15,733	10	18,064	9	20,923	15	13,252	10	4,940	10
三島	2,163	4	1,523	7	5,779	6	4,883	7	10,629	8	6,572	9	2,175	8	5,957	11	14,060	8	11,287	8	6,677	12	2,969	10
豊能	8,513	12	3,647	2	5,249	5	6,026	5	310	1	317	5	1,541	3	0	0	12	1	360	2	50	1	204	4
合計	36,843	76	54,131	65	57,783	86	44,035	72	52,185	70	54,721	74	38,507	65	52,385	70	54,292	72	58,072	79	31,525	68	27,339	60

＊　面積は㎡である

墳の調査を挙げておきたい。支援学校の敷地内に残されていたもので、校内整備工事のため測量とトレンチ調査を実施した。その結果、同古墳が前方後円墳であることが確認され、埴輪列も検出することができた。百舌鳥古墳群の調査として、貴重な成果である。このほか、周知の古墳に関わる調査として、南河内の藤井寺市林・国府遺跡の調査での唐櫃山古墳墳丘と濠の発見がある。

摂津地域の茨木市福井遺跡では、一辺7m余りの方墳を検出した。削平され周溝を残すのみであったが、溝内に須恵器の大型甕が据えられていた。6世紀初頭のものである。また茨木市安威城跡で古墳時代後期の竪穴住居、和泉市寺田遺跡で庄内期から古墳時代前期の掘立柱建物、18年度の試掘調査で新規発見された中河内地域の東大阪市呉竹遺跡では古墳時代後期から飛鳥時代にかけての掘立柱建物と区画溝を調査した。

このほか、南河内地域にあり双円墳として知られる国史跡金山古墳の近傍で、道路建設に伴う試掘調査を実施し、古墳時代と考えられる柱穴や土坑を検出した。芹生谷遺跡（河南町）と命名され、20年度以降に本調査を行う予定である。

奈良・平安時代では、河南町山城廃寺の調査がある。ため池等整備事業に伴い、18年度から堤体部分の調査を行っている。19年度の調査では、一辺が約50㎝方形柱穴、下層で80㎝×60㎝の規模の柱穴を検出し、大型の掘立柱建物が存在したことが明らかとなった。ともに奈良時代のものである。

松原市高木遺跡では、奈良時代の里境、奈良～平安時代の掘立柱建物、木組井戸などが発見され、包含層から海獣葡萄鏡の破片が出土した。

時代は下るが、茨木市大岩で近世～近代の石組水路の調査を行った。安威川ダムの残土処分地となる谷の棚田に造られている。大阪府北部の能勢町に中世から構築されている「ガマ」に似るもので、希少な水利構造として重要なものである。そのため、埋蔵文化財包蔵地の取扱いはしていないが、調査を実施し写真、図面等で記録した。

整理事業と普及広報

遺物整理事業、すなわち報告書作成作業は調査事務所業務の柱となるものである。平成19年度は単独の遺物整理事業9件と、発掘調査に伴う基礎的整理事業を実施し、『大阪府埋蔵文化財調査報告』10冊と、概要報告書1冊を刊行した。

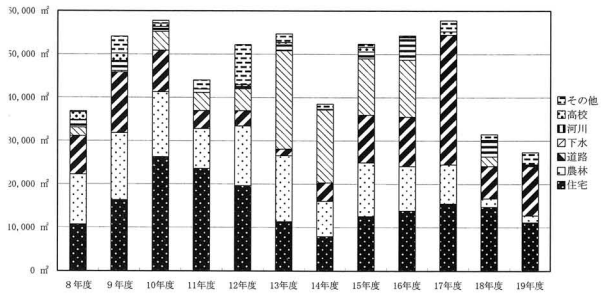
普及広報に関わるものとして、一つに発掘現場の公開があり、岸和田市寺田遺跡、茨木市福井遺跡、松原市高木遺跡の公開を行った。高木遺跡は雪舞う中の公開となり、足元も悪い状況であったが、それでも45名の方においでいただいた。このような現地及び実物資料の公開が、埋蔵文化財の活用に結びつくわけだが、調査事務所1階の展示ロビーの見学者もわずかだが増加している。基準資料として府内出土の円筒埴輪と、前期から後期までの弥生土器を展示している。また、瓦窯の移築展示も行っている。泉北丘陵の名所旧跡、資料館などを歩いて巡る団体の立ち寄りが増え、随時解説も行った。

また、泉北考古資料館を会場に、府所蔵の資料を紹介する企画展、府指定文化財である旧大阪博物場の資料を公開する優品展も継続的に行った。

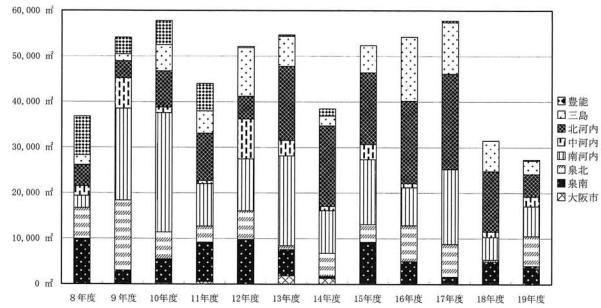
普及出版物では『文化財あれこれブックレット№3　大阪考古名所圖會』を刊行した。摂津名所図会の記載と発掘成果から、大阪の歴史を紹介するものである。

実物資料の貸し出しは、長期、短期を含めて29件、写真等の二次資料の貸し出しは52件あった。展示や出版物への掲載が主なものだが、写真は専門書や歴史関係だけでなく、自治体の広報誌に採りあげられることも増え、地域の財産、地域活性の素材として文化財へのニーズが潜在的に大きいものであることを伺わせる。

グラフ1　原因別調査面積の推移



グラフ2　地域別調査面積の推移



調査や研究、展示等を目的にした資料見学は80件である。博物館や教育委員会の業務に関わるものが多いが、個人的研究を目的とすることも増えている。どのような形であれ、本府が所蔵する資料を紹介、活用してもらえることはありがたいことである。

ところで、資料活用の前提となるのが収蔵保管のあり方である。出土資料については府内7ヶ所に分散所蔵している。府の事業部局から土地の貸与を受け、倉庫に収めているものだが、19年度にそのうち1ヶ所が閉鎖を余儀なくされ、約7,500箱のコンテナを他所に移動して仮置きした。他にも閉鎖が求められている収蔵庫がある。収蔵保管体制の抜本的な見直しが迫られている。

表3　平成19年度調査箇所一覧表（1）

調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始	調査終了	調査面積	担当者	事業課	事業名
07001	府中・豊中・板原遺跡	和泉市府中町・肥子町	発掘	平成19年4月9日	平成20年度に継続	3,350 ㎡	西口 阿部	交通道路室 街路課	都市計画道路和泉中央線
07002	新上小阪遺跡	東大阪市新上小阪	立会	平成19年4月5日	平成19年4月6日	－	岡本	大阪府水道 サービス公社	送水管更新工事
07003	桜井駅跡	三島郡島本町桜井	立会	平成19年4月11日	平成20年1月8日	－	小浜	交通道路室 交通対策課	一般府道桜井駅線自歩道整備事業
07004	林・国府遺跡	藤井寺市沢田・国府	発掘	平成19年4月10日	平成20年3月13日	310 ㎡	小山田	交通道路室 交通対策課	一般国道(旧)170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事
07005	雁屋遺跡	四條畷市雁屋北町	発掘	平成19年4月19日	平成19年5月10日	75 ㎡	岡本	交通道路室 交通対策課	一般府道四條畷停車場線歩道設置工事
07006	高木遺跡	松原市北新町	発掘	平成19年5月1日	平成20年度に継続	3,640 ㎡	枡本	交通道路室 街路課	都市計画道路堺港大堀線
07007	遺跡外	南河内郡河南町大字中～大字芹生谷	試掘	平成19年5月14日	平成19年7月6日	990 ㎡	杉本	交通道路室 道路整備課	一般国道309号（河南赤坂バイパス）道路整備工事
07008	遺跡外	吹田市南清和園町	試掘	平成19年5月15日	平成19年5月16日 平成19年11月27日	64 ㎡	山上	鉄道運輸機構	吹田信号場基盤整備工事に伴う貨物専用道
07009	九頭神遺跡	枚方市東牧野町	発掘	平成19年7月2日	平成20年2月26日	4,339 ㎡	小川	住宅経営室 住宅整備課	府営枚方東牧野住宅（建て替え）建設工事
07010	陶邑窯跡群	和泉市鍛冶屋町	発掘	平成19年5月21日	平成19年5月22日	30 ㎡	土屋	農政室 整備課	府民交流ネットワーク総合整備事業「河内長野和泉地区」（柑橘母樹園跡地整備）
07011	福井遺跡	茨木市西福井２丁目	発掘	平成19年6月5日	平成19年2月22日	1,933 ㎡	奥	住宅経営室 住宅整備課	府営茨木西福井住宅（建て替え）建設工事
07012	穂積遺跡	豊中市服部元町１丁目	立会	平成19年6月14日	平成19年6月14日	－	辻本	交通道路室 交通対策課	一般府道豊中吹田線歩道設置
07013	寺田遺跡	和泉市寺田町	発掘	平成19年7月2日	平成20年2月12日	2,365 ㎡	土屋	住宅経営室 住宅整備課	府営和泉寺田住宅（建て替え）建設工事
07014	遺跡外	泉佐野市長滝	立会	平成19年6月25日	平成19年6月25日	－	西口	住宅経営室 住宅管理課	府営長滝第１住宅エレベーター設置工事
07015	大町遺跡	岸和田市大町	発掘	平成19年6月20日	平成19年12月12日	2,470 ㎡	上林	住宅経営室 住宅整備課	府営岸和田大町住宅（建て替え）建設工事
07016	萱振遺跡	八尾市緑ヶ丘２・３丁目	立会	平成19年6月21日	平成19年6月21日	－	岡本	住宅経営室 住宅管理課	府営八尾緑ヶ丘住宅エレベーター設置工事
07017	遺跡外	堺市中区八田西町２丁	立会	平成19年6月27日	平成19年6月27日	－	西口	住宅経営室 住宅管理課	府営八田西町住宅エレベーター設置工事
07018	呉竹遺跡	東大阪市下小阪１丁目	発掘	平成19年7月20日	平成19年12月21日	1,936 ㎡	大楽 岩瀬	府警察本部 施設課	布施警察署建て替え
07019	蔀屋北遺跡	四條畷市蔀屋・砂	発掘	平成19年9月1日	平成20年度へ継続	180 ㎡	岩瀬	下水道課	なわて水みらいセンター
07020	西板持遺跡	富田林市西板持４丁目	立会	平成19年7月9日	平成19年7月10日	－	小山田	下水道課	大和川下流流域下水道石川右岸Ⅱ幹線下水管渠築造工事
07021	長尾遺跡	枚方市長尾元町１丁目	確認	平成19年7月24日	平成19年7月24日	120 ㎡	岡本	交通道路室 交通対策課	一般府道杉田口禁野線
07022	遺跡外	枚方市交北３丁目	試掘	平成19年7月26日	平成19年7月27日	18 ㎡	岡本	住宅経営室 住宅整備課	府営枚方田ノ口住宅建替え
07023	遺跡外	東大阪市中鴻池町３丁目	試掘	平成19年7月30日	平成19年7月31日	18 ㎡	岡本	住宅経営室 住宅整備課	府営東大阪中鴻池住宅建替え
07024	銭塚古墳	堺市堺区東上野芝町１丁	発掘	平成19年8月1日	平成19年9月30日	762 ㎡	橋本	教育委員会 施設課	堺養護学校整備事業
07025	上遺跡	堺市西区上61	発掘	平成19年8月9日	平成19年8月9日	12 ㎡	西口	教育委員会 施設課	府立上高校下水管放流切替工事
07026	穂積遺跡	豊中市服部寿町	立会	平成19年8月23日	平成19年8月23日	－	辻本	にぎわい創造 部空港対策室	空港周辺緑地事業
07027	橋本野岸ノ下	貝塚市橋本	試掘	平成19年9月3日	平成19年9月5日	26 ㎡	上林	住宅経営室	府営貝塚橋本住宅建替え
07028	ミクリ遺跡	高槻市西町	発掘	平成19年9月3日	平成19年10月31日	138 ㎡	小浜	交通道路室 街路課	都市計画道路富田奈佐原線整備事業
07029	桜井駅跡	三島郡島本町桜井１丁目	発掘	平成19年9月26日	平成19年10月22日	127 ㎡	小浜	交通道路室 交通対策課	一般府道桜井駅跡線自歩道整備工事
07030	遺跡外	交野市私部西４丁目	試掘	平成19年8月27日	平成19年8月27日	4 ㎡	山上	交通道路室 道路整備課	国道168号線道路整備事業
07031	安満遺跡	高槻市八丁畷町	立会	平成19年9月19日	平成19年9月19日	－	辻本	水道部北部 水道事業所	大阪府工業用水道増補改良工事
07032	安威城跡	茨木市安威２丁目	発掘	平成19年8月30日	平成19年11月30日	550 ㎡	辻本	交通道路室 道路整備課	主要地方道茨木亀岡線道路整備事業
07033	久宝寺遺跡	八尾市渋川町他	確認	平成19年10月5日	平成19年12月4日	150 ㎡	岡本	交通道路室 交通対策課	大阪港八尾線交通安全施設等整備事業

表４　平成 19 年度調査箇所一覧表（2）

調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始	調査終了	調査面積	担当者	事業課	事業名
07034	遺跡外	吹田市平松町	試掘	平成19年10月12日	平成19年10月12日	－	山上	鉄道運輸機構	吹田信号場基盤整備工事
07035	西福井遺跡	茨木市西福井１丁目	立会	平成19年10月16日	平成19年10月16日	－	辻本	交通道路室 道路整備課	主要地方道余野茨木線道路整備事業
07036	津田西遺跡隣接地	枚方市津田元町	立会	平成19年10月17日	平成19年10月17日	－	岡本	交通道路室 交通対策課	一般府道杉田口禁野線交通暗線施設等整備事業
07037	出雲井遺跡群	東大阪市出雲井町	立会	平成19年10月19日	平成19年10月19日	－	岡本	公園課	枚岡公園梅林地区整備工事
07038	千里丘遺跡	摂津市千里丘	発掘	平成19年11月1日	平成19年11月22日	157 ㎡	小浜	交通道路室 街路課	都市計画道路千里丘三島線整備事業
07039	禁野本町遺跡	枚方市禁野本町１～２丁目	発掘	平成19年11月1日	平成19年11月27日	204 ㎡	岡本	交通道路室 街路課	都市計画道路枚方藤坂線整備事業
07040	太井遺跡	河内長野市太井	確認	平成19年10月16日	平成20年1月31日	240 ㎡	小山田	農政室 整備課	府営農村振興整備事業
07041	高木遺跡	河内長野市日野	確認	平成19年11月5日	平成20年1月31日	48 ㎡	小山田	農政室 整備課	府営農村振興整備事業
07042	高向神社南遺跡	河内長野市高向	発掘	平成19年11月6日	平成20年2月29日	470 ㎡	小山田 尾谷	農政室 整備課	府営農村振興整備事業
07043	山城廃寺	南河内郡河南町大字宮前	発掘	平成19年11月21日	平成20年3月14日	776 ㎡	杉本	農政室 整備課	府営ため池等整備事業「山城新池地区」
07044	新田遺跡	大東市新田北町	立会	平成19年11月15日	平成19年11月15日	－	岡本	水道部東部 水道事業所	配水管布設工事
07045	久宝寺遺跡	八尾市竜華２丁目	立会	平成19年11月28日	平成19年11月28日	－	岡本	下水道課	環境保全センター水処理施設築造工事
07046	遺跡外	茨木市大岩	試掘	平成19年11月30日	平成20年1月9日	204 ㎡	辻本	河川室 ダム砂防課	安威川ダム建設事業大岩残土処分地
07047	田尻遺跡	泉南郡田尻町吉見	発掘	平成19年9月11日	平成20年度に継続	987 ㎡	橋本 中野	交通道路室 交通対策課	一般府道新家田尻線歩道設置工事
07048	出屋敷遺跡	枚方市山田池南町２丁目	立会	平成20年1月15日	平成20年1月15日	－	岡本	公園課	公園造成（非常用発電施設）
07049	向井池遺跡	泉佐野市上之郷	確認	平成20年1月25日	平成20年1月25日	26 ㎡	上林	公園課	樹林地整備工事
07050	鳳東町遺跡	堺市西区鳳東町	立会	平成20年1月31日	平成20年1月31日	－	上林	税務課	非常用発電設備工事
07051	中山ドンパ遺跡 百済寺遺跡	枚方市宮之阪３丁目	立会	平成20年1月29日	平成20年1月29日	－	岡本	交通道路室 交通対策課	一般府道枚方茨木線交通安全施設等整備事業
07052	西堤遺跡	東大阪市御厨２丁目	立会	平成20年1月31日	平成20年1月31日	－	岡本	河川室 河川整備課	堤防天端整備工事
07053	久宝寺遺跡	八尾市神武町	立会	平成20年1月31日	平成20年1月31日	－	岡本	水道部東部 水道事業所	配水管布設工事
07054	遺跡外	岸和田市三ヶ山町	試掘	平成20年1月8日	平成20年2月7日	550 ㎡	橋本	交通道路室 道路整備課	府道春木岸和田線道路整備工事
07055	深日遺跡	泉南郡岬町深日	確認	平成20年2月8日	平成20年2月8日	10 ㎡	橋本	交通道路室 交通対策課	府道岬加太港線歩道設置工事
07056	遺跡外（服部西遺跡隣接）	豊中市利倉２丁目	立会	平成20年1月31日	平成20年1月31日	－	辻本	交通道路室 交通対策課	府道豊中吹田線道路拡幅
07057	鬼虎川遺跡	東大阪市新町	立会	平成20年2月27日	平成20年2月27日	－	岡本	水道部東部 水道事業所	配水管布設工事
07058	陶邑窯跡群	堺市中区上之	立会	平成20年2月26日	平成20年2月26日	－	西口	水道部南部 水道事業所	送水管布設工事
07059	遺跡外	羽曳野市学園前５丁目他	試掘	平成20年3月17日	平成20年3月31日	60 ㎡	小山田	交通道路室 街路課	都市計画道路八尾富田林線
07060	野田遺跡・東円寺跡	泉南郡熊取町野田２丁目	確認	平成19年6月13日	平成19年6月13日	8㎡	橋本	交通道路室 交通対策課	一般国道(旧)170号歩道設置工事

大岩地区の石組水路
桜井駅跡
安威城跡
福井遺跡
九頭神遺跡
禁野本町遺跡
ミクリ遺跡
千里丘遺跡
蔀屋北遺跡
雁屋遺跡
《大阪湾》
呉竹遺跡
久宝寺遺跡
高木遺跡
林・国府遺跡
銭塚古墳
山城廃寺
府中・豊中・板原遺跡
寺田遺跡
芹生谷遺跡
大町遺跡
陶邑窯跡群
高向神社南遺跡
橋本野岸ノ下遺跡
高木遺跡
太井遺跡
田尻遺跡
0
5
10 km

図1　調査位置図

府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡（０７００１）

（１）和泉市府中町・肥子町地内
（２）都市計画道路和泉中央線
（３）阿部幸一

調査は国道26号線穴田交差点から府道大阪和泉泉南線の市役所北交差点間約630ｍの幅員を広げ、ＪＲ阪和線と立体交差化（アンダーパス化）する工事に伴うもので、2002年度から断続的に行なっている。調査は３遺跡に跨っているが、その遺跡区分はＪＲ阪和線の山側（府中町）が府中遺跡、海側（肥子町）の府中病院、肥子池公園周辺が豊中遺跡、肥子池公園から西側は板原遺跡である。

07年度、府中遺跡では480号線の和歌山側（南側）拡幅部、豊中遺跡では府中病院隣接地とサティ隣接地、板原遺跡では薬局隣接地で調査を実施した。調査地は交通量が多い幹線道路で、且つ事業所や病院、店舗、民家が密集しており、通路や工事ヤードを確保する必要があり、細かく分割しての調査となった。調査面積は約1500㎡であった。

ＪＲ阪和線の山側は、国道に沿って幅約２ｍの農業用水路があり、暗渠化した上に事業所や店舗、民家が並んでいたので、建物の基礎工事による地山の削平、攪乱が各所にみられた。しかし、市役所北交差点に近い調査区（5、6区）で、02年度の調査で検出された方形周溝墓に関連する弥生時代中期の土器を含む溝や土坑、古墳時代前期のピット等を検出した。また、その西側の１区では攪乱土直下で弥生時代中期の土坑、２区では鎌倉時代の素掘り井戸を検出した。ＪＲ阪和線に近い９区では地表下1.2～1.5ｍ付近に堆積する緑灰色粘土層から縄文時代中期～後期頃の土器が出土したが、遺構を確認することはできなかった。

阪和線の西側、豊中遺跡では国道南側を沿って流れる用水路の下で、この地域の条里地割りに対応する溝、府中病院側では中・近世の耕作溝や古墳時代の溝を検出した。

また　板原遺跡に含まれる08－11区では、前記用水路に対応する位置で、長さ約30ｍ、幅１ｍの溝で区画された屋敷地を３ヵ所検出しており、条里区画に則った鎌倉時代の屋敷が並んでいたと考えている。また、この11区では、中世と同じ面で弥生時代中期の土坑も検出しており、当地の弥生時代集落が東西500ｍ以上の広がりを持つことが明らかとなった。

08年度は、道路を既調査部に切り替え、現道部分の調査を行う予定である。

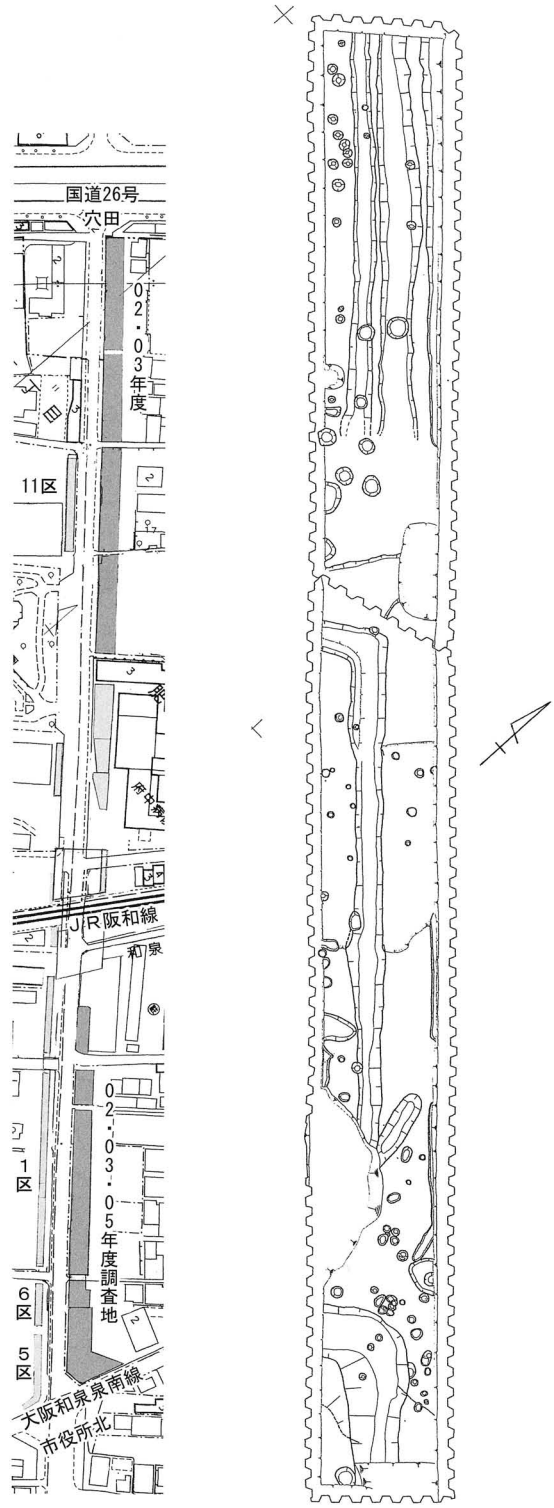


図２　これまでの調査地点と05－11区平面図(S=1/300)

さくらい えきあと
桜井駅跡（０７００３・０７０２９）

（１）三島郡島本町桜井１丁目
（２）一般府道桜井駅跡線自歩道整備工事
（３）岡本敏行　小浜　成

調査の経過

調査地は、国史跡「桜井駅跡（楠木正成伝承地）」の隣接地にあたり、新駅のＪＲ島本駅と阪急水無瀬駅を連結する一般府道桜井駅跡線の北側拡幅部分の一部と、南側の電線共同溝敷設部分９箇所である。本工事にかかる発掘調査は平成17年度から実施しており、今回はその最終となる調査である。

調査成果

現在の整地層（第１層）および近現代の旧耕作土層（第２層）の下層で、平安時代末頃から近世までの堆積層が見つかった。大きく３～６層までの４層を確認した。いずれも耕作土層とみられる。第３層は、中世から近世にまたがる時期である。上面で、南北方向の鋤溝と調査区東端で同じ南北方向の幅1.95m、幅0.53mの溝を検出した。径10～15cm程度の杭跡が溝の両肩に沿って認められた。第４・５層は、中世の時期である。特に、第４層は永楽通寶が出土しており、中世でも後期の室町時代に入る。第６層は、平安時代末頃を含む中世前期の鎌倉時代である。この上面でも南北方向に走る鋤溝を検出した。また、第６層中には、馬一頭分に該当する馬歯が出土した。この層から耕作が始められていることから、当地を耕作地として利用する際に地鎮の意図を込めて埋められたのではないかと考えられる。

その下層の第８層（G.L.－1.1m）は、長さ３～10cm程度の礫が約30cm堆積した層であった。ただし、この礫層は調査区西半部のみに認められた。河川氾濫による自然堆積層と思われる。第８層の東側の緩傾斜面に堆積した第７層は、古墳時代の土器包含層であった。

なお、第８層の礫は、東側の第７層上面にも密に散らばっており、礫が人為的に二次利用された可能性も考えられた。この場合、調査地の西隣接地を旧西国街道が走っており、古代山陽道にも遡る可能性が指摘されていることから、この礫の広がりは路面強化のための路盤痕跡とみることもできよう。

まとめ

桜井駅跡の土地利用については、前年度までの調査所見と同様であり、平安時代～中・近世は耕作地として利用されていたことが明確となった。また、古墳時代以前の遺構が、河川氾濫の影響を受けていない微高地に広がる可能性がより高まった。

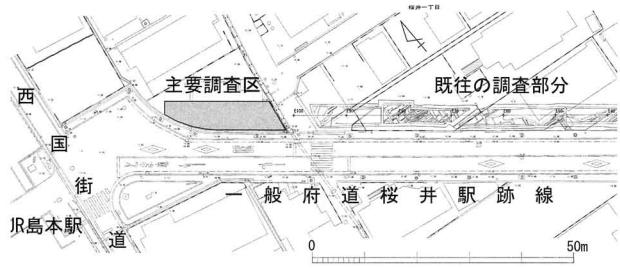


図３　調査位置図

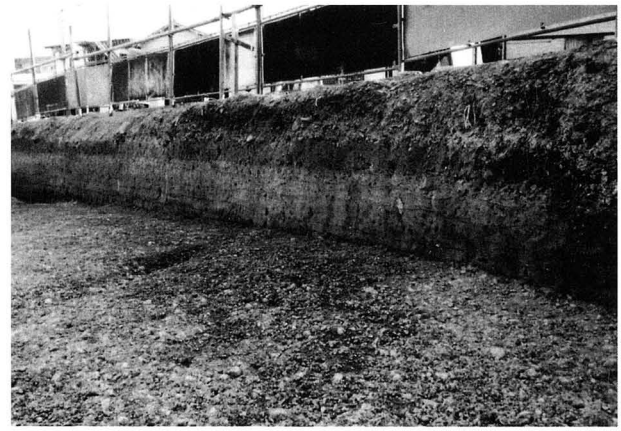


図４　調査区南壁断面と礫の広がり

図５　調査区全景（第８層上面）

林遺跡・国府遺跡（０７００４）

（１）藤井寺市沢田・国府

（２）一般国道（旧）170 号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事

（３）小山田宏一

はじめに

主要地方道堺大和高田線の拡幅にともなう近鉄「土師の里駅」駅舎の改修箇所と、国道旧 170 号線橋脚の切り替えにともなう電柱移設箇所の調査を実施した。駅舎改修箇所は唐櫃山古墳の西側、電柱移設箇所は鍋塚古墳の北にあたる。

調査成果

駅舎改修箇所は、南北 6.5 m、東西 45 mの調査区を設置した。現道盛土（層厚 2.5 ～ 3.0 m）とその下の堺大和高田線敷設前の作土を除去すると、調査区東半部から唐櫃山古墳の墳丘と壕が現れた。

墳丘は後円部裾にあたり、調査トレンチ北東隅を中点とする半径 4 mの円弧を描く。墳丘裾は、近世以降の盛土で覆われていた。濠は幅 7 m、深さ 1.2 m、壕底に水成堆積層がなく、埋められるまで空壕あったと判断される。

壕内埋土には葺石、埴輪が多量に含まれていた。埴輪は 5 世紀後半の特徴があり、窟窯焼成である。円筒埴輪のほかに、家形埴輪、衣蓋形埴輪の破片がある。竪穴式石槨の石材と推定される板石もある。

電柱移設箇所は 1 × 2 mの調査トレンチを 4 箇所設置（1 ～ 4）した。鍋塚墳丘裾付近の調査トレンチ 1・2 は、ガラスやビニールが混じる整地層を除去すると、作土が現れ、その下は段丘層であった。

一方、現墳丘裾から北へ約 10 m離れた調査トレンチ 4 は、作土下に地山がなく、礫や埴輪片編が含まれる堆積土があった。深さ 0.6 mである。調査トレンチ 3 は擁壁の裏込めにあたり、調査トレンチ 4 の堆積土の続きは確認できなかった。

まとめ

駅舎改修箇所の調査成果は、唐櫃山古墳の復元資料になる。電柱移設箇所は調査区が狭くと、現状では断定できないけれど、鍋塚古墳の墳丘裾部テラスの資料になると思われる。

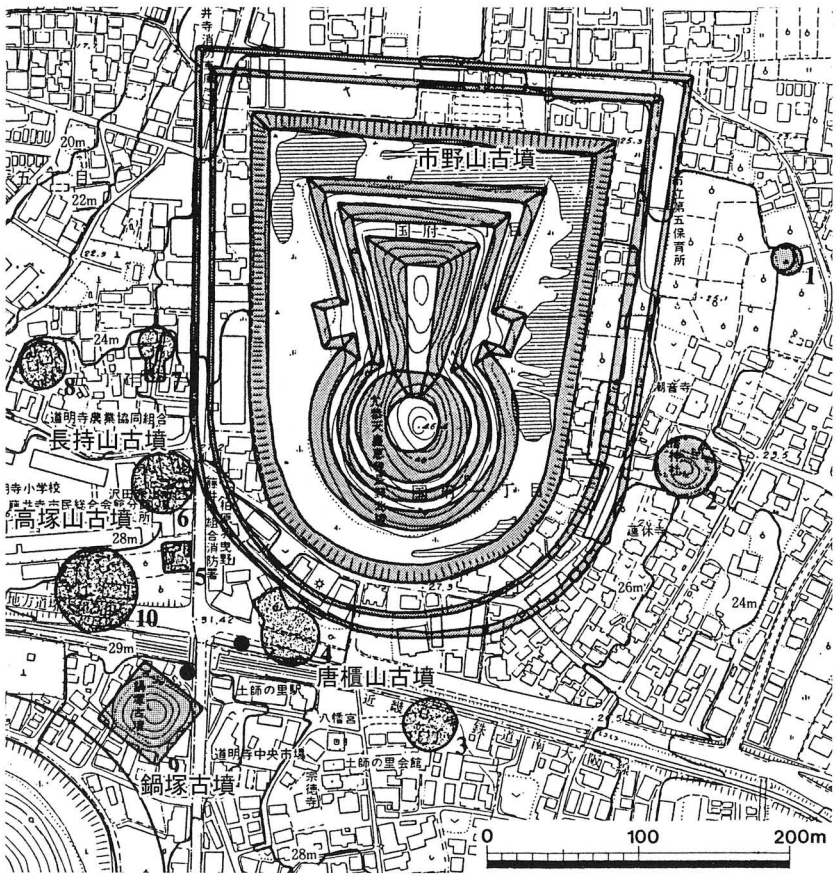


図６　唐櫃山古墳と周辺の古墳

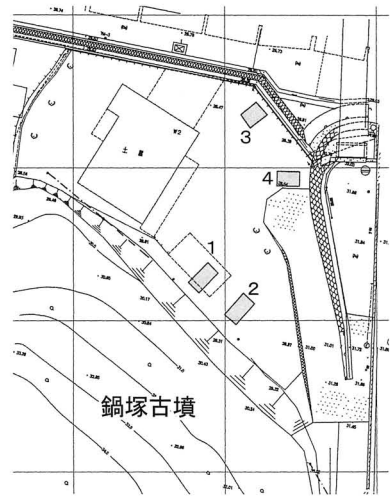


図７　鍋塚古墳北の調査トレンチ位置図（1:500）

かりや
雁屋遺跡（０７００５）

（１）四條畷市雁屋北町

（２）一般府道四条畷停車場線歩道設置工事

（３）岡本敏行

はじめに

雁屋遺跡は、四條畷市雁屋北町から江瀬美町、美田町にかけて所在する弥生時代中期～後期の大規模な集落遺跡である。その範囲は四條畷高校を中心として東西 500 m、南北 800 mと推定されており、これまでに四條畷高校の校舎建替えや周辺部の保健所改修、病院建設等に伴う調査で住居跡をはじめ方形周溝墓等が発見されている。

今回の調査は一般府道四条畷停車場線歩道設置工事に伴う事前調査であり、調査対象地は四條畷高校の東側に接する部分南北約 100 mである。しかし、当該地は幅が狭く（2.0 ～ 3.5 m）、遺構面までが深いこともあって（1.5 ～ 2.0 m）、安全面を考慮して面的な調査は不可能と判断し、主に土層断面調査で対処することとした。それでも実際に調査できたのは北側 70 mで、南側 30 mについては断念せざるを得なかった。

調査成果

本調査地区は、生駒山系の西側に発達した扇状地の末端部に位置し、南から北方向に緩やかに下降する。土層の堆積状況は地点によって異なるが、（調査した深度内では）基本的に上から盛土（整地土・撹乱土を含む）、茶褐色系の砂質土もしくシルト、灰褐色系の砂質土もしくは砂、黒灰色粘質土、暗灰色シルトの５層に分層ができ、さらに個々の堆積層は場所によっては２～３層の細分が可能である。このうち最下層の暗灰色シルト層が弥生時代遺構面のベース層と考えられる。ちなみに遺構面までの深さは表土より－ 1.5 m前後を測り、海抜にして調査区南側四條畷高校正門前で T.P ＋ 7.0 m、北端で T.P ＋ 6.4 m前後の高さを測る。

検出した遺構は、溝２条と自然流路で、土層断面観察で見る限りでは住居等の遺構は検出されなかった（図８参照）。溝１は調査区の北側で検出した幅 1.0 m、深さ 0.4 m、断面コ字形を呈した東西方向の溝である。埋土は明褐色の砂のみが堆積し、しかも上面にも同じ砂が厚く堆積していることから、洪水等でいっきに埋まったものと考えられる。遺物は出土しなかったが、黒灰色粘質土を切っていることから、弥生時代よりは明らかに新しく、周辺部の調査から奈良時代の遺構と推察する。

溝２は調査区の中央部で検出した幅 3.4 m、深さ 0.5 m以上を測り、断面Ｕ字形を呈した東西方向の溝である。埋土は暗緑灰色砂で、遺物は出土しなかったが、周辺部の調査及び層順より弥生時代中期の溝と考えられる。自然流路は南側肩部のみの検出であったが、中央部北側、黒灰色粘質土の下層で検出した。層順から弥生時代以前の流路で、現四條畷高校北側を流れるえせび川の前身流路と考えられる。

出土遺物は極めて少なく、調査区中央部で南西側から流出したと考えられる（黒灰色粘質土上面に堆積した砂層より出土）弥生時代中期の壷もしくは甕の底部が１点出土したのみである。

まとめ

今回の調査では、直接弥生集落にかかわる遺構は検出されなかったが、溝等の関連遺構が検出されたことから、当該地が四條畷高校で検出された弥生集落の東端部であることが判明した。

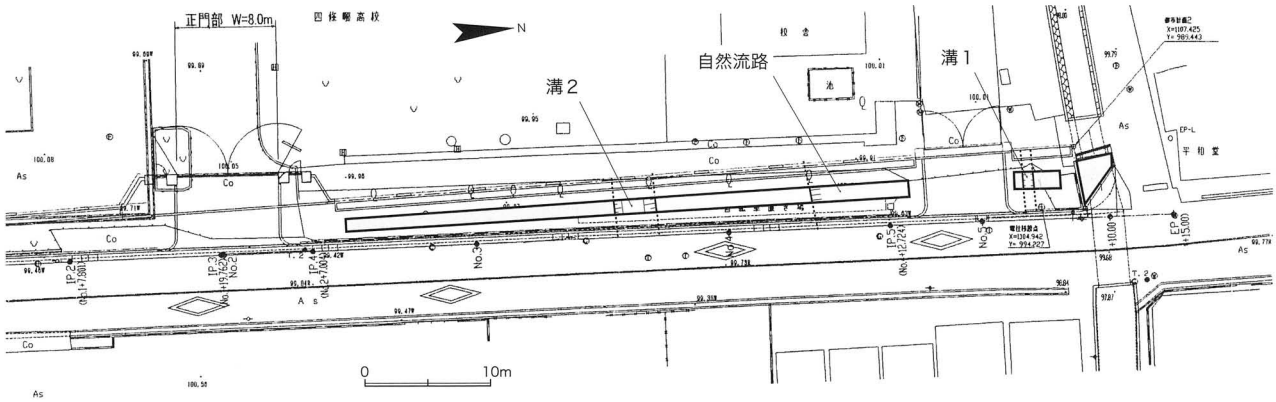


図８　雁屋遺跡調査区位置図

高木（たかぎ）遺跡（０７００６）

（１）松原市北新町４丁目
（２）都市計画道路堺港大堀線整備事業
（３）枡本　哲

平成18年度実施した確認調査に基づき、上記事業地内の1851㎡を対象として発掘調査をおこなった。その結果、弥生時代後期、奈良・平安時代そして中世の集落、耕地の跡を検出した。主要な遺構・遺物は以下の通りである。

弥生時代後期円形竪穴住居跡１棟（直径6.8 m）、同方形竪穴住居跡１棟（3.6 × 3.1 m）。前者には柱穴５個所、中央に炉跡があり、最初の住居の上屋を拡げてひとまわり大きくしている。古い周溝を埋めて床面を敷き均し、その拡張した周囲に新しく掘り込んだ周溝が巡る。後者は柱穴が２箇所で、相対するその柱の上に差し渡した横木に両斜面の屋根が掛けられたようである。

奈良時代の条里の里境跡は、調査区西端から東約45メートル地点で、南北方向の畦畔状の高まり（東西４～５メートル）の形として確認した。位置は難波大道を基準に東へ進む１条と２条を区切る里境に当る。

掘立柱建物は奈良時代のもの６棟前後、平安時代のもの３棟である。奈良時代の建物は東半部遺構群の東端近くに多く、平安時代の建物は東半部遺構群の西から西半部遺構群の東にかけて掘り込まれている。どの建物も方向は上記の地割にほぼ揃う。

奈良時代後期から平安前期、中世、近世の井戸跡は11基を検出した。奈良時代後期～平安前期のものは木組みで、径2.0 ～ 2.5mの掘り方の底に一辺0.7 ～ 0.8m木枠を据えている。埋め土から「富寿神宝」や平安軒瓦、横櫛をはじめ壷・椀など土器類が出土した。中世の井戸には12世紀の瓦器椀の完形品１点が出土したものがある。

海獣葡萄鏡の破片が奈良時代の建物廃絶後の整地層より出土した。径10cm以下の小型品で損傷激しいが、鏡体の特に外縁の残りはよく、また部分的ではあるが内区の葡萄文の痕跡もとどめている。

旧河内湖へ流入する大和川へと注ぐ「流川（ながれがわ）」の、狭隘な自然堤防上における弥生時代後期の集落の立地が判明したことから、松原市教育委員会がこれより南の大池周辺でおこなった調査で検出した弥生時代中期の集落との関係が注意されよう。また今回検出した南北方向の里境跡は、平成14年に市教育委員会によって今回の調査区の南約75メートルで発見された東西方向の里境に交差すると考えられる。

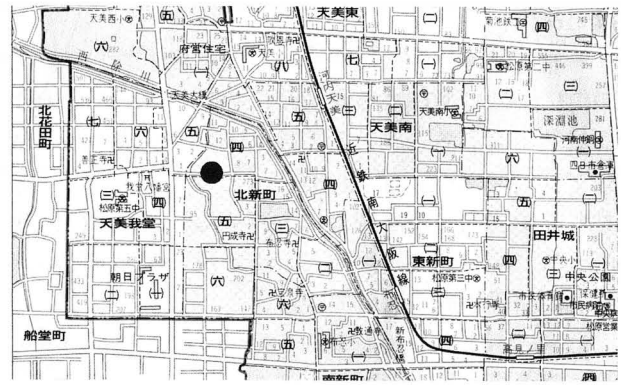


図９　調査区位置図

図10　東半部建物群（西より）

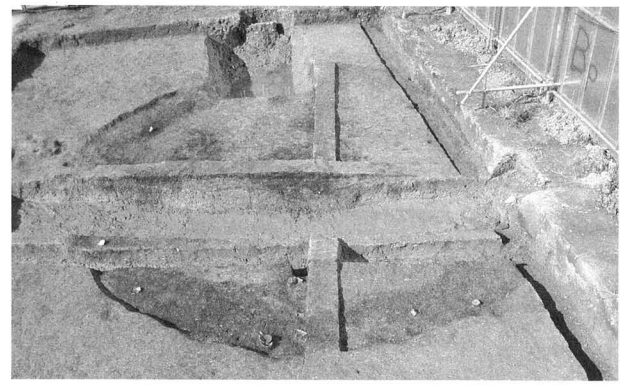


図11　竪穴住居跡（東より）

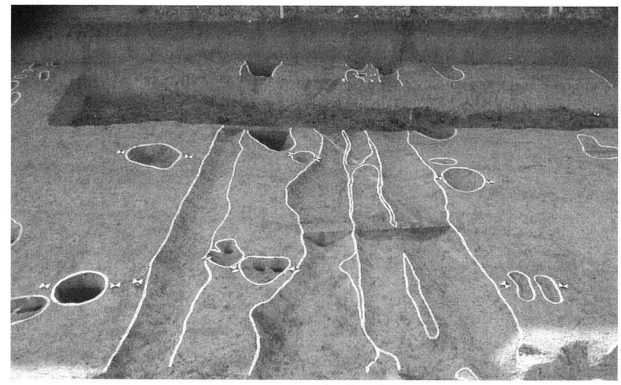


図12　里境跡（北より）

せ る たに
芹生谷遺跡（０７００７）

（１）南河内郡河南町大字中～大字芹生谷
（２）一般国道 309 号 (河南赤坂バイパス) 道路整備工事
（３）杉本清美

はじめに

本府都市整備局は長期にわたり一般国道 309 号線の整備事業を進めている。今回の調査は、南河内郡河南町大字中から同町大字芹生谷までの河南赤阪バイパス区間、延長約 750 mにおける埋蔵文化財試掘調査である。新設道路予定地内に幅約 1.2 m のトレンチを 27 箇所設定し、平成 19 年 5 月 14 日から 7 月 6 日まで調査を実施した。調査面積は、1160㎡を測る。調査区の西側には、史跡金山古墳が近接する。

調査の概要

1 ～ 10 区は、北側になだらかに低くなる丘陵部に位置する。段々に切り込まれた耕作地の 1 筆毎に調査トレンチを設定した。段前部では旧耕土の堆積がみられたが、段後部では上層部が削平され、現代耕土直下で地山層となる。概ね段前部で、中世代の建物ピットや溝を検出し、瓦器、土師質土器、須恵器片を含む包含層を確認した。更に地山直上面では、古墳時代相当の建物ピットや焼土坑、溝などを検出し、須恵器、土師器片を含む包含層を確認した。

11・12・16 ～ 23 区は、金山古墳が位置する丘陵の西側に南北方向に走る谷部に位置する。埋没河川内からは土師器片が出土した。旧河道周辺では、瓦器、土師器片を含む包含層が見られた。

13 ～ 15 区は、金山古墳が位置する丘陵と谷部を挟んで北側に伸びる丘陵の先端部に位置する。地山直上層で土坑、ピットなどを検出し、土師器、瓦器片を含む包含層を確認した。

24 ～ 27 区は、谷部の西側で北側に伸びる丘陵の東側斜面に位置する。段丘頂部はやや削平を受けるが、斜面前部で、瓦器、土師器片を含む中世の包含層や黒色土器、須恵器片を含む包含層を確認した。地山直上面で、土坑状遺構などを検出した。

まとめ

調査の結果、新設道路予定地内全域について、工事着工前に発掘調査が必要とした。試掘調査の結果をうけ、河南町教育委員会及び近接する千早赤阪村教育委員会が協議をし、道路予定地と周辺地を含む部分を遺跡範囲とする新規発見遺跡として、「芹生谷遺跡」と命名された。

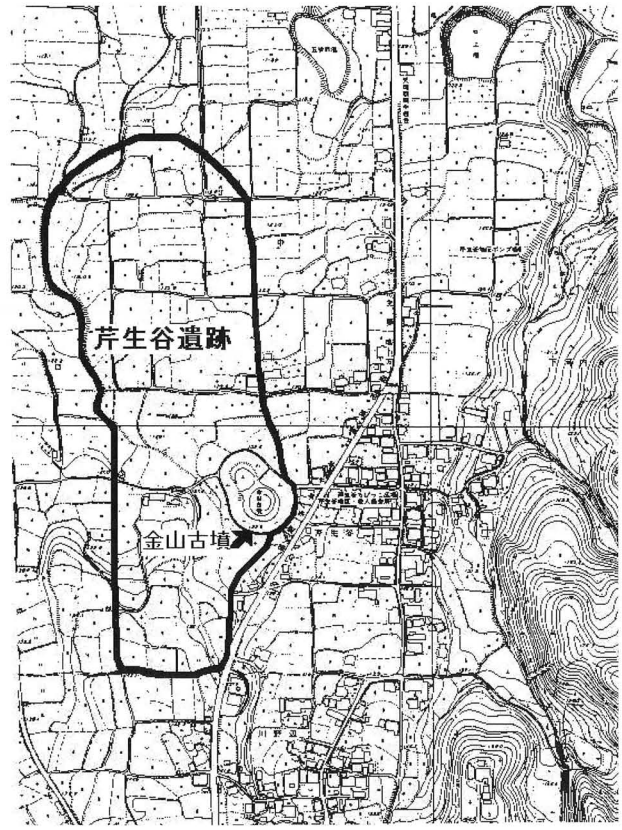


図 13　芹生谷遺跡範囲図

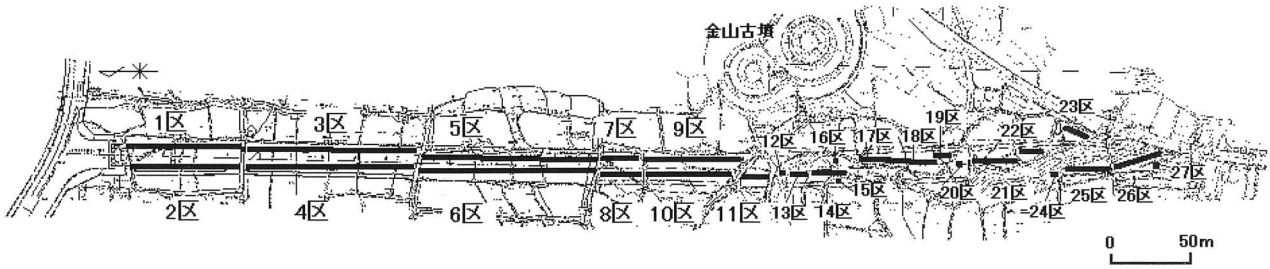


図 14　調査区位置図　（1 区～ 27 区）

九頭神遺跡（０７００９）

（１）枚方市東牧野町地内
（２）府営枚方東牧野住宅（建て替え）建設工事
（３）小川裕見子

はじめに

府営枚方東牧野住宅建替第５期工事に伴い、約3500㎡の範囲に渡って発掘調査をおこなった。本調査区は、九頭神遺跡の東端にあたり、調査区東端に接する道路を挟んで西側には、招題中町遺跡が存在する。前年度までの調査区は、この招提中町遺跡に位置し、古墳時代前期と推定される竪穴住居、平安時代の総柱建物などを検出した。西には飛鳥時代後期の創建として知られる九頭神廃寺が位置する。

調査の概要

調査区を東西２区に分けて調査を行ったが、原地形は南西方向に下る傾斜をもち、調査区の250ｍほど南を流れる穂谷川に向けて谷地形が存在すると考える。今回の調査結果を踏まえたこの谷の復原は、九頭神廃寺の寺域の推定につながるであろう。調査区内では、残存状況の良い北側においては、主に３面の遺構面を確認することができ、上層２面の遺構は溝、井戸、北東―南西方向の鋤溝、柱穴の痕跡などであったが、府営住宅に伴っていた基礎や配管などの攪乱によって遺構の削平が著しかった。出土遺物が極端に少ないため、時期の限定が難しいが、瓦器椀や土師皿の破片が数点出土した。

東調査区南半、地山上の第３遺構面においては、弥生時代の方形周溝墓を３基検出した。内１基（方形周溝墓１）は、南側の周溝は削平されていたものの比較的残存状況がよく、東側・西側の周溝内において弥生時代中期のものと思われる弥生式土器片が集中して出土した。西側周溝においては、周溝内埋葬の痕跡と見られる土坑を検出した。

その西側では方形周溝墓２を検出した。方形周溝墓２は墓の西側と南側を大幅に削平されており、周溝が東側から北側へ屈曲する箇所をわずかに検出したのみであった。また、東側の周溝は中世の耕作地の区画溝と考える南北溝に切られた状態であった。北側周溝の東端において、弥生式土器片が出土した。どれも土器の劣化が著しく、時期・器形の同定は難しいが、方形周溝墓１と同時期であると考えられる。

また、方形周溝墓１の北側において方形周溝墓３を検出したが、削平が著しく溝の一部を検出したのみであった。地山が方形周溝墓１の西側から西にかけてやや上昇しているため遺構面は削平されており、墓域の西限は確認できなかった。ただ、西調査区中央部において地山は再度下降して谷地形を形成する。調査区の北半においても、微地形が下降する付近で墓域はなくなり、微高地内に集中して墓が築造され、墓域は調査区の南～東にかけて広がった可能性が高い。

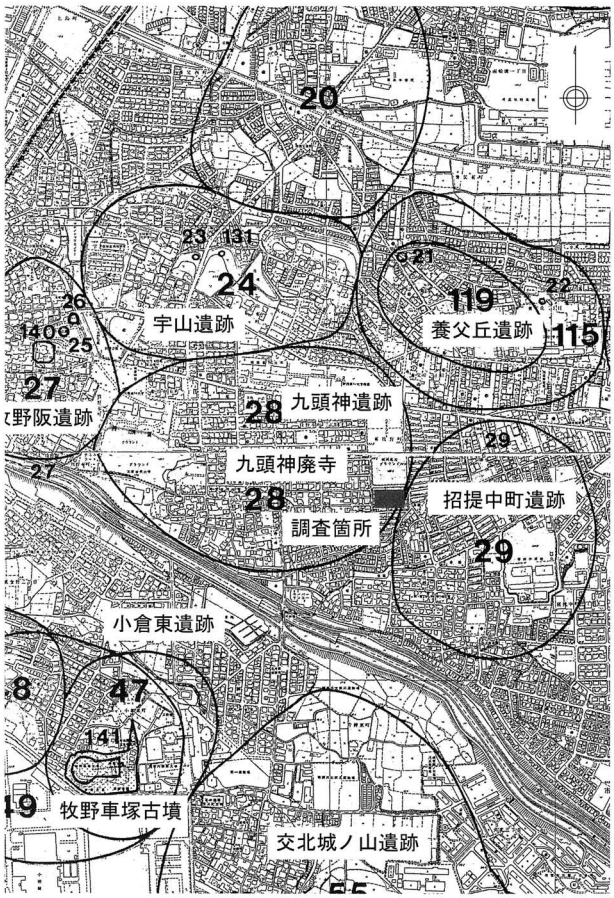


図15　九頭神遺跡調査位置と周辺の遺跡

図16　方形周溝墓１（南から）

すえむらかまあとぐん
陶邑窯跡群（０７０１０）

（１）和泉市鍛冶屋町
（２）府営交流ネットワーク総合整備事業「河内長野和泉地区」（柑橘母樹園跡地整備）
（３）橋本高明　土屋みづほ

調査地は、陶邑窯跡群谷山池地区内に位置する。谷山池地区では、既往の調査によって、74 基の窯跡が確認されており、古墳時代後期に須恵器生産が開始されたことが明らかになっている。今回の調査区から約 30m 東側には、平成 10 年に調査を行った谷山池 12 号窯跡が所在しており、古墳時代後期の須恵器窯跡 1 基の焼成部と灰原が確認されている。平成 19 年度の調査は、府営交流ネットワーク総合整備事業に伴う道路工事に先立ち、事業予定地内の窯跡の有無を確認することを目的として行ったものである。

調査区は丘陵東斜面に位置し、南西から北東に向かって低くなる。現地表面のレベルは T.P. ＋ 95.0 ～ 96.9m である。調査区は T 字形に設定し、東西方向の調査区（A 区）は、長さ 12m、幅 2m、その南に接続する南北方向の調査区（B 区）は、長さ 3 m、幅 2 m である。

厚さ 0.1 ～ 0.2m の表土を除去すると、褐色砂質土が 0.3 ～ 1.0 m堆積し、その下に灰白色粘土が堆積する。灰白色粘土からは遺物が出土せず、地山であると判断している。地山上面のレベルは、A 区南西で最も高く T.P. ＋ 96.1 m、A 区北東で最も低く T.P. ＋ 94.5 mである。A 区西端では、南側へ向かって地山面が急激に落ち込んでいるのが確認できた。また、B 区南東部においても、地山面が北西側へ急激に落ち込んでいることが確認できる。したがって、調査区内において、地山はすでに削平を受けており、褐色砂質土を盛土として造成が行われたと考えられる。

A 区東側では、地山上面で、弧状の溝 1 条を検出した。溝の全長は約 9m、上辺幅は 0.4 ～ 0.6m、下辺幅は約 0.1m、深さは約 0.3m である。溝は褐色砂質土によって一時期に埋められていることから、現代に掘削されたものと考えられる。

遺物は、褐色砂質土より、平瓦 1 点と、古墳時代後期の須恵器杯身 1 点が出土した。現代盛土からの出土ではあるが、周辺に存在する古墳時代の窯跡の関連遺物である可能性が考えられる。

今回の調査区では、遺構、遺物包含層とも発見されなかったため、事業実施にあたって本発掘調査の必要はなく、慎重工事との判断をした。

図 17　調査区位置図（S=1/25000）

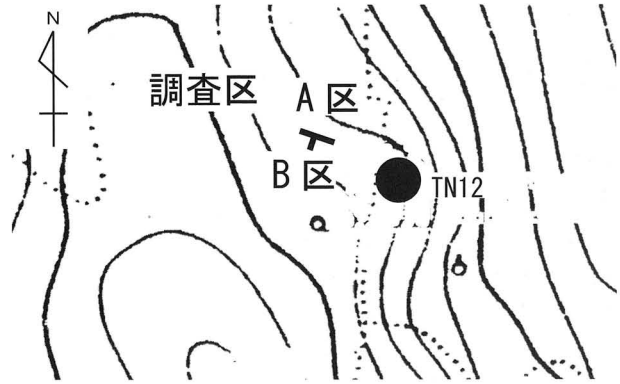


図 18　調査区配置図（S=1/2500）

図 19　A 区西壁　（東から）

福井（ふくい）遺跡（０７０１１）

（１）茨木市西福井２丁目
（２）府営茨木西福井住宅（建て替え）建設工事
（３）奥　和之

はじめに　本遺跡周辺には多くの古墳が存在することで知られており、特に北側の丘陵上に所在する紫金山古墳は、摂津三嶋地域を代表する前期の全長約110ｍの前方後円墳で、古墳の埋葬施設である竪穴式石室内から12面の鏡などの多くの副葬品が出土している。後期になると、当遺跡の東側に接して海北塚古墳、北側に青松塚古墳、南塚古墳、新屋古墳群など多くの古墳が築造されている。

調査成果　今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期初頭の古墳、古墳時代後期後半の溝、中世の柱穴などである。

古墳は、墳丘、周溝東側の丘陵斜面付近と、埋葬施設は、後世の削平のため欠失し、周溝のみ残存していた。周溝が平面形で方形に近い形をしていることから、方墳と推定される。古墳は、東西辺約６ｍ、南北約７ｍ、周溝の幅約１ｍ前後、深さ約0.2ｍ前後を測る。

古墳の東周溝から、須恵器の大甕などが出土した。大甕は、周溝東側中央付近で甕の上部が潰れ、その破片が甕内部に落ち込んだ状態で出土した。甕底部には15㎝前後の石が置かれ、甕底部下は、溝底の地山をやや掘り窪めていた。これらの状況から甕を周構内に直立させるために行ったものと推定される。甕は、直径約32㎝、高さ72㎝を測る。これ以外の遺物は、須恵器の杯身、杯蓋や提瓶などがある。

出土遺物から古墳の時期は、古墳時代後期初頭（６世紀初め）のものと推定される。

その他の遺物としては、埴輪、須恵器、土師器や瓦器などがある。埴輪の種類は、円筒埴輪・形象埴輪である。このことから調査区に極近い場所に、埴輪を伴った古墳が存在した可能性が高い。

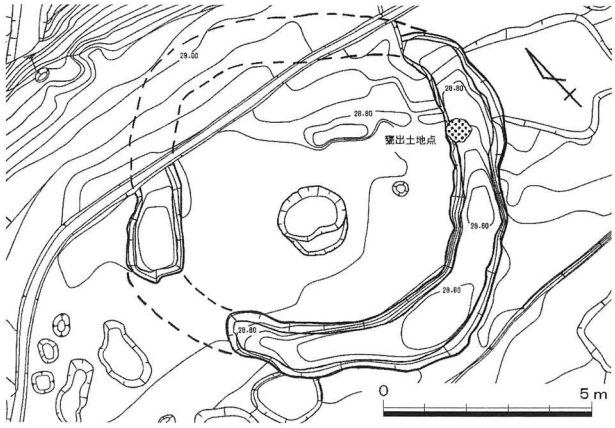


図20　古墳平面図

まとめ　今回検出した古墳は、丘陵上部に存在する青松塚古墳、南塚古墳などとほぼ同時期であるが、検出した古墳は規模が異なり、一辺７ｍ前後の小規模な方墳である。また、調査区東側に存在する６世紀後半の海北塚古墳よりは古い時期のものである。

古墳は丘陵の下部に近い位置にあること、古墳の規模も小さいことから、丘陵上部にある古墳の被葬者との階層差があったものと考えている。今回の調査で発見された古墳は、１基のみであるが、盛土、遺物包含層などから埴輪片、須恵器が多数出土していることから、丘陵下部付近にはこれ以外にもいくつかの古墳が存在していたものと考えられる。

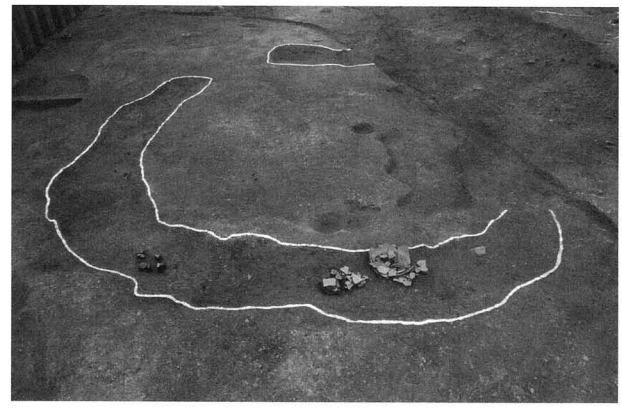


図21　古墳検出状況（東より）

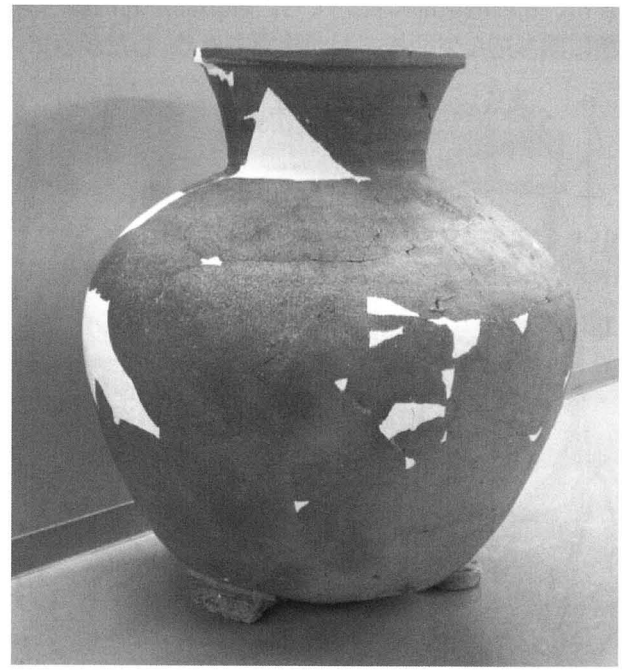


図22　須恵器大甕

てらだ
寺田遺跡（０７０１３）

（１）和泉市寺田町
（２）府営和泉寺田住宅（建て替え）建設工事
（３）橋本高明　土屋みづほ

寺田遺跡は、平成14年度に試掘調査によって発見された遺跡である。和泉市北西部、岸和田市と接する寺田町に所在し、松尾川右岸の段丘上に位置している。平成16年度の調査では、古墳時代前期から後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、流路跡のほか、中世の溝跡などが発見された。平成19年度の調査区は、平成16年度調査区から約100m南西に位置している。

遺構面は、中世、庄内式並行期から古墳時代前期、弥生時代中期から後期中頃の３面を確認した。このうち、中世と、庄内式並行期から古墳時代前期の遺構は調査区の北西側に集中するのに対し、弥生時代の遺構は調査区の南東側に集中して検出された。

中世の遺構面では、北東―南西方向および北西―南東方向の溝を検出した。溝の上辺幅は0.2～1.0m、深さは約0.1mである。遺跡周辺の条里地割に沿っており、耕作に伴うものである可能性が考えられる。溝内からは、瓦器が出土した。

庄内式並行期から古墳時代前期の遺構面では、掘立柱建物跡２棟、自然流路跡１条、土坑、ピットを検出した。土坑内からは庄内式並行期の甕が、自然流路跡内からは庄内式並行期から古墳時代前期の甕、高杯などが出土した。

弥生時代中期から後期中頃の遺構面では、竪穴住居跡２棟、溝４条のほか、土坑、ピットを検出した。このうち、溝１条から後期中頃の土器が出土しているが、他の遺構はおおむね中期後半に所属する可能性が高い。竪穴住居跡は、２棟が切りあって検出された。いずれも円形で、主柱穴は４つである。切り合いにより新しいと考えられる西側の住居が直径約７m、東側の住居跡が直径約６mを計る。西側の住居跡では、床面の張り直し、柱の建替え、溝の掘り直しを行っているのが確認できた。遺物は、竪穴住居跡内からは、高坏、甕など中期後半の弥生土器のほか、打製石鏃、蛤刃石斧などの石器が出土した。また、溝、土坑、ピット内からは、中期後半を主体とする弥生土器のほか、石庖丁、打製石鏃などの石器が出土した。

今回の調査により、寺田遺跡が弥生時代中期から人々の生活域であったことが明瞭となった。また、時期により居住域が変化していることも、新たな知見である。今回の調査で検出された弥生時代中期の居住域は、調査区の北側へ広がることが想定され、今後の調査により、弥生時代から古墳時代の生活域の変遷がより明らかになることが期待できる。周辺遺跡の調査成果ともあわせ、土地利用の変遷を明らかにしていくことが、今後の課題である。

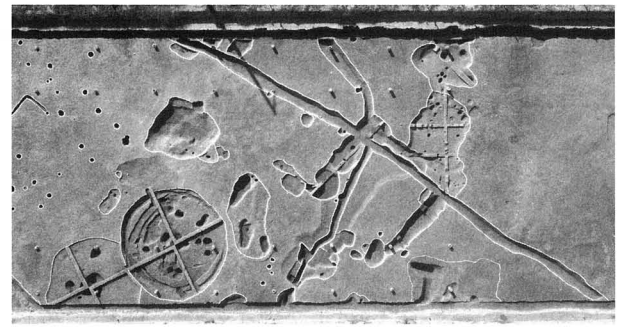


図24　弥生時代遺構全景

図23　調査区配置図（S=1/25000）

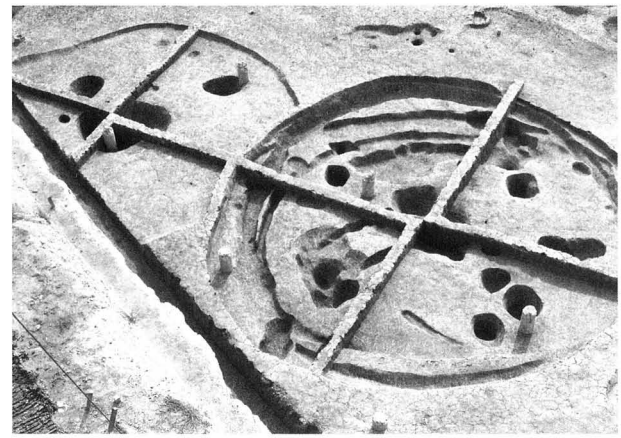


図25　竪穴住居跡　（北から）

大町（おおまち）遺跡（０７０１５）

（１）岸和田市大町

（２）府営岸和田大町住宅（建て替え）建設工事

（３）上林史郎

はじめに

今年度も昨年度に引き続き、府営岸和田大町住宅建替え（Ⅱ期）に伴う大町遺跡の発掘調査を実施した。今年度の調査区は、行基の築造と伝えられる久米田池から流下する天ノ川沿いの調査区を１区とし、そこから北東に約300m離れた金池西側の調査区を２区として調査を進めた。

調査は、平成19年６月中旬から平成19年12月中旬までの約６ヶ月を要した。調査面積は約2,470㎡である。

調査の成果

縄文時代後期の落ち込み　２区の中世遺構面の航空測量終了後、調査区の西半部中央に長さ29m、幅４m、深さ１mのトレンチを設定したところ、下層で縄文土器片やサヌカイト片、炭、自然木を含む土層を数枚確認した。これらの層は中世遺構面から下へ0.1m～0.7mのところに堆積していた。明確な砂礫層はみられないが、黄褐色系砂質土や淡黒色系粘質土が堆積し、濁った青灰色系粘質土が地山となっている。水が常時流れていたものとは考えられないが、水に浸かっていた可能性はあろう。おそらく、河川等に伴う落ち込みと考えられる。流れの方向は、堆積状況をみると、東から西に緩く傾斜している。トレンチの方向が東西向きであることから考えると、河川ならば南北方向に流れていた可能性が高い。昨年度の調査区でも弥生中～後期の河川がほぼ南北方向に検出されており、本地域の自然地形に沿ったものと考えられる。「古天ノ川」に相当するものであろう。大町遺跡で縄文時代の遺構・遺物が検出されたのは初めてである。ただ、『岸和田市史』第一巻によれば、本遺跡と近接する金池西遺跡（散布地）でも縄文土器が出土していることが明記されている。

石組井戸015　天ノ川沿いにあたる１区のほぼ中央東端で検出された。掘方は、一辺2.0m、深さ1.9mをはかり、断面は逆台形を呈する。掘方の周囲には、検出面から1.6mの深さまで、人頭大や拳大の河原石を巧みに積んで、石組を構築していた。なお、石組は控え積みが無く、一重である。石組の下部には、径0.6m、高さ0.4m前後の木臼の底を抜いたものを井筒として転用していた。井戸内部からは、瓦器椀、土師器、瓦、青磁などが出土している。それらから、本井戸の廃絶時期は、14世紀前半頃と考えられる。

石列群　１区の東側では、人頭大や拳大の河原石を直線状に敷き並べた石列群が３ヶ所で検出された。その中には逆Ｌ字形に曲がるものや、1.5m間隔で並行する石列もみられる。これら石列の性格については明確ではないが、平坦面や盛土面に据えられていることから考えると、排水などの機能ではなく、建物などに伴う区画や基礎部分に関連する可能性があろう。実際、石列の周辺からは、単独で河原石が数ヶ所で検出されており、掘立柱建物ではなく、礎石立ちの建物が削平され残骸だけが遺存している結果ではなかろうか。その他にも、落ち込み・土坑などが検出されている。それらに伴い、瓦・土釜・瓦器・土師器を中心にコンテナ約35箱が出土している。

最後に、過去２ヶ年の大町遺跡の調査の成果を考えなければならない。上述した多量の瓦の出土や、精巧な石組井戸・木組井戸などの構築、青磁などの中国製陶磁器の出土から考えると、大規模なものではないが、本調査区の近接したところに中世の寺院（坊院）が存在した可能性が高い。なお、瓦の中には、蓮華文の軒丸瓦瓦当も出土しており、寺院が平安時代後葉まで遡る可能性もあろう。そうなれば、本調査区から500m南に位置する名刹久米田寺の存在は無視できないものと考えられる。

図26　石組井戸015立面（南西から）

呉竹遺跡（０７０１８）

（１）東大阪市下小阪１丁目
（２）布施警察署建て替え
（３）岩瀬　透

はじめに

呉竹遺跡は大阪府警布施警察署庁舎建設に先立って、平成18年度に実施した試掘調査の際に新たに発見された遺跡で、本調査は庁舎建設予定地全域約1,487㎡を対象として、平成19年5月28日～同年12月10日までの期間を費やして実施した。

調査の概要

調査地は大阪府水道部旧布施ポンプ場跡地であり、ポンプ場建設前は付近一帯が耕作地となっていた。現状はポンプ場の施設が解体・撤去され、整地された状態であった。

地表面（T.P.＋4.1 m～4.8 m）より最終遺構面（T.P.＋1.2 m付近）までの、3.6 mの深度を掘削したが、そのうち整地土が約２m～３mみられ、これを機械掘削した後、その下層を１層ずつ人力で掘削した結果、２面の遺構面を検出することができた。

旧布施ポンプ場建設あるいは解体時の撹乱が著しく、包含層や遺構面が残存していた範囲はごく一部に限られていたが、その部分から多くの遺構・遺物が検出された。

第１面

T.P.＋1.8 m付近で検出した遺構面である。調査区の中央部は後世の撹乱による削平を著しく受けており、遺構は認められず、縁辺部に存在するのみであった。

東西方向あるいは南北方向に走る溝や、不定形状を呈する浅い土坑が検出され、内部より須恵器や土師器などが出土した。これらの遺物から、第１面の遺構は概ね奈良時代～平安時代に属するものと考える。

第２面

T.P.＋1.6～1.7 m付近検出した遺構面である。遺構が認められたのは調査区の東半部で、掘立柱建物２棟、集落の区画溝と推定される溝、土坑などが検出され、内部より須恵器や土師器、木製品などが出土した。これらの遺物から、第１面の遺構は概ね古墳時代後期～飛鳥時代に属するものと考える。

まとめ

今回の調査では、計２面の遺構面がみつかり、それぞれで遺構・遺物が検出された。

どちらも検出したのが集落の一端であり、詳細は不明といわざるを得ない。ただし、第２面で検出した集落では、古墳時代後期に属する集落の区画溝や、倉庫と考えられる掘立柱建物が検出されており、より具体的な様相を呈する資料といえよう。

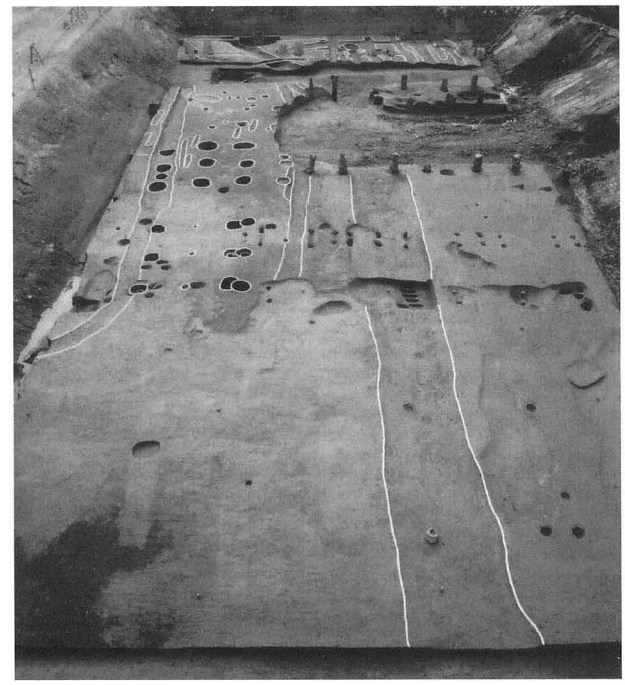


図27　第２面全景（北より）

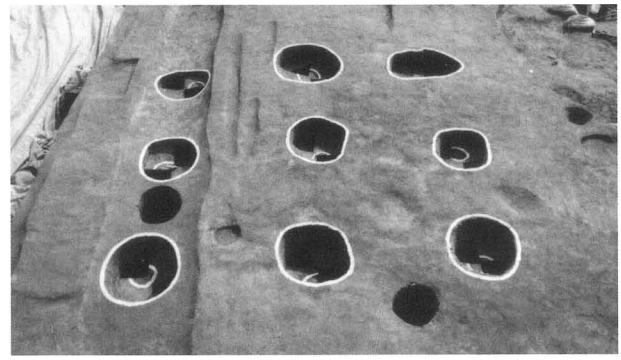


図28　掘立柱建物１（北より）

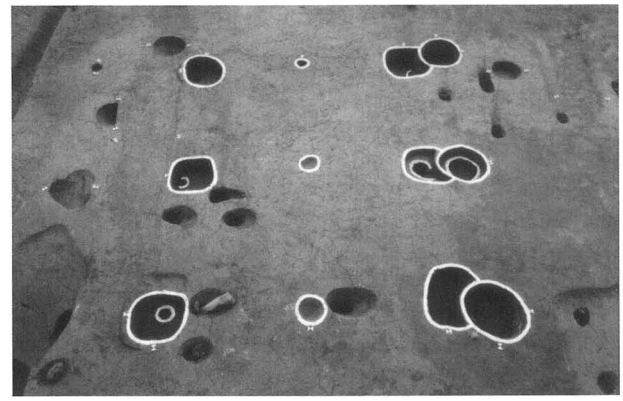


図29　掘立柱建物２（北より）

しとみ や きた
蔀屋北遺跡（０７０１９）

（１）四條畷市蔀屋・砂
（２）なわて水みらいセンター
（３）岩瀬　透

はじめに

なわて水みらいセンター建設に先立って平成13年度より実施されている蔀屋北遺跡の発掘調査は、平成18年度までに水処理施設（Ａ・Ｂ・Ｃ）地区、ポンプ棟・沈砂池（Ｄ）地区、砂ろ過施設（Ｅ）地区、沈砂池（Ｄ－２）地区下層、管理・送風機（Ｆ）地区、管廊５地区の調査が終了している。平成19年度は平成19年８月より管廊４地区と放流渠地区の調査を実施し、平成20年２月から管廊２地区および管廊３地区の調査を平成20年８月までの予定で実施している。

管廊４地区（Ｋ４調査区）の調査概要

Ｋ４調査区では９面の遺構面を確認した。

そのうち主要な遺構を検出した面は第９面で、古墳時代中・後期に属する遺構を検出した。ここで検出した遺構は、南接するＥ調査区（南西居住域）および北接するＦ調査区（西居住域）に関連するものである。

西居住域に属する遺構としては掘立柱建物跡１棟、溝１条など、南西居住域に属する遺構としては溝１条があり、両居住域の間を東西方向に走る区画溝が２条（ＴＫ２０８段階のものとＴＫ２３～ＴＫ４７段階のもの）検出された。

放流渠地区（ＨＫ調査区）の調査概要

ＨＫ調査区は工事による掘削深度がT.P.＋2.0ｍまでと浅いため、中世の面までの検出が予想されたが、中世に属する２面の遺構面を検出した。

第10層青灰色粘質土上面（T.P.＋2.2ｍ付近）で検出した第２面では、人および牛馬のものと考えられる足跡を検出し、畦畔などは認められなかったが、耕作地と考えられる。遺構面精査時および直上に堆積する第９層から13世紀～14世紀の土器が出土しており、第２面は鎌倉時代に比定できるものと考える。

第７層青灰色粘質土上面（T.P.＋2.6ｍ付近）で検出した第１面も、畦畔などは認められなかったが、耕作地と考えられる。遺物が出土しておらず、遺構面の年代を確定することはできないが、周辺の調査結果から室町時代あたりに相当する面と思われる。

管廊２地区（Ｋ２調査区）および管廊３地区（Ｋ３調査区）の調査概要

当初は２月より調査掘削が開始される予定であったが、諸般の事情により３月初旬から開始された。

ともに調査区の西半部を人力掘削しているが、ここで報告するに十分な知見を得るに至っていない。詳細の報告は平成20年度を期したい。

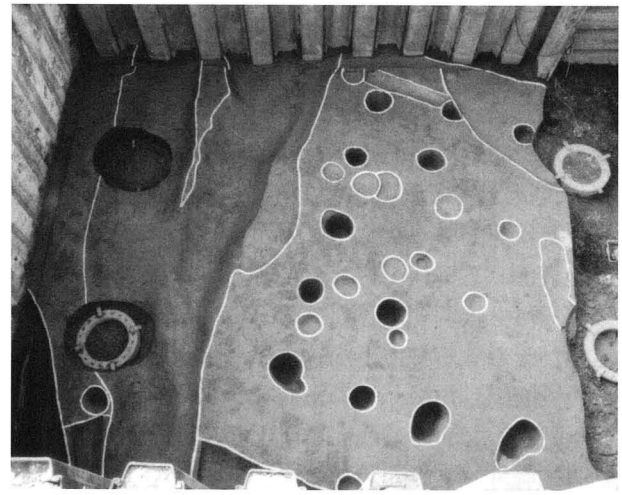


図30　Ｋ４調査区　古墳時代中・後期遺構面全景

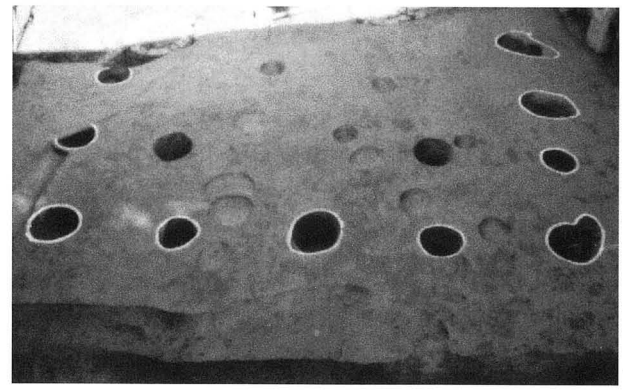


図31　掘立柱建物跡Ｋ４－１

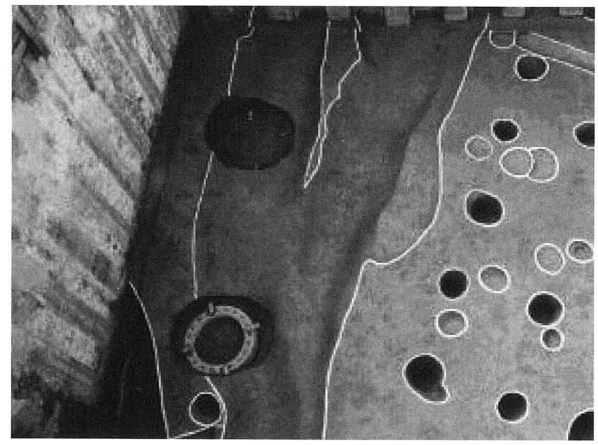


図32　区画溝

ぜにづか こ ふん
銭塚古墳（０７０２４）

（１）堺市堺区東上野芝町１丁
（２）府立堺支援学校整備事業
（３）橋本高明

はじめに

銭塚古墳は百舌鳥古墳群のほぼ中央に位置し、北に大山古墳、南にミサンザイ古墳、東に御廟山古墳、いたすけ古墳に囲まれている。

現状の墳形は直径約 50 m、高さ 2.5 mの円墳であるが、明治 18 年陸測図には前方後円墳として描かれている。しかし大正年間の絵図（『百舌鳥耳原三御陵御陪塚並陪塚ト認ムベキ民有地略図』大正 4 年写）によれば、円墳で描かれており絵図に記載されている法量（高 9 尺、周 87 間）も、現在の法量とほぼ変わらない。また、法量については、大正 11 年発行の『大阪府全志』にも「銭塚高さ壹間五分・周圍八拾七間七分、・・」とあり、絵図の記載とほぼ同様である。したがって明治 18 年以降大正初年頃までの間に前方部は削られ、現在の墳形になった可能性がある。

今回の調査は、校内整備計画に伴い銭塚古墳の墳形・規模・周濠の有無等を確認することを目的として、墳丘測量及び発掘調査を実施したものである。

調査は昭和 56・57 年度の調査結果をふまえ、前方後円墳を想定して 11 箇所のトレンチを設定した。

墳丘の調査

後円部北側のトレンチでは、T.P. ＋ 20.5 m付近（墳丘裾より約 1.7 m上方）の一段目のテラス部分と考えられる位置で、埴輪列を確認した。幅 1 mのトレンチ内に円筒埴輪を 5 本確認したが、2 本はトレンチの壁に半分ほどかかっていたので、 1 mに 4 本の割合で円筒埴輪が樹立していたことになる。出土した埴輪の底部径は約 30cm であるから、口縁部ではほぼ接していたと考えられる。

後円部から前方部への「くびれ部」及び「前方部」の角を想定した位置に設定したトレンチは、旧校舎等による撹乱がはげしく、旧地形の残存状況も極めて悪かった。しかし、南側の「くびれ部」付近に設定したトレンチでは 30cm 程度の東に下る段落ちを検出した。また南側の「前方部」付近のトレンチでは昭和 56・57 年度の調査時に確認した西に下る南北方向の段落ちを約 10 m検出した。

これらの状況から銭塚古墳を前方後円墳として復元すると後円部の直径 50 m、全長 70 mの比較的前方部が短い前方後円墳となる。大山古墳の西側に位置する「丸保山古墳」（87 m）よりもひとまわり小さく、銭塚古墳のすぐ北側に位置する「旗塚古墳」（56 m）よりも大きく、その中間に位置することになる。

周濠の有無

「丸保山古墳」、「旗塚古墳」ともに「盾型」の濠を有しているが、銭塚古墳の現状は「濠」の痕跡を留めない。調査の結果から見ると、墳丘の地山の高さが後円部に設定したトレンチで T.P.+19.4 m前後、現地表面より 30 ～ 40㎝高い。また、後円部の外側に設定したトレンチでは、地山の高さは T.P ＋ 18.8 m前後で、墳丘内の地山の高さとの落差は約 60㎝となる。この落差が掘り込まれたものであれば「濠」可能性はある。ただ墳丘と反対側に濠の立ち上がりが検出されるまでは可能性に留めたい。

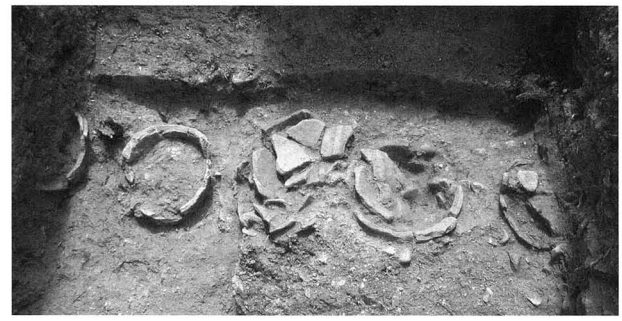


図 33　埴輪列出土状況

図 34　百舌鳥古墳群

はしもと の ぎし の した
橋本野岸ノ下遺跡（０７０２７）

（１）貝塚市橋本
（２）府営貝塚橋本住宅建替え
（３）上林史郎

はじめに

貝塚市橋本地内、府営貝塚橋本住宅建替えに伴う確認調査を実施した。調査期間は平成19年9月3日～9月5日である。

調査の結果

１トレンチ　既設建物東南側の空き地に3.3×3.6mの調査区を設定した。層序は、上から盛土0.52m、黒色土0.17m、茶褐色砂質土0.19m、黄褐色粘質土(マンガン混じり)0.38m、黄褐色粘質土0.14m、黄褐色粘質シルト0.22m、黄灰色土(青灰色ブロック混じり)0.23mであり、青灰色粘土の地山になる。盛土が0.52mと意外と浅く、黒色土は住宅造成以前の畑の土と考えられる。それより下は河川内の堆積であろう。

２トレンチ　１トレンチから西へ40m離れたところで、3×5mの調査区を設定した。層序は、上から盛土0.47mで、その下はすぐに、白色粘土の地山になる。旧耕土などは、すでに削平され、残っていなかった。元々、丘陵であった部分がかなり削平された結果であろう。

３トレンチ　２トレンチから西へ47m離れたところで、2×2mの調査区を設定した。層序は、上から盛土1.08m、旧耕土0.08m、黄色系粘質土0.2m、茶褐色粘質土0.18m、黄色粘土0.07mであり、礫混じり粘土の地山になる。茶褐色粘質土からは、土師器片や弥生土器片が出土している。

４トレンチ　３トレンチから西へ48m離れたところで、2×2mの調査区を設定した。層序は、上から盛土0.57m、黒色土(畑の土)0.24m、耕土0.1m、青灰色砂質土0.3m、黄色土0.12m、灰色砂礫0.18m、灰色土(礫混じり)0.12mとなり、地山は円礫混じり土である。

５トレンチ　３トレンチから東へ50m離れたところで、2×2mの調査区を設定した。層序は、上から盛土0.65m、畑の土0.1m、黄色土0.14mとなり、その下は締まった河川の円礫である。円礫の厚みは0.65mあり、その下は細砂である。

６トレンチ　５トレンチから東へ30m離れたところで、2×2mの調査区を設定した。層序は、上から盛土0.6m、黒色土0.15m、灰色土0.05m、黄褐色粘質土0.22m、灰色粘土0.16m、灰褐色土(中世の包含層)0.15mとなり、その下は地山と考えられる締まった黒色粘土(0.2m)である。黒色粘土の下は、黄色粘土(0.4m)となる。なお、灰褐色土からは、瓦器片や土師器片、須恵器片、サヌカイト片などが出土している。

まとめ

各トレンチの土層堆積は、一様ではなく、すべて異なる。盛土だけは、0.6m前後と一定していたが、3トレンチだけは1.08mと厚かった。1・2トレンチでは、白色系粘土が地山となっており、かつて高校側から東側へ伸びていた尾根の一部が大幅に削平された結果と考えられる。比較的地山面が深かった3・4トレンチでは、礫混じりの粘土が地山になっており、河川に関わる堆積と考えられる。また、5トレンチでは地山面が高く、地山が円礫であった。このトレンチは河川内部にあたっているのであろう。重要なのは、6トレンチである。唯一、中世の遺物包含層と考えられる灰褐色土が検出された。地山は黒色粘土であり、おそらくその上面が中世などの遺構面になるものと考えられる。出土遺物は、瓦器片・土師器片・須恵器片などが出土している。また、サヌカイト片も出土しており、弥生時代の遺構の存在を示唆している。

今回の確認調査の結果からいえば、明確に遺構の存在を示した調査区は、6トレンチだけであった。その範囲は、かなり限定されたものであり、6トレンチを中心に東西60m、南北30mと考えられる。

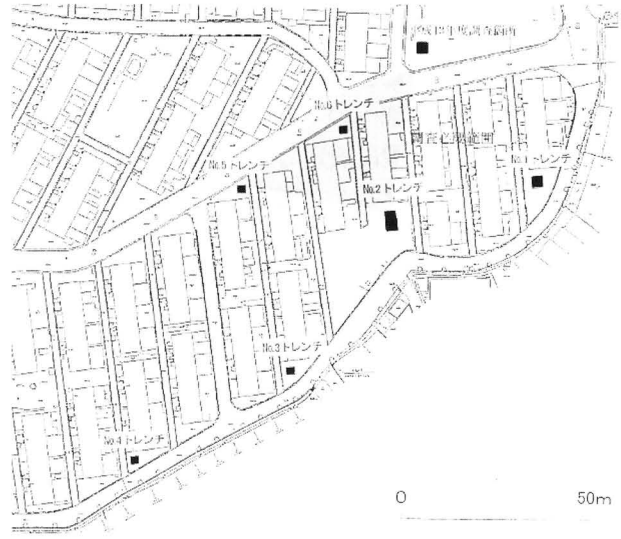


図35　調査範囲図

ミクリ遺跡（０７０２８）

（１）高槻市西町
（２）都市計画道路富田奈佐原線整備事業
（３）小浜　成

調査の経過

当遺跡の調査は、茨木市鮎川から高槻市西町にかけて南北に通る府道鳥飼八丁富田線の拡幅に伴って、平成17年度から３年度にまたがっておこなっている。平成19年度の調査地は、前回までの調査区間のなかで未収用のため調査が実施できていなかった地点のうちの２箇所である。便宜的に、北側の調査区をＡ区、南側の調査区をＢ区とした。

調査成果

基本層序（おもにＢ区）として、現代の整地土、および二つの旧耕作土層（第１層、第２層）の下に、大きく四つの層を確認した。

第３層および第４層は、土壌の観察と溝の検出などから耕作土層と判断できる。第３層の時期は、瓦器椀や土師皿、陶磁器片などの出土遺物から中世と考えられる。第４層の出土遺物も第３層と様相がほぼ同じであるが、黒色土器や須恵器片など平安時代の遺物もわずかに含む。第５層は、砂質土に粗砂や小礫が混在するうえ、シルト層が斜堆積している状況が認められることから、河川氾濫等の影響による堆積と考えられる。第６層は、まったく遺物が確認できなかったが、Ｂ区南西隅では木杭と思われる木材が出土した。前回までの調査所見を合わせれば、水田層とみてよいであろう。

Ｂ区第１面（第４層上面）で、溝３条を検出した。いずれも南北方向の溝で、幅0.8～1.1m、深さ0.1～0.2m程度の規模である。溝埋土からは、樟葉型などの瓦器椀片や中世の土師器片が多く出土しており、他時期の遺物は認められない。中世に属する溝であろう。なお、３条の溝の間隔は、それぞれ約4.2m、約11.8mであり、均一ではない。また、畦畔状の高まりも確認できた。

まとめ

今回の調査では、Ｂ区では河川氾濫などにより一度埋没し、その後、平安時代～中世を中心として耕作地化が進められていることが推測された。

今回の調査で確認し、記した基本層序は、平成18年度までの調査所見とほぼ対応するものと考えられる。ただし、今回の調査では、各土層での時期特定資料が少なく、皆無の層も認められた。詳細な各土層の時期については、前回までの周辺の調査所見（年報10・11）も参照されたい。

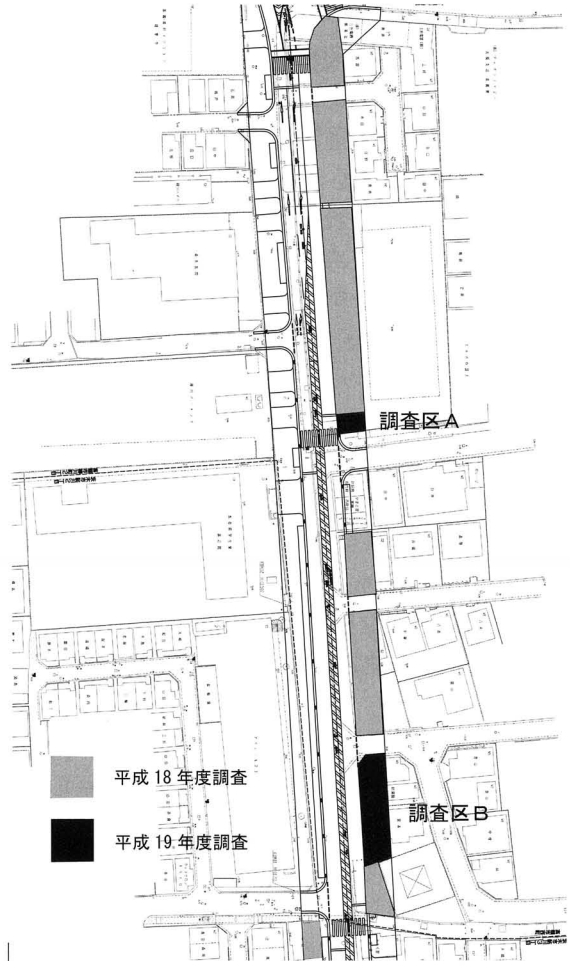


図36　調査位置図

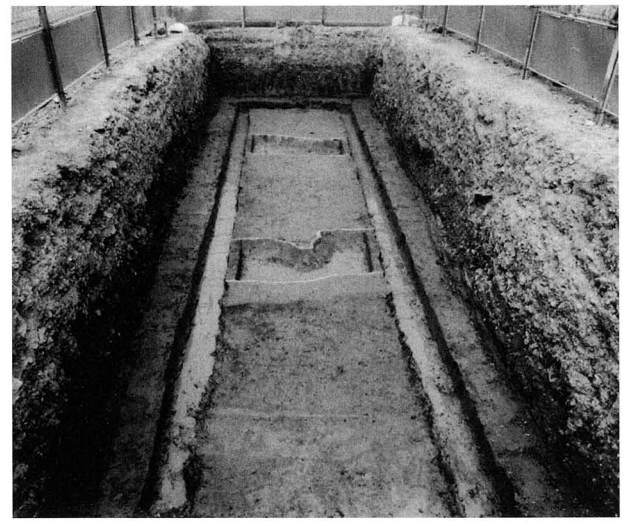


図37　Ｂ区北半部第１面

あ　いじょうあと
安威城跡（０７０３２）

（１）茨木市安威２丁目
（２）主要地方道茨木亀岡線道路整備事業
（３）辻本　武

はじめに

安威城跡は、元来は段丘上にある室町時代の城郭跡とされていた遺跡であるが、その東を南北に走る主要地方道茨木亀岡線道路整備事業に伴う試掘調査を平成15年度に実施した際に古墳～平安時代の包含層が確認されたところから、この部分にまで遺跡範囲を拡大したものである。大阪府教育委員会ではこれまで平成16・17年度に道路整備事業に伴う安威城跡発掘調査を重ね、さらに19年度においても発掘調査を実施した。

19年度の調査対象地では中央に東西方向の農業用水路が横断するため調査区を２分割し、北側を「19－１区」、南側を「19－２区」とした。19－１区はもともと水田であったが、調査着手時に耕作土が除去され、さらに下水道管埋設および人孔設置されていた。また19－２区ではコンクリート擁壁と盛土施工によって駐車場造成されていた。

調査の成果

竪穴住居　19－１区北端部で検出した遺構で、直角コーナーを持つところから竪穴住居と判断した。その大半は調査区外にあり、また下水埋設管による撹乱を受けていたため、全容は不明である。住居壁の高さは0.15ｍを測り、壁溝は存在しなかった。小ピットが調査区北側セクションに観察されたが、これが竪穴住居に伴う柱穴となるかどうかは疑問である。住居内より古墳時代後期の須恵器が出土した。

掘立柱建物　19－２区北半部で、小ピット群が並んで検出された。掘立柱建物跡が重なったものと思われる。小ピットの並び方が等間隔かつ長方形で、コーナーが直角になるものを建物として復元してみると、２間×２間と３間以上×１間、４間以上×１間の３棟を想定することができた。19－１区南半分でも小ピット群を検出したが、建物としてはまとまらなかった。

竈　19－２区では遺物包含層中に焼土塊が８ヶ所で検出され、支脚および壁体の遺存により据付竈であることが判明した。支脚は５ヶ所の焼土塊中で立ったまま検出した。長い形状の自然石である場合が３例、高坏形土器を逆立させる場合が２例であった。また２ヶ所では馬蹄形の竈壁体を検出することができた。これらの竈は竪穴住居に伴うものであると思われるが、今回の調査では検出できなかった。これは竪穴住居造成の際の掘り込みが浅く地山に到達するものがなかったこと、および住居廃棄の際に竈を含めて踏み潰しながら整地することを繰り返したので住居の痕跡が不明となり、焼土塊が残存したためと思われる。

溝・落ち込み　19－２区北半部から19－１区南半部にかけて、北東―南方向に幅0.7～1.2ｍ、深さ0.5ｍ程の溝が走る。この溝の南東側では小ピット群の密度が高いが、北西側ではかなり低くなる。また19－２区南半部全体は、深さ0.3ｍ程の大きな落ち込み遺構となり、そこには小ピット群の密度が低い。溝や落ち込みは小ピット群を限る遺構になるものと思われる。

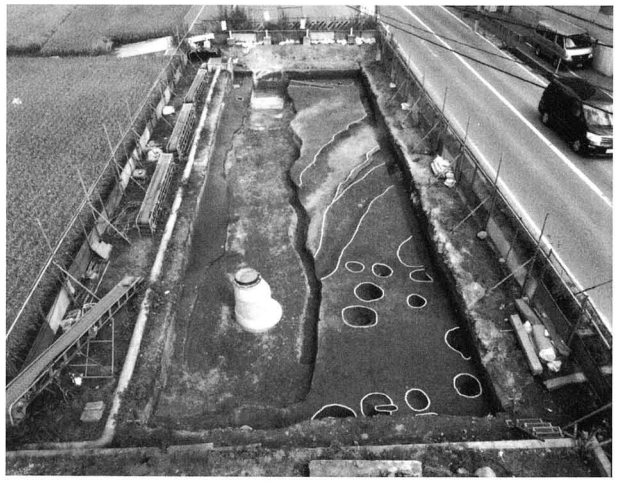


図38　19－１区（南から）

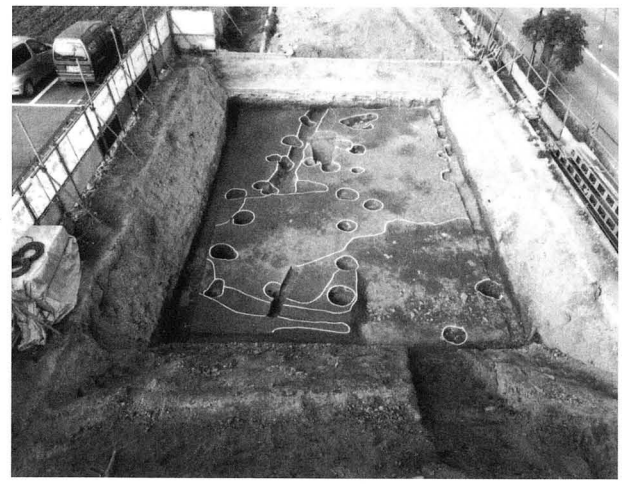


図39　19－２区北半部（南から）

久宝寺遺跡（０７０３３）

（１）八尾市渋川町１丁目
（２）主要地方道大阪港八尾線交通安全施設等整備事業
（３）岡本敏行

はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市の北西部に広がる縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡である。その範囲は南北 1.6km、東西 1.7km に及ぶ。今回の調査は主要地方道大阪港八尾線歩道設置工事に伴う事前調査であり、調査対象地は八尾市渋川町１丁目の東西約 230 mの範囲である。しかし、当該地は幅が狭く（2.0 ～ 3.0 m）、遺構面までが深いこともあって、安全面から面的な調査は不可能と判断。主に土層断面調査で対処することとした。それでも実際に調査できたのは、諸般の事情もあって中央部から東側にかけての地域に１×３mのトレンチが３ヶ所と西側で１× 55 mの比較的長いトレンチが１ヶ所であった（図 41 参照）。

調査成果

本調査区は、久宝寺遺跡のほぼ中央部東側に位置するが、これまで周辺部での調査例は少なく、その実体は不明確な点が多かった。ただ今回の調査区の西側に接した地点で、相前後して八尾市教育委員会（現地調査は八尾市文化財調査研究会）がマンション建設に先立って調査を実施しており、それによると奈良時代の遺構・遺物が検出されている。そのため、本調査区地域においても当該期の遺跡の広がりが想定されたが、中央部より東側地区では盛土・整地土の下には厚い砂層が堆積していたことから、旧長瀬川の本流もしくは氾濫原部分と考えられる。

西側地区は厚い粘土層が堆積し、旧長瀬川に連なる低湿地帯のような状況を呈していた。このことからおそらく西側で八尾市教育委員会が検出した奈良時代の遺構群は、旧長瀬川によって形成された自然堤防上に立地していたものと考えられる。なお、今回の調査では、遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ

今回の調査では明確な遺構・遺物は検出することはできなかったが、旧長瀬川およびそれに連なる低湿地帯、自然堤防の位置関係を把握することができた。また、自然堤防上には奈良時代の遺跡が存在することも併せて確認することができた。

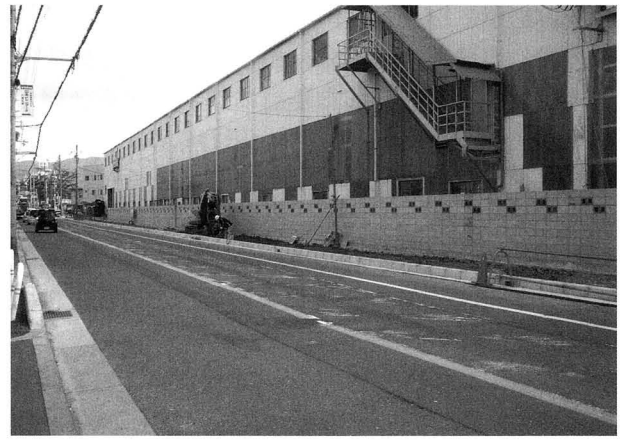


図40　調査地遠景（北西から）

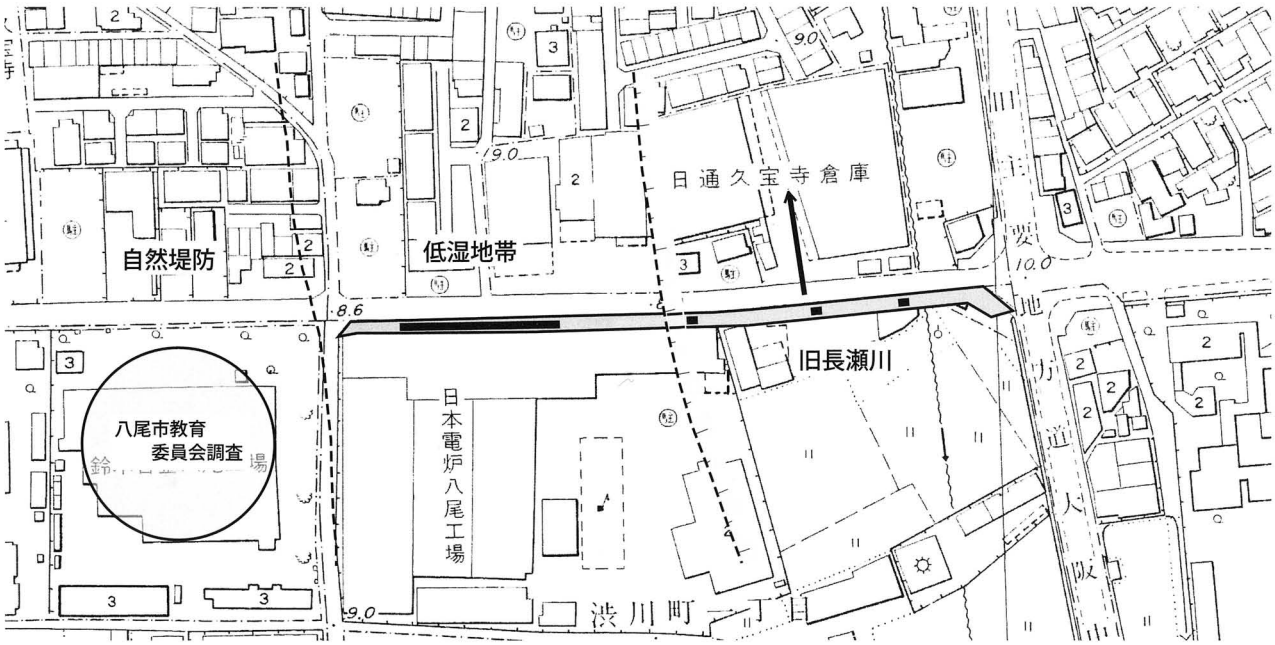


図41　調査区位置図（1/2,500）

せんりおか
千里丘遺跡（０７０３８）

（１）摂津市千里丘
（２）都市計画道路千里丘三島線整備事業
（３）小浜　成

調査の経過

調査は、ＪＲ千里丘駅の南側の線路を潜って東西に横断する千里丘三島線の拡幅に伴って、平成17年度から実施している。今回の調査地は、ＪＲ千里丘駅西口から約100m離れた地点で、現有道路の北側拡幅部分にあたる。なお、当遺跡は、従来、千里丘１丁目所在遺跡第２地点、第３地点、２丁目所在遺跡第２地点と別個の埋蔵文化財包蔵地とし、千里丘遺跡群と総称していたが、前回までの調査成果を受けて範囲拡大として一体的に取り扱い、千里丘遺跡として周知することとなった。

調査成果

調査は、本体工事の進行と通行路の確保の事情により、２箇所（A・B区）に分けて行った。

現代の整地土（第１層）および近現代の旧耕作土（第２層）を除去した下層には、大きく３層が認められた。いずれも耕作層と思われる。各層とも遺物出土量は少なく、時期を特定できる遺物がほとんどなかった。わずかに第４層および第５層は、中世の瓦器椀や瓦質羽釜の破片が出土した。おそらく、第４・５層は中世、その上層の第３層は近世の時期にあたると推測される。

精査を行った第１面（第３・４層上面）および第２面（第５面上面、T.P.8.4～8.5m）は、西高東低に削平を受けた耕作土残存面であった。第３面（第６面上面）では、上層からの影響を受けた鋤溝のほか、時期・性格不明の土坑や溝などを検出した。

本調査区は、前回までの調査地よりも高い標高に位置するため、全体的に近現代の削平が強く、地山直上（T.P.8.2～8.3m）まで及んでいる地点も認められた。さらに、遺跡形成が削平を繰り返しながら行われた結果、遺構残存度が低くなっていることが判明した。

まとめ

前回までの調査において、縄文時代の石器集積遺構や、古代から中世にかけての耕作跡および掘立柱建物などが見つかっている。今回の調査でも、中世を中心とする耕作層が認められた。また、最終調査面では、時期は特定できないものの、土坑や溝などを検出した。当地周辺は、削平による遺構の消滅はありえるものの、基本的にはさらに遺跡が広がる可能性がある。

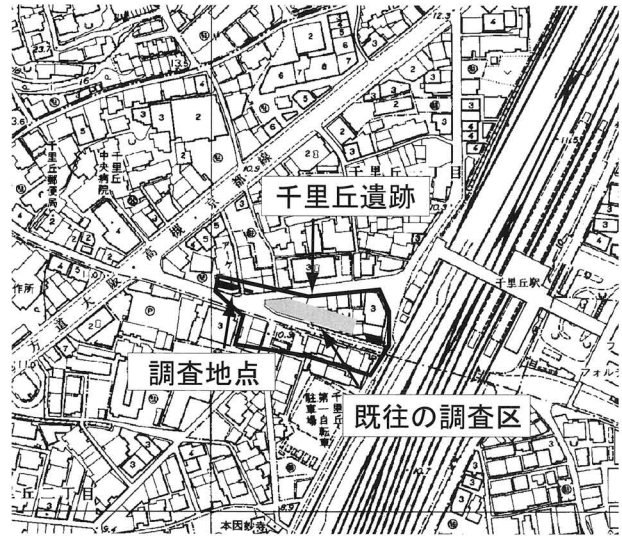


図42　調査位置図

図43　A区南壁断面（下面は第３面西半）

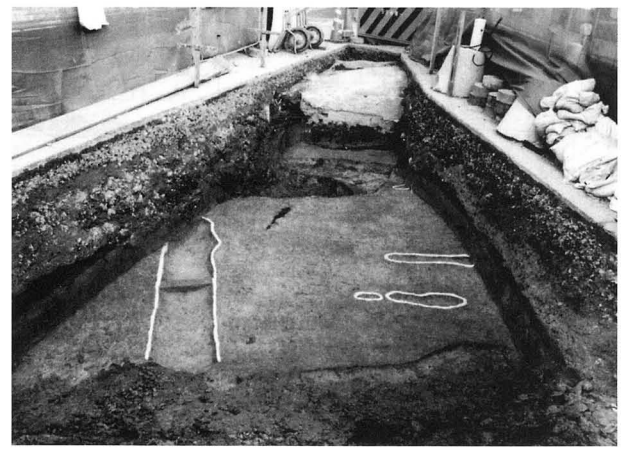


図44　A区第３面東半

きんや ほんまち
禁野本町遺跡（０７０３９）

（１）枚方市禁野本町１丁目・２丁目
（２）都市計画道路枚方藤阪線整備事業
（３）岡本敏行

はじめに

禁野本町遺跡は、枚方市禁野本町、中宮北町、中宮本町、御殿山南町に広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。今回の調査は都市計画道路枚方藤阪線整備工事に伴う事前調査であり、調査対象地は禁野本町１丁目、禁野交差点西側の約 200㎡である（図 46 A地区）。また、今回遺跡に接したB・C地区（図 46 参照）においても遺跡の広がり、遺構の有無を確認するための試掘調査を併せて実施した。

調査成果

本調査区は天野川の右岸、中・低位段丘面に相当する交野台地の西端部にあたる。調査地の西約 250 m付近から段丘崖となり、段丘崖直下との比高差は約 20 mを測る。

土層の堆積状況は、基本的に上から盛土・整地土（旧耕土・床土等を含む）、暗茶褐色粘質土（中世～近世の遺物包含）、茶灰色砂質土（奈良時代の遺物包含）、明黄褐色粘土（地山）の４層に分層でき、さらに地点によっては２～３層の細分が可能である。地山までの深さは 50cm と比較的浅い。

検出した遺構には奈良時代の溝、柱穴、水利施設状の土坑、および中世の落込み、ピット等がある。特に何らかの水利施設と考えられる土坑は 2.5 m×6.0 m以上の平面東西方向に長い隅丸長方形を呈する。深さは 30cm を測り、２段に掘り込まれ、いくつかの小溝とつながる。また、調査区の東側は殿山百済寺道に沿って南北方向の谷地形となり、その西側肩部が検出された。

出土した遺物はコンテナ１箱分に相当し、奈良時代の須恵器・土師器、中世の陶器・土師器等がある。珍しいところではかつて調査区の北側地域（現国家公務員合同宿舎）が旧陸軍の弾薬庫であったことから（昭和 14 年に大爆発を起こしたおりの）砲弾２発が出土した。

併せて実施した試掘調査については、B・C地区とも位置的には段丘崖直下にあたり、調査した結果、周辺部はかなり削平されたうえ、さらにその上に厚い盛土が行われていることが判明した。遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ

周辺地域の調査で奈良時代の遺構面の存在が知られていたが、本調査区地域にも当該期の遺構面が広がることが判明した。また試掘調査の結果、台地直下の低位地域には遺跡の広がりは認められず、遺跡の範囲は当初から考えられていたとおり、台地部分のみであることが再確認されたといえる。

図 45　A地区西半部全景（西から）

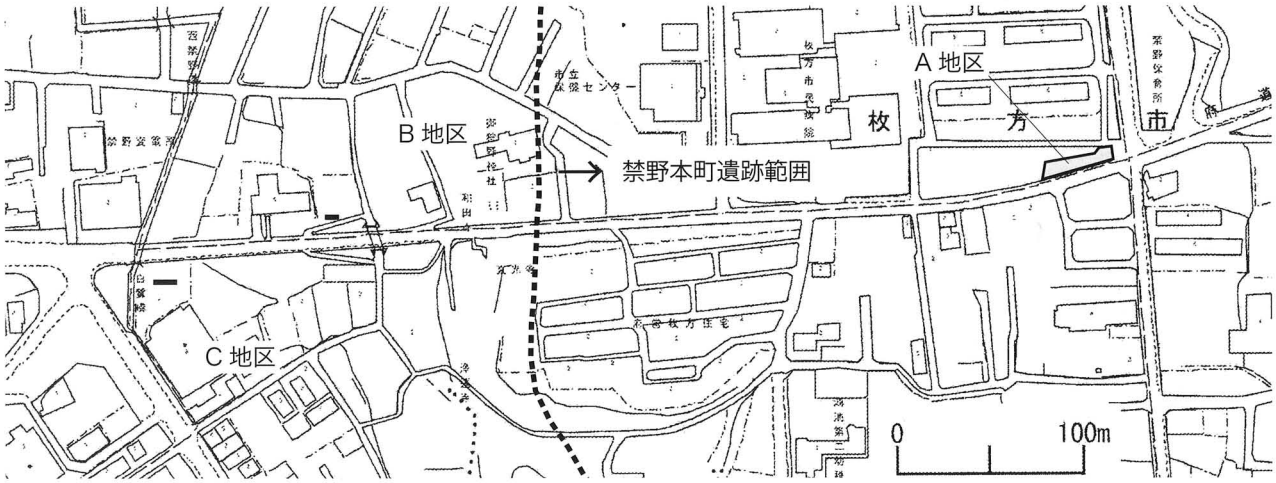


図 46　調査区位置図

太井（おおい）遺跡（０７０４０）

（１）河内長野市太井
（２）府営農村振興整備事業
（３）小山田宏一

はじめに

太井遺跡は石見川の河谷にあり、標高300mである。調査は、圃場整備予定地内の岩見川の両岸に、2×2mの調査トレンチを60箇所設置し、実施した。

調査成果

平安時代末から室町時代の作土が圃場整備予定地内のほぼ全域に拡がることを確認した。

当地は土石流地帯であり、谷に流れ込む小谷とその間の張り出しは、土石流扇状地の侵食と再堆積によって形成されたものである。谷底近くの調査トレンチでは、土石流堆積先端の特徴である石塊の集積を確認した。

基本層序は、上から近現代の作土（層厚20cm）、すき床、古代末・中世作土（層厚20～30cm）、土石流堆積であり、作土は土石流堆積をベースに形成されている。作土は水田と畠地からなり、棚田状に造成されていた。現在、1筆あたりの張り出しは平均5mだが、当時はそれよりも狭く、2～3mほどであったと推定される。

2箇所の調査トレンチでは、作土下から中世の柱穴・溝・土坑を検出した。

遺物は、縄文中期末～後期初の深鉢、平安時代末の黒色土器・土師器皿、鎌倉～室町時代の瓦器・土釜・土師器がある。縄文土器は作土形成時の撹拌をのがれ、土石流堆積上面に張り付いていた。

まとめ

太井地区が観心寺の観心寺庄（七郷）の一つであることは、『観心寺文書』から知られていた。今回の確認調査では、庄園の年代に一致する作土と集落遺構が見つかり、考古学的にその存在を確認したことになる。

図47　太井地区の景観

図49　土石流堆積

図48　中世作土の棚田状造成

図50　中世作土下の柱穴

高木（たかぎ）遺跡（０７０４１）

（１）河内長野市日野
（２）府営農村振興整備事業
（３）小山田宏一

はじめに

高木遺跡は石川右岸の段丘にあり、標高130～140mである。対岸には、高向神社南遺跡がある。調査は、圃場整備予定地内の２地区（B・D地区）に、2×2mの調査トレンチを12箇所設置し、実施した。

調査成果

北のD地区は、3箇所の調査トレンチを設置した。基本層序は上から、現作土（層厚20cm）、すき床、地山の段丘層である。遺物、遺構は未検出。

南のB地区は、9箇所の調査トレンチを設置した。基本層序は上から、現作土（層厚20cm）、すき床、中世と推定される作土（層厚25cm）である。調査トレンチのうち1箇所で、作土下から柱穴を検出した。柱穴の年代は不明。

まとめ

高木遺跡は、昭和59年の分布調査でサヌカイト片が採集され周知された遺跡である。圃場整備事業にともなう確認調査は平成15年度に始まり、A地区とC地区で実施された。A地区では、古墳時代の可能性が高いと推定された、落ち込み・柱穴、土師器・須恵器が検出されている。C地区は現作土、すき床の下は地山であり、遺構・遺物は未検出。

このような調査結果から、高木遺跡の中心は石川の曲流に張り出すA・B地区であると判断される。

図51　高木遺跡の景観

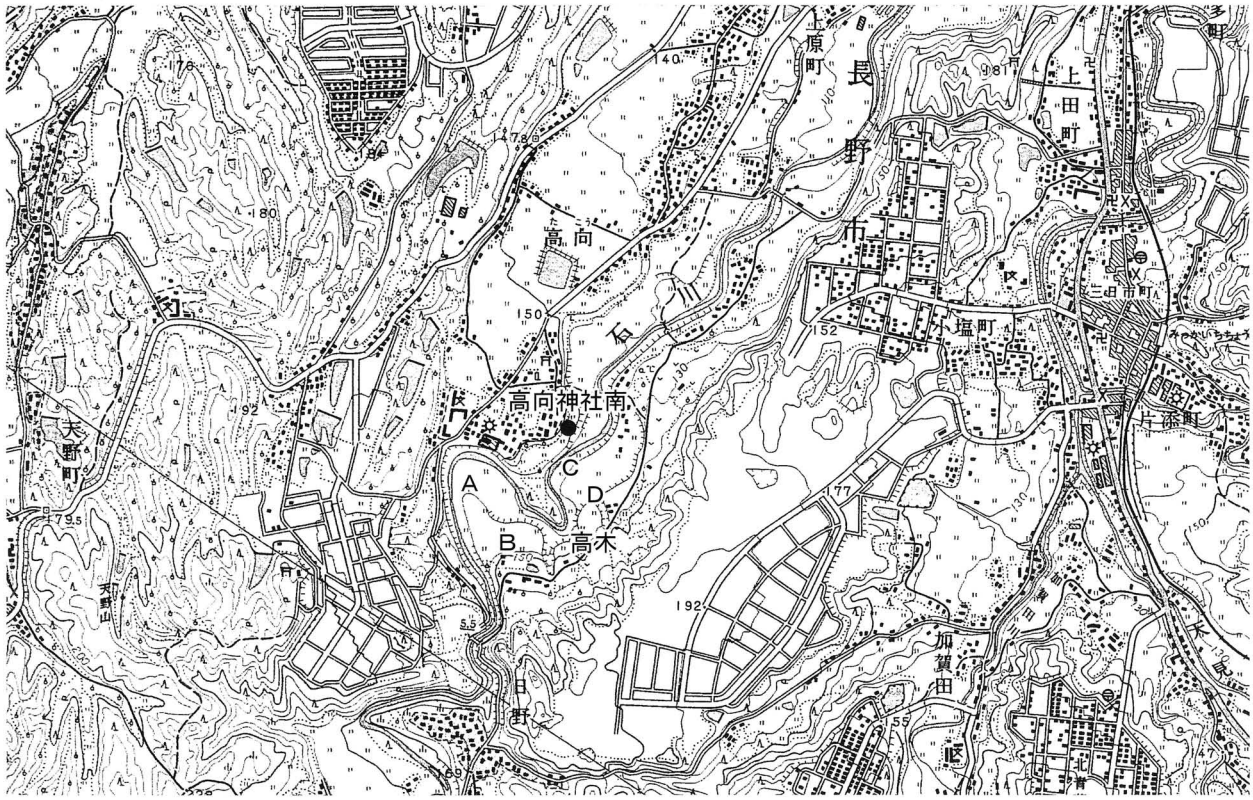


図52　高木遺跡の位置（1:25000）

たこうじんじゃ みなみ
高向神社南遺跡（０７０４２）

（１）河内長野市高向
（２）府営農村振興整備事業
（３）尾谷雅彦（河内長野市教育委員会）　小山田宏一

はじめに

当遺跡は、高向・高木地区の圃場整備事業に先立ち、平成15年の試掘調査で新規発見されたものである。今次の調査は、農道新設部分にかかる約470㎡について調査を実施した。

調査成果

調査区は、石川が蛇行しながら日野との境の狭小な河谷を抜けて北流する左岸の段丘面に位置する。

耕土、床土を除去すると玉石（Max150㎜× 100㎜× 50㎜）が50%以上混じる褐灰色粘土層、その下層に黒褐色粘土層、更に暗オリーブ褐色粘土に玉石（Max50㎜× 30㎜× 20㎜）が混じる層、そして地山となる層順が基本層序となる。このうち、玉石が混じる褐灰色粘土層に中世土器が包含し、黒褐色粘土に古墳時代の須恵器、土師器が包含されていた。

検出された遺構の時代は、中世と古墳時代に大別される。

中世の遺構は、調査区の東南端をやや南に偏して東西に走る溝が検出された。溝の幅は上端で最大3m・底部で0.3m、深さ1.5mを計った。溝内部には最大300㎜× 200㎜× 200㎜の玉石が詰められており、暗渠として掘削された可能性が高い。遺物は、15世紀代の中世土器が出土している。器種は瓦質の皿・羽釜・擂鉢・火舎（？）、土師質の甕等である。

古墳時代の遺構は明瞭さを欠くが、掘立柱建物1棟とピットや土坑状の遺構を検出した。掘立柱建物は、調査区中央東南辺で南北2間（3m）以上、東西3間（5m）以上の規模が検出された。遺物は、6世紀前半の須恵器坏・壺・甕や土師器甕等が出土している。

当該遺跡の状況は、石川の左岸、中位段丘から低位段丘にかけての狭小な段丘面にあり、居住空間としては不適切な場所である。このことから、遺跡の性格判断は慎重を要する。

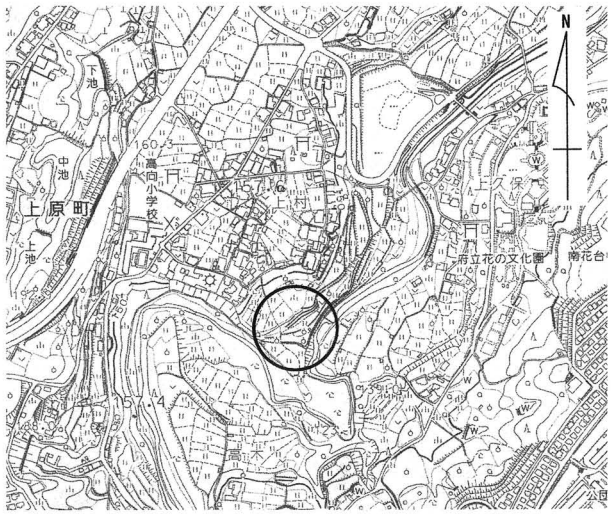


図53　遺跡位置図

図54　調査区全景

図55　遺構全体図

やましろはいじ
山城廃寺（０７０４３）

（１）南河内郡河南町大字山城宮前
（２）府営ため池等整備事業「山城新池地区」
（３）杉本清美

はじめに

河南町大字山城宮前に所在する「山城新池」における府営ため池等整備事業（南河内農と緑の総合事務所）に先立ち、山城廃寺の発掘調査を実施した。「山城新池」の堤体改修部分の西堤部（南北約 40m）を１区、北堤部（東西約 100m）を２区・３区とした。調査面積は約 760㎡を測る。「山城新池」の北方に位置する降幡神社の西側には、古代の寺院（山城廃寺跡）があったと推定されている。これまでにこの周辺で、建物の礎石や白鳳時代の瓦片などが採集されている。

調査の概要

（第１面）　堤体の盛土及び旧耕土層を除去すると、東西方向及び南北方向を示す耕作溝跡や検出径 30 ～ 50cm の円形状柱穴を検出した。調査区北東部（3 区）で検出した溝では炭化物片とともに、製塩土器片や土師器小片が出土した。調査区西南部（1・2 区）では、南北方向に並ぶ柱穴列を検出した。柱穴内に人頭大の石が入るものが多くみられ、柱を抜き取った後に遺物や石をいれたものと考えられる。柱穴内から黒色土器片、土師器皿、杯、羽釜、甕片などが出土した。平安時代から中世頃の様相を示す。

（第２面）　黒褐色粘質シルト層を除去すると、方形状の柱穴、井戸などを検出した。北堤部（2・3 区）では、一辺約 50cm の方形状の柱穴を検出した。東西方向に概ね等間隔に並んでいる状況が確認できた。さらに下層から、一辺約 1.2m、幅約 1.0m を測る隅丸方形状の柱穴列を検出した。大型の掘立柱建物（写真）になるものと考えられる。北堤部中央付近（3 区）で、井戸を検出した。検出径約 1.2m の円形で、深さは約 1.2 mを測る、素堀の井戸である。下層から土師器甕片、須恵器杯身などが出土した。概ね、奈良時代の様相を示す。

（第３面）　北堤中央部から東側部（3 区）で、東西方向に直線的に延びる溝跡を２条検出した。平行して延びており、検出幅は約 50cm、深さは 25 ～ 30cm を測る。溝内からは、須恵器杯蓋、高杯、土師器高杯などが出土した。6 世紀後半頃の様相を示す。更に下層から、北堤東側部でやや弧を成す溝跡を検出した。溝の検出幅は約 40cm で深さは 30 ～ 40cm を測る。溝内からは、土師器甕片などが出土した。

まとめ

調査の結果、古墳時代から中世に存続した集落域であったと考えられる。この地の有力氏族や、山城廃寺にかかわる集落になるものと推定される。

また、調査期間中に実施した試掘調査の結果から、山城廃寺の遺跡範囲が南側に拡大されるに至った。

図 56　山城廃寺溝・柱穴列　（西から）

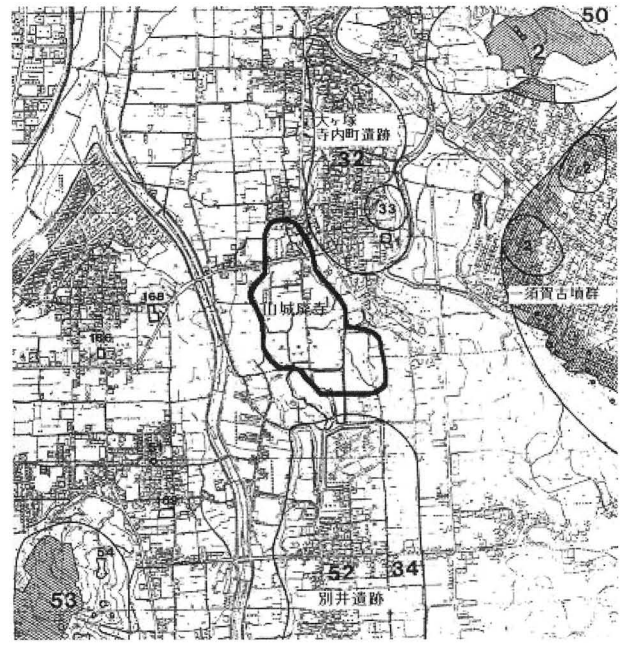


図 57　山城廃寺遺跡範囲図

大岩（おおいわ）地区の石組水路（０７０４６）

（１）茨木市大岩
（２）安威川ダム建設事業大岩残土処分地
（３）辻本　武

はじめに

茨木市大岩地区の中央に所在する谷が、安威川ダム建設工事の際に発生する残土処分地として選定された。この谷の棚田には、水田の下に構築される横穴式の石組水路が連続して存在することが近年になって判明した。これと同様の水路は、府下では能勢町長谷地区に多く分布し、「ガマ」と呼ばれている。ガマは「落とし口」「水溝（横穴式の暗渠）」「ガマ口」で構成され、用水はこの順番を繰り返しながら流れる。長谷のガマは中世に遡り、全国的に見ても珍しいものとされ、大阪府の文化財分布図に登載されている。

これと同じ構造の石組水路が大岩にもあることは、「ガマ」の分布が広がる可能性があるものと考えられた。そこでダム建設事業の残土処分地がこの谷で計画されたことを機会に、試掘を実施してその構造や時期を調査することになった。

調査の成果

大岩の石組水路（ガマ）は、１／7.2 勾配の緩やかな棚田五枚に延長 90 mにわたって連続して構築されるものである。今回は№1・2の二基を調査した。

№1 は最上段にあるガマで、標高 167.1 mの水田の下に構築される。水溝は落とし口からガマ口まで横穴として通っており、その距離は 19.5 m、幅 0.5 ～ 0.7 m、石組みの高さは 0.9 ～ 1.1 mで、２～４段に積み上げるものであるが、石の大きさは 0.3 ～ 0.9 m大の様々な大きさのものが使われ、一部には自然山塊内に元より所在していた大石を利用している。

天井石は長さ 1.3 ～ 1.4 m、幅 0.3 ～ 0.4 mのものを並べ、その隙間に 0.1 ～ 0.3 m大の石を詰め込むものである。石組みの石材は大岩地区に分布する花崗岩で、切り出した痕跡の矢穴が多く見られた。

№2 のガマは、№1 より 2.4 m下がった標高 164.7 mの水田の下に構築される。№1 のガマ口から出る水は、№2 の落とし口に 1.5 mの落差で落ち、水溝に向かう。落とし口は長さ 1.8 m、幅 1.0 mの規模で、天井石がなく開口する。

水溝は落とし口からガマ口までの距離が約 15 mであるが、ガマ口側の下流５m部分は近年改修されてコンクリート製ボックスカルバートに置き換えられていた。石組みの高さは 0.9 ～ 1.0 mで、0.2 ～ 1.1 m大の多様な大きさの石を１～３段に積み上げるものである。

天井石は上流部では長さ 1.3 m、幅 0.2 ～ 0.3 mの平らな石を並べる。下流部になると大石を輪切りにした長さ 2.2 m、幅 0.5 ～ 1.0 mの半月形の石を斜めに置くものとなる。

今回の調査では出土遺物がなく、ガマの時期を決めることはできなかった。地元の方の話では、自分たちの子供の頃には既にあったが、明治生まれが地区ではみんな亡くなっているので、それ以前のことは分からないということであった。またガマは土砂が落ち込んだりして耕作の支障になることが多く、改修を繰り返したという話もお聞きした。

大岩のガマが相当な年月を経てきたことは確かである。しかし石組の石材に矢穴を残すものが多いことから、中世に遡ることはないであろう。時期については近世末～近代としておきたい。

図 58　石組水路のガマ口

図 59　調査した石組水路全景

田尻遺跡（０７０４７）

（１）泉南郡田尻町吉見

（２）一般府道新家田尻線歩道設置工事

（３）中野篤史（田尻町教育委員会）　橋本高明

田尻遺跡は、田尻町の中央部の標高５～７ｍに位置する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。

これまでの調査では、弥生時代から奈良時代の溝や近世から近代にかけての粘土採掘坑などの遺構が検出されている。また、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・瓦等の遺物が出土している。

今回の調査は、一般府道新家田尻線歩道設置工事に伴い平成18年度に確認調査を行ない、平成19～20年度にかけて発掘調査を実施した。

調査面積は約1,165㎡である。

また、今回の田尻遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会と田尻町教育委員会で発掘調査に関する協定書を締結し、共同調査として実施した。

今回の調査地の基本的な層序は、上層から盛土、表土（耕作土）、旧耕作土の直下に５～10㎝の厚みで、須恵器、土師器、瓦器を含む遺物包含層、地山（暗灰黄色粘質土層）の順に堆積する。

検出した遺構は、中世以前の時代に遡る溝、近世～近代の粘土採掘坑多数、近世の井戸１基、その他の土坑や溝等である。

粘土採掘坑は、南海本線吉見ノ里駅に近いほど密に見られ、駅から離れるとまばらとなる。旧耕作土直下から約30～40㎝下層の地山（暗灰黄色粘質土層）を採取するために掘られた土坑である。なお、地山は厚さ60㎝～80㎝ほど堆積し、その下層は黒色系粘土層となっている。深い土坑では黒色系粘土層直上まで掘られている。粘土採掘坑の平面プランは方形ないしは長方形のものが多く、壁面は垂直である。

また粘土採掘後は砂で埋め戻し、耕作地に復旧したと思われる。

今回の調査では、古代・中世の遺構は少なかったが、粘土採掘坑の間にわずかに残る地山面より灌漑用と思われる溝を検出した。溝からは遺物は出土していないが、溝は地山面より検出されたこと、その上部に先の遺物包含層が被ることから中世以前の溝であると考えられる。

検出した溝や遺物包含層から須恵器や土師器の破片が数多く出土している点などから本遺跡は古くから耕作地として拓かれていたものと思われる。

図60　調査地点位置図

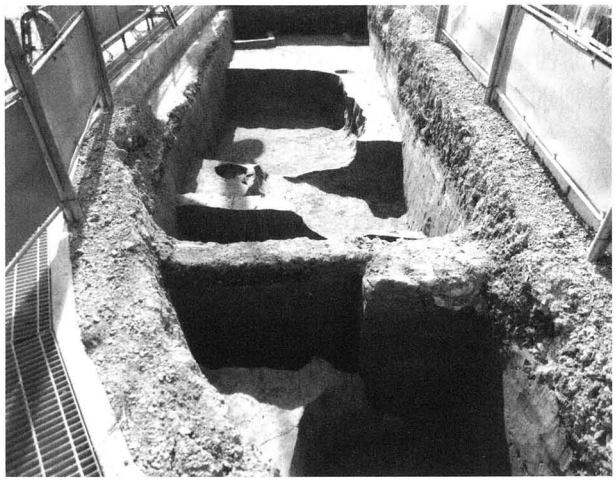


図61　粘土採掘坑検出状況１

図62　粘土採掘坑検出状況２

【資料紹介】

陶邑窯跡群ＴＫ 230 －Ｉ号窯出土須恵器

泉北考古資料館企画展『平安時代の須恵器－陶邑に白煙が絶えるころ－』の展示資料

はじめに

府立泉北考古資料館では、これまで取り上げることの少なかった陶邑の終末にスポットを当て、企画展『平安時代の須恵器―陶邑に白煙が絶えるころ―』（会期：2008 年１月５日～６月８日）を開催した。展示にあたり、Ｖ型式１・２段階（中村編年、中村 1977・1978・1981）に位置づけられている資料のなかで、ＴＫ 230 －Ｉ号窯出土資料を整理したところ、いくつかの新たな資料や知見が得られたので紹介する[1]。

１．遺物　―展示資料を中心に―

出土資料では、杯Ａ・椀・皿・小皿（皿Ｅ）・高杯・鉢Ａ（盤状鉢）、鉢Ｄ・壺Ｍ（瓶子）・壺Ｌ・双耳壺・花瓶・甕・蛸壺が認められた[2]。

供膳具は杯Ａと椀が主体である。杯Ａは口径 12cm 前後のものが多く、底部切り離し手法はヘラ切りである（図 63-1）。椀は口径 14cm ～ 16cm を測り、底部は糸で切り離した後、調整をしない平高台である（図 63-7 ～ 9）[3]。皿はごく少数で、糸切り無調整の平高台を有したものが存在する（図 63-6）。他には、口縁端部を強く外反させた小皿（皿Ｅ）がみられる（図 63-5）。口径 9.4cm、器高 2.2cm で、底部切り離し手法はヘラおこしである。

高杯は、杯部の形からみると、浅く皿状のもの（図 63-2）と椀状で脚部との境に明瞭な稜をもつもの（図 63- 3・4）があり、後者は脚部がごく短い[4]。

鉢Ａは口径約 30cm で、底部はヘラで切り離した後、高台を貼り付けている（図 63-13）。鉢Ｄは口径 18cm ～ 20cm で、器高約 17cm ～ 18cm におさまり、口縁端部は平坦な面をもつもの（図 63-10・12）と丸くおさめるもの（図 63-11）が存在し、基本的に底部の切り離しはヘラおこしを行うのが特徴である。

壺には小型の壺Ｍ、大型の壺Ｌ、双耳壺がある。壺Ｍは口縁端部を丸くおさめるものが通有である[5]。底部はヘラ切りによるものもみられるが（図 63-16）、大半は糸切りである（図 63-17）。高台の付くものが少数混じる。底部切り離し手法は、壺Ｌが糸切りで（図 63-18）、双耳壺がヘラおこしである（図 63-19）。

花瓶（図 63-20 ～ 23）はいわゆる亜字形花瓶で、大小２種類ある。大型花瓶（図 63-22・23）と小型花瓶（図 63-20・21）はともに肩部の張りが強く、同じプロポーションをしている。

大型花瓶（図 63-22・写真１）は、肩部から体部下半にかけて、「法器寺」銘が認められる。焼成前の生乾きの状態で、「箆」によって縦方向に刻んでいる。手馴れた書体である。

甕は、口縁部の形態の特徴から、ａ：口縁端部を垂下させるもの（図 64-24・25）[6]、ｂ：口縁端部を上に少しつまみ上げるもの（図 64-26・27）[7]、ｃ：口縁端部に平坦な面を持たせるもの（図 64-28）の３種に区別できる。また口径についても、約 40cm（図 64-24・25）・約 25cm（図 64-27）・約 20cm（図 64-26）の３種類に分けられる。全体的に口縁部形態と法量が対応しており、ａは口径約 40cm ～ 60cm の大型甕、ｂは口径約 20 cm ～ 40cm の中型甕、ｃは口径約 20cm の甕にみられる。本来ならば、甕は容量で大中小と分類するのが望ましいが、完形品がないために口径や器厚がある程度容量を規定するものと考えた。

一方、底部は平底を確認しているが、丸底は今のところ不明である[8]。平底の底部は内面に当て具痕、外面にタタキの痕跡が認められる（図 64-29・30）。なお、体部から底部にかけた部分のほとんどが破片資料で、口縁部との接合関係は明らかにしがたい。

蛸壺は小型のもので、口縁部にかけてほぼ垂直に下がるもの（図 63-14）と、内彎気味に下がるもの（図 63-15）がある。端部はいずれも丸くおさめている。

２．器種組成と供給先

器種組成について、表「TK230- Ｉ号窯出土遺物器種別割合」（大阪府教育委員会 1982）では、壺が全体のほぼ 50％と多いことが目立ち、続いて甕が 20％強を占める。その他に、花瓶・蛸壺などの特徴的な製品がみられ、杯・椀・皿・高杯などの供膳具の占める比率は 20％強と少ない。こうした数値がそのまま生産内容を示している訳ではなく、目安にすぎないが、壺・甕などの貯蔵具が出土点数の多くを占めることは否めないであろう。

ちなみに、同時期に属する TK314 号窯・MT5-Ｉ号窯・MT220 号窯の器種組成を「出土遺物器種別割合」（大阪府教育委員会 1982）[9] でみると、そ

表５　ＴＫ 230 －Ⅰ号窯須恵器観察表

図・資料番号	器種	法量（口径×器高×底径・脚径）単位:cm	形態・手法の特徴	出土地点・出土層位	備考
図1－１	杯Ａ	11.9×3.5×6.2	平坦な底部に、斜め上へ開く口縁部を有する。底部はヘラ切り。	北第１灰原灰原層	重ね焼き（３個体融着）。内外面に火だすき痕が認められる。
図1－２	高杯	17.0×6.3×9.2	杯部は外方へ拡がり、皿状を呈す。	南第１灰原	
図1－３	高杯	13.2×6.0以上×—	杯部は内湾気味に立ち上がる。底部には糸切り痕を留める。	南第１灰原	
図1－４	高杯	—×9.5以上×8.1	脚部はごく短い。杯部との境に稜をもつ。	南第１灰原灰層中	脚端部の形態・手法は資料21花瓶の脚部に類似している。
図1－５	小皿	9.4×2.＝×6.3	口縁端部は外へ強く外反する。平底で、底部はヘラおこし。	南第２灰原灰層中	平城宮では燈明皿（皿Ｅ）とされる。
図1－６	皿	11.8×1.7×5.2	口縁部は直線的にのびる。底部は糸切りの平高台。	南第２灰原灰層中	
図1－７	椀	16.5×5.1×7.5	底部は糸切りの平高台。	第２灰原灰層中	
図1－８	椀	14.6×4.0×5.4	口縁部は外反し、底部は糸切り平高台。	南第１灰原	
図1－９	椀	14.6×4.0×5.3	口縁部は外反し、底部は糸切り平高台。	北第１灰原灰層中	重ね焼き（４個体融着）
図1－10	鉢Ｄ	19.2×15.5×8.2	短い口縁部は外反し、口縁端部は面を持つ。肩部は強く屈曲する。平底で底部はヘラおこし。	南第２灰原灰層中／南第３灰原灰層中	
図1－11	鉢Ｄ	18.7×17.0×9.4	短い口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラおこし。	南第３灰原灰層中／西第２灰原焼土混じり	
図1－12	鉢Ｄ	20.3×17.5×8.5	短い口縁部は外反し、口縁端部に面を持つ。	南第２灰原灰層中／北第２灰原焼土混じり黄褐色粘質土中	体部下半外面を中心に火だすき痕が認められる。
図1－13	鉢Ａ	31.0×13.2×14.0	底部はヘラ切り後、貼り付け高台。	北第１灰原灰層中	口縁部の歪みがはげしい（最大長30.8～最小長24.6）。
図1－14	蛸壺	4.5×8.8	体部はロクロ成形。つまみ部は手づくねでナデ付けている。	北第１灰層中	
図1－15	蛸壺	3.5×9.1	体部はロクロ成形。つまみ部は手づくねでナデ付けている。体部に粘土紐巻き上げの凹凸が残る。	北第１灰原灰層中	
図1－16	壺Ｍ	4.2×8.2×4.5	最大胴部径はほぼ中央部にあたる。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後、貼り付け高台。	北灰原灰層中	ＴＫ230-Ⅰ号窯出土資料では少ない。
図1－17	壺Ｍ	4.9×10.3×4.7	肩部は張らず、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部切り離し技法は糸切り無調整。	南第３灰原灰層中	ＴＫ230-Ⅰ号窯出土資料では多い。
図1－18	壺Ｌ	9.3×18.5×8.2	口頸部は長く外反し、口縁端部を上方につまみあげる。底部切り離し技法は糸切り無調整。	南第１灰原灰層中	
図1－19	双耳壺	9.4×30.7×8.9	肩部は張りをもつ。口頸部は長く外反し、口縁端部を上下に強くつまみ出す。耳が付いた痕跡がある。平底で底部切り離し技法はヘラおこし。	北第１灰原灰層中/北第２灰原灰層中/南第１灰原灰層中/南第３灰原灰層中/北第２灰原粘土混じり黄褐色土	
図1－20	花瓶（口頸部）	9.3×5.0以上×—	外反する口頸部に２条の突帯が巡る。	北第1灰原灰層中	資料21との接合関係が推定される。
図1－21	花瓶（体部・脚部）	—×13.0以上×9.3	体部と脚部との境に１条、脚柱部に１条の突帯が巡る。	北第１灰原灰層中/南第３灰原灰層中	資料20との接合関係が推定される。脚端部の形態は資料４高杯の脚部に類似している。
図1－22	花瓶（体部）	21.5（突帯部径）	体部片で、体部と脚部との境に２条の突帯が巡る。	南第１灰原灰層中/南第２灰原灰層中/南第３灰原灰層中	体部下半部に「法器寺」の刻書あり。
図1－23	花瓶	20.5×39.5×24.4	外反した口頸部に４条の突帯（いわゆる紐飾り）が巡る、口頸部は張りのある肩部に続く。体部と脚部の境に２条、ハの字に開く脚柱部にも２条の突帯が巡る。	南第２灰原灰層中	ほぼ完形に復原できる。最大胴部径28.6
図2－24	甕（口縁部）	38.6×—×—	外反する短い口頸部を有し口縁端部を垂下させる。格子状タタキ。	南第１灰原灰層中	肩部以下は不明。格子状タタキは当窯出土甕によく見られるものである。
図2－25	甕（口縁部）	40.8×—×—	外反する短い口頸部を有し口縁端部を垂下させる。縦位平行タタキ。	南第５灰原灰層中	肩部以下は不明。縦位平行タタキは、格子状タタキとともに当窯出土甕によく見られるものである。
図2－26	甕（口縁部）	20.3×—×—	口縁端部を上方へつまみ上げる。肩部はやや張って屈折気味に傾斜を変えて下方へ続くものと推定される。格子状タタキ。	南第３灰原灰層中	肩部の形からすると、底部が平底になる可能が考えられる。
図2－27	甕（口縁部）	24.5×—×—	口縁端部を上方へつまみ上げる。肩部はやや張って屈折気味に傾斜を変えて下方へ続くものと推定される。格子状タタキ。	南第３灰原灰層中	肩部の形からすると、底部が平底になる可能が考えられる。
図2－28	甕（口縁部）	19.6×—×—	短く直立する口頸部で、口縁端部面をつくる。縦位平行タタキ。	第３灰原	
図2－29	甕（底部）	—×—×16.3	平底。格子状タタキ。	南第１灰原灰層中	底部外面に焼台と考えられる荒い粘土塊が付着している。
図2－30	甕（底部）	—×—×19.2	平底。底部内面に当て具痕、外面にタタキの痕跡あり。格子状タタキ。	北第１灰原灰層中	

※資料はすべて灰原からの出土で、**出土地点・出土層位**については、同一個体であっても、接合破片の地点・層位が異なるのでそれぞれを列記した。

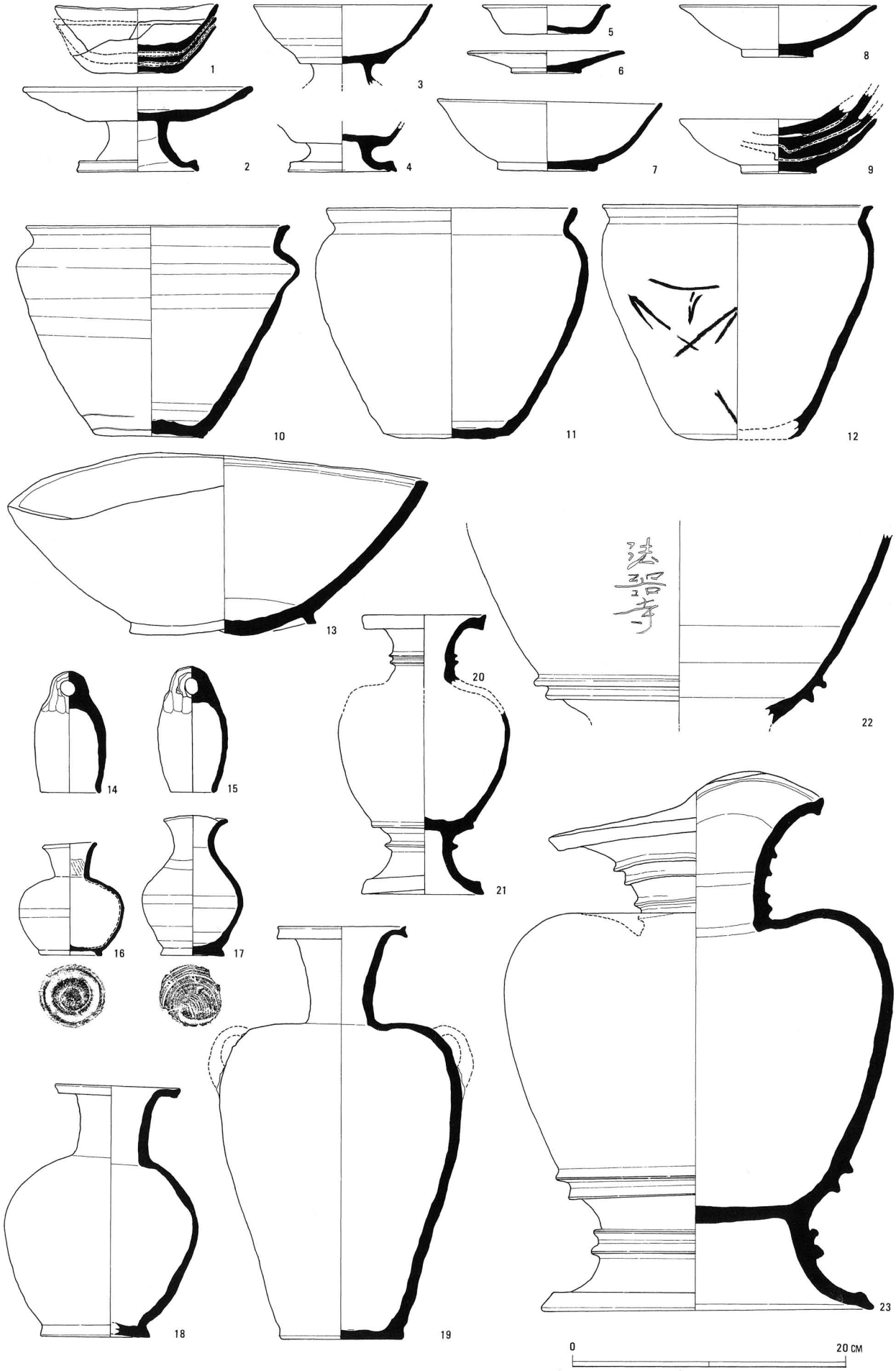
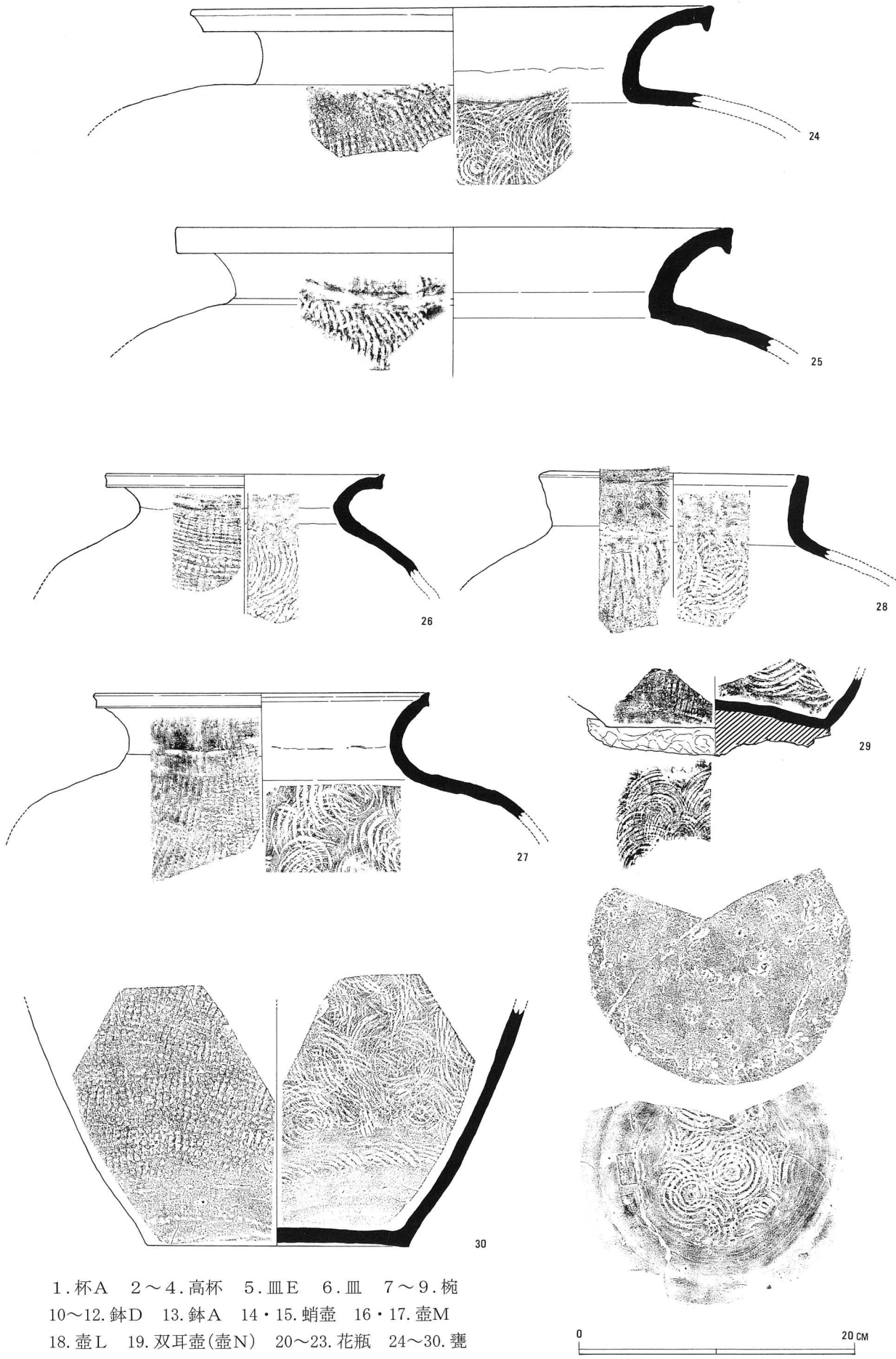


図63　ＴＫ 230 － Ｉ号窯出土須恵器①



1.杯A　2～4.高杯　5.皿E　6.皿　7～9.椀
10～12.鉢D　13.鉢A　14・15.蛸壺　16・17.壺M
18.壺L　19.双耳壺(壺N)　20～23.花瓶　24～30.甕

図64　ＴＫ230－Ｉ号窯出土須恵器②

れぞれの窯はTK230-Ⅰ号窯と同様に壺・甕の貯蔵具が多数を占めている。ただし、TK230-Ⅰ号窯・MT220号窯では壺の比率が高く、逆にTK314号窯・MT5-Ⅰ号窯では低いことからすると、壺を中心に生産した窯と甕を中心に生産した窯に分けることができるかもしれない。いずれにしても、ＴＫ230－Ⅰ号窯では、壺・甕の貯蔵具が全体の約70％を占めており、生産の主力となっている。

ところが、こうした陶邑窯跡群の様相と対照的に、篠窯跡群をはじめとする平安京近郊の須恵器窯では、大型の壺・甕類の生産が減少していく。このことから、平安京を中心とした消費地への供給にあたって、近畿地方の各窯業生産地間において、器種別に生産する分業体制が整えられていた状況が推定されてくる[10]。

さて、甕は、口縁端部を垂下させたものと上方に少しつまみ上げたものが大半を占めること、そして前者が口径40cm以上の大型甕であることは先述した。このような口縁部形態を有する甕は、平安京などの都城域で出土している。とくに垂下状の口縁部形態をもつ大型甕は、今のところ他地域の須恵器窯では出土していないことから、陶邑窯跡群から平安京を中心とした消費地にもたらされた可能性が高いといえる。

一方、壺Mに関しては、口縁端部を丸くおさめた陶邑窯産と考えられる製品が都城域でみられる。また、こうした日常雑器類のほかに、供給先の特定が可能な花瓶・蛸壺などの生産が注目される。亜字形花瓶は、陶邑窯跡群では新しく出現した器種で[11]、大小合わせて数点出土している。寺院とのつながりを推定させるものである。その中の１点に「法器寺」銘刻書がみられ、「法器寺」から発注を受けて製作されたことがうかがわれる。しかし今のところ、陶邑とその周辺地域において「法器寺」という寺名の表記は、地名を含め、文献中の記載やその他の出土遺物（文字瓦・墨書・刻書土器等）に見当たらない。なお、短脚高杯・小皿（皿Ｅ）については日常雑器というよりも、むしろ供養具や灯明具などの仏具として寺院へ供給された可能性も考えられよう。

蛸壺は陶邑窯跡群で特徴的な小型のものである。古墳時代以来製作されている伝統的製品で、陶邑窯跡群の器種組成のなかでは一定の割合を占めている。陶邑窯跡群に近い大阪湾沿岸地域へ直接供給されたことが指摘されている（田辺1981・1984）。

３．操業年代―消費地からみたTK230-Ⅰ号窯の年代―

この窯の操業年代について、陶邑窯跡群の製品が供給されている消費遺跡における編年と対比させて検討することにしよう。

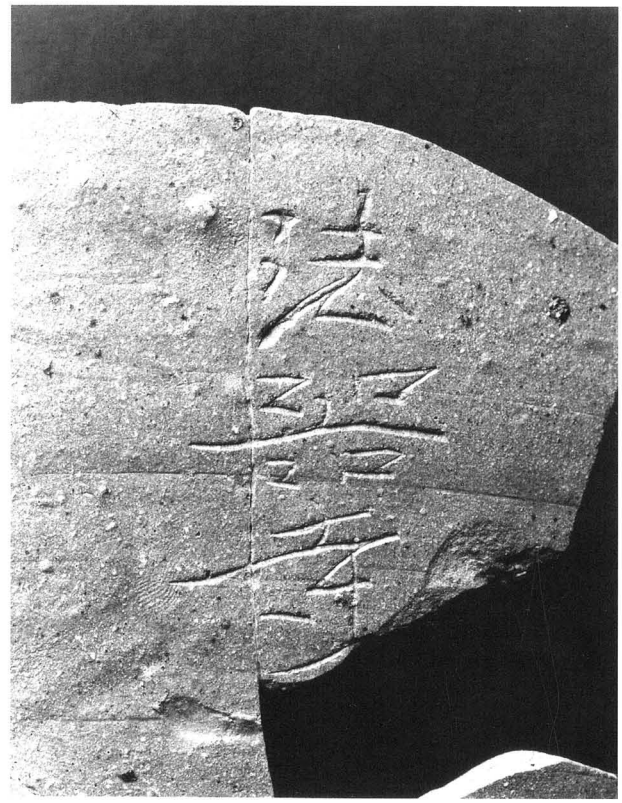


図65 「法器寺」銘刻書須恵器花瓶（S≒1/1）

供膳具の主体は杯Ａと椀で、高台を有した杯Ｂは確認していない。平安京をはじめとする都城域では―土師器が供膳具の主体であることはいうまでもないが―９世紀代になると須恵器の供膳具は、施釉陶器の椀・皿にとって代わられ（小森1994・2005）、出土例が限られてくる。こうした点から、出土資料を、土器編年が確立している都城域出土資料と比較することは難しい。しかし、ＴＫ230－Ⅰ号窯出土資料の供膳具に関しては、杯Ｂという旧器形がみられなくなるとともに、新器形である糸切り平高台の椀が主体となっていることからすると、まず、緑釉単彩陶器の大量生産が開始される９世紀前半以降の年代が与えられるであろう。

また壺Mについては、底部切り離し手法が、ヘラ切り＋貼付輪高台から糸切り＋貼付高台、そして糸切り無調整へと変遷をたどることができる。ＴＫ230－Ⅰ号窯出土壺Mは糸切り無調整のものが主流となるが、旧来のヘラ切り＋貼付輪高台のものもごく少数ながら存在する。つまり、糸切り無調整へと完全に変化する過渡的様相を呈したものといえよう[12]。したがって、こうした在り方から、高台付壺Mと糸切り無調整の壺Mの混在が通有である長岡京期よりも遡らないが、糸切り無調整になっていく平安京などの資料に示される９世紀後半以降まで下らない年代が考えられてこよう。

鉢は、平安京などの都城域ではあまりみられない形状をしている。また、都城域では底部糸切りが多いのに対し、この窯では底部ヘラおこしが基本である。底部ヘラおこしを多用する点は、播磨地域と類似しているといえる。

甕については垂下状口縁を有するものが注目される。この陶邑窯跡群独自の製品といえる甕は、平城京や長岡京、平安京などの都城域で出土している[13]。長岡京・平安京ではこうした特徴を有する甕は都城の土器編年でいう平安京Ⅱ期中型式〈870年～900年〉(上村・小森 1996) に相当する土器群（長岡京の百々遺跡 SK6901・平安京三条三坊三町 SX07）でみられる。

ただし、耐久性の面からすると、土師器の食器類は、須恵器や施釉陶器に比べて弱く、廃棄・交換の回転が早いので、土器群の中では新相を示すことが多い。つまり消費遺跡出土土師器の食器がより生産年代に近く、土器群が使用された最終段階を示している可能性が高い。とくに須恵器甕などは、土師器の食器に比べてより長い期間の使用を想定する必要がある。このように見ていくと、平安京Ⅱ期中型式の土器群に属する須恵器甕の生産年代は使用年代より古い年代を与えることができる。

以上のことから、ＴＫ 230 －Ⅰ号窯の操業年代は９世紀前半～中頃の幅で捉えておくことが妥当であると考えられよう。

おわりに

企画展を準備するなかで、陶邑窯跡群出土須恵器に触れ、実に豊かな資料の山の前に立っていることを実感した。小稿ではＴＫ 230 －Ⅰ号窯出土資料について、概略を紹介するにとどめた。器形の種類と形態の特徴、破片数や個体数、そして器種組成などの数量データを提示し、それに基づいた生産内容・操業年代などの検証は、稿を改めて報告することにしたい。

本文の執筆については、第１章～第３章を木村理恵（奈良文化財研究所）、その他を亀島重則・三宅正浩が分担した。

「法器寺」銘刻書花瓶については、水野正好氏から種々のご教示をいただいた。また、実測図作成にあたって、李聖子（財団法人交野市文化財事業団）・相場さやか（奈良女子大学大学院）、森暢郎（大阪大学大学院）・向川侑大・山中良平（大阪大学）、西垣遼（流通科学大学）の諸氏に協力をいただいた。末尾ながら心より感謝の意を表します。

注

1) ＴＫ 230 －Ⅰ号窯は 1968 年度に発掘調査を実施し、『陶邑』Ⅴ（大阪府教育委員会 1980）に報告している。整理箱で 93 箱（窯体内から 25 点、灰原から 567 点）の須恵器が出土したと記されている。現在、ＴＫ 230 －Ⅰ号窯出土須恵器はコンテナで 62 箱収蔵している。なお、ＴＫ 230 号窯（73 箱）、ＴＫ 230-Ⅱ号窯（120 箱）の出土須恵器収蔵コンテナの中にも、ＴＫ 230 －Ⅰ号窯に帰属すると推定される資料がみられる。

2) 須恵器の記号による呼称は、基本的に『平城宮発掘調査報告ＸＶⅠ兵部省地区の調査』（奈良文化財研究所学報第 70 冊 2005）に拠った。甕を除いて全形がうかがわれる資料を中心に図１・２、表１に掲載した。『陶邑』Ⅴには、このほかの器種として、短頸壺（無蓋広口短頸壺・有蓋短頸壺）・円面硯の出土を記している。

3) 窯体内から底端部にハの字型の高台を付した椀が出土している (大阪府教育委員会 1980)。

4) 『陶邑』Ⅴでは、出土遺物のなかに高杯が認められないが、「陶邑窯の終息」（中村 2001b）では、前者（図 1-2）の脚部に深めの杯が付く形状の高杯が掲載されている。

5) 陶邑窯跡群出土の壺Ｍは口縁端部を丸くおさめる形態が主流であるのに対し、篠窯跡群をはじめとする平安京近郊窯でみられる壺Ｍは口縁端部を上下に肥厚させる形態が主流である。両窯跡群における壺Ｍの口縁端部の形態の相違点については、伊野近富氏が指摘している（伊野 1990）。

6) この口縁部形態の甕は、陶邑窯跡群の陶器山地区・高蔵寺地区・光明池地区でみられる形態である。陶邑窯跡群として産地同定できる可能性が高い形態である。

7) こうした口縁部形態は、後に東播系須恵器甕として成立していく甕の口縁部形態と類似しており、ＴＫ 230 －Ⅰ号窯と時期が近い東播磨・神出地域の窯である鴨谷３号窯出土の甕の口縁部形態とも類似する。鴨谷３号窯の出土資料は未報告であるが、実見するにあたり兵庫県教育委員会森内秀造氏にご配慮いただいた。

8) 近畿地方の消費遺跡での出土例からすると甕は丸底が主流である可能性は高い。しかし、体部から底部にかけた部分のほとんどが破片資料で、歪みもはげしく、底部の判別は難しい。

9) 「出土遺物器種別割合」（大阪府教育委員会 1982）によると壺・甕の比率は以下の数値（概算）となる。ＴＫ 230 －Ⅰ号窯 壺 50％：甕 20％強、MT220 号窯 40％強：甕５％強、TK314 号窯 壺 20％弱：甕

60％弱、MT5-Ⅰ号窯 壺 20％強：甕 40％。なおＴＫ 114 号窯・ＭＴ 93 号窯・ＭＴ 217 号窯についての器種別割合は不明。

10)　器種別生産分業といえるような体制については、陶邑窯跡群と平安京近郊窯との比較だけでなく、播磨地域をはじめとした広範囲における窯の生産内容との比較も必要となる。

11)　陶邑窯跡群の同時期の窯出土資料には花瓶は認められない。仏教関連遺物としては、MT5-Ⅰ号窯から水煙型土製品が出土している。

12)　糸切り＋貼付輪高台の個体を現時点では確認していないが、これら３種類の底部形態がどのような状態で混在するのかは、編年にも関わる重要な視点である。

13)　平城京域では西大寺食堂院の甕据付遺構出土資料が挙げられる。

参考文献

秋山浩三

1986「胎土からみた長岡京の土器」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 18 集　向日市教育委員会

伊野近富

1990 「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第 37 号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

大阪府教育委員会

1980 『陶邑』Ⅴ　大阪府文化財調査報告書第 33 輯

1995 『陶邑』Ⅷ　大阪府文化財調査報告書第 46 輯

上村憲章

1994 「須恵器」『平安京提要』角川書店

上村憲章・小森俊覚

1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『(財) 京都市埋蔵文化財研究所紀要』第３号京都市埋蔵文化財研究所

國下多美樹

2005 「長岡京出土土器の基礎的研究」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 65 集（第２分冊）長岡京跡左京二条条間大路・東二坊大路　(財) 向日市埋蔵文化財センター

小森俊覚

1994 「平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』角川書店

2005 『京から出土する土器の編年的研究―日本律令的土器様式の成立と展開、7 ～ 19 世紀』京都編集工房

佐藤　隆

2004 「８世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係―陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その２―」『大阪歴史博物館研究紀要』第３号

200 7「７・８世紀陶邑編年の再構築と都城出土資料の様相」『(財) 大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005 年度共同研究成果報告書』(財) 大阪府文化財センター

田辺昭三

1966 『陶邑古窯群１』 平安学園研究編集第 10 号

1981 『須恵器大成』 角川書店

1984 『窯業』 講座・日本技術の社会史４

中村 浩

1977 「出土遺物の分類と編年」『陶邑』Ⅱ大阪府教育委員会

1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ大阪府教育委員会

1981 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房

2001a 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房出版

2001b 『和泉陶邑窯の歴史的研究』 芙蓉書房出版

奈良国立博物館

1993 『密教法具』

奈良文化財研究所

2005『平城宮発掘調査報告ＸＶＩ兵部省地区の調査』奈良文化財研究所学報第 70 冊

2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』

═ 平成 19 年度普及・広報事業及び資料 ═

1．普及・広報事業

1－1．研究会・検討会

■ 研究会

第 55 回大阪府埋蔵文化財研究会

「最近の重要な調査成果と記念講演」

日時　2007 年 9 月 15 日（土）

会場　大阪府教育委員会文化財調査事務所

第 56 回大阪府埋蔵文化財研究会

「墳墓と焼物（土器・瓦）の考古学」

日時　2008 年 3 月 8 日（土）

会場　大阪歴史博物館

■ 調査等スライド検討会

第 1 回検討会　2007 年 5 月 9 日（水）

「大町遺跡の調査」　上林史郎

第 2 回検討会　2007 年 6 月 13 日（水）

「長江中流域の遺跡と博物館－全国埋文協平成 18 年度研修報告」岡本敏行

第 3 回検討会　2007 年 7 月 11 日（水）

「日本築堤開田の技術系譜」　小山田宏一

第 4 回検討会　2007 年 9 月 12 日（水）

「蔀屋北遺跡出土古墳時代馬の骨格復元」小浜　成

第 5 回検討会　2007 年 10 月 10 日（水）

「銭塚古墳の調査」橋本高明

第 6 回検討会　2007 年 12 月 12 日（水）

「招堤中町遺跡の調査」奥　和之

第 7 回検討会　2008 年 2 月 13 日（水）

「堀遺跡の調査」地村邦夫

第 8 回検討会　2008 年 3 月 12 日（水）

「音律の歴史」岩崎二郎

1－2．発掘調査の現地説明会

寺田遺跡（和泉市）

日時　2007 年 10 月 27 日 (土) 参加者数：130 人

福井遺跡（茨木市）

日時　2008 年 1 月 26 日（土）　参加者数：110 人

高木遺跡（松原市）

日時　2008 年 2 月 9 日（土）　参加者数：45 人

1－3．職場体験学習

2008 年 2 月 15 日（木）

堺市立晴美台中学校（2 人）を受け入れ、遺物整理（土器洗浄・復元等）の体験指導。

1－4．博物館実習

2007 年 8 月 9 日（木）・10 日（金）、13 日（月）～ 15 日（水）

博物館実習生計 4 人（関西学院大学・立命館大学・大阪観光大学）を受入れ指導した。

図 66　福井遺跡現地説明会

図 67　高木遺跡現地説明会

1－5．所蔵資料の展示

a．府立泉北考古資料館

■ 企画展

所蔵する埋蔵文化財の中から、特定のテーマで展示。

第 2 回　「出土品に登場する生き物　植物編」

会　期：2006 年 11 月 8 日（水）～ 2007 年 6 月 3 日（日）

展示品：ヒョウタン 3 点・木の葉の痕跡のある土師器甕 2 点（蔀屋北遺跡）、木の葉の圧痕跡を付けた土師器椀 1 点（讃良郡条里遺跡）、水辺水草蝶鳥文鏡 1 点・桜花双鳥文鏡 1 点・瑞花鴛鴦文八稜鏡 1 点、青白磁菊花形合子 2 点（箕面経塚）、柄鏡 1 点（堺環濠都市遺跡）、金箔押瓦 2 点（大坂城跡）、軒丸瓦 5 点・軒平瓦 1 点（新堂廃寺）、軒丸瓦 2 点（海会寺）、軒丸瓦 4 点・軒平瓦 3 点（信太寺跡）、軒丸瓦 2 点（百済寺）　計 31 点

第３回　「埴輪の棺－埴輪を棺に使った埋葬－」
会　期：2007年６月６日（水）～10月28日（日）
展示品：円筒埴輪２点（茶山遺跡・羽曳野市）、円筒埴輪２点・衣蓋形埴輪１点・鶏形埴輪１点・鉄鏃11点（土師の里遺跡・藤井寺市）　計17点

図68　埴輪の棺 －埴輪を棺に使った埋葬－

第４回「平安時代の須恵器－陶邑に白煙が絶えるころ－」
会　期：2008年１月５日（土）～６月８日（日）
展示品：花瓶５点・小皿２点・瓶子４点・高杯１点・杯２点・椀２点・壺５点・鉢４点・甕６点・蛸壺11点。計42点（陶邑窯跡群高蔵寺第230－Ⅰ〈TK 230－Ⅰ〉号窯・堺市）

図69　平安時代の須恵器 - 陶邑に白煙が絶えるころ -

■優品展
1875年（明治８年）に設置された「大阪博物場」が収集した陶磁器（大阪府指定有形文化財）を、「府立大阪博物場」旧蔵優品展シリーズとして公開。

第13回　「陶磁の置物Ⅰ －九谷焼の人物置物－」
会　期：2007年５月９日（水）～７月29日（日）
展示品：九谷焼色絵舞踏美人（３躯１組）

第14回　「陶磁の置物Ⅱ －備前焼・屋島焼などの獅子置物－」
会　期：2007年８月１日（水）～10月28日（日）
展示品：備前焼獅子置物・屋島焼緑褐釉獅子置物・松本萩焼褐釉白濁釉獅子置物　計３点

第15回　「陶磁の置物Ⅲ ―薩摩焼・唐津焼などの人物置物―」
会　期：2008年１月５日（土）～４月６日（日）
展示品：薩摩焼白釉唐子・唐津焼鉄釉白釉西行・備前焼蝦蟇仙人・万古焼牛乗牧童・大樋焼飴釉布袋・乾也焼色絵関帝　計６点

図70　陶磁の置物Ⅲ - 薩摩焼・唐津焼などの人物置物 -

b．府庁別館
■文化財展示
発掘調査成果を紹介するために、府庁別館１階と８階のロビーに設けられた文化財展示コーナーに

埋蔵文化財を展示した。

「土器・ドキ・どき」展

陶邑窯跡群で焼かれた須恵器の集積地・深田橋遺跡（堺市）出土の須恵器を紹介

会　期：2007年2月26日（木）～2007年9月13日（木）

展示品：須恵器杯蓋2点・杯身2点・有蓋高杯2点・高杯蓋1点・無蓋高杯1点・はそう1点・甕1点・樽形はそう1点・甑1点・壺1点・把手付壺1点・蓋1点　計17点

「瓦　－屋根を飾った文様－」展

屋根の軒先・棟を飾った瓦を紹介。

会　期：2007年年9月13日（木）～2008年4月14日（月）

展示品：軒丸瓦5点・垂木先瓦2点・鬼瓦1点（新堂廃寺・富田林市）、軒丸瓦3点・軒平瓦1点（正法寺跡・四條畷市）、軒丸瓦2点・軒平瓦2点（信太寺跡・和泉市）　計16点

図71　瓦　－屋根を飾った文様－　（8階ロビー）

2．資料件数

2－1．埋蔵文化財（有形文化財・重要文化財を含む）

（整理箱数）

■**泉北考古資料館**（堺市南区若松台）	10,799箱
■**泉北収蔵庫**（高石市綾園4丁目）	42,461箱
■**大井収蔵庫**（藤井寺市西古室）	12,664箱
■**志紀収蔵庫**（八尾市志紀町西）	3,097箱
■**北部北収蔵庫**（摂津市鳥飼中）	3,171箱
■**東大阪収蔵庫**（東大阪市長田東）	70,276箱
■**文化財調査事務所**（堺市南区竹城台）	8,408箱
合計	150,876箱

2－2．民俗文化財

■ 文化財調査事務所

・谷口家資料	22点
・上辻家資料	13点
・守田コレクション	20点
・上平家資料	15点
・畑野家資料	6点
・三宅家資料	一括
・大恩寺資料	一括
・前西家資料	2件

2－3．写真・図面その他の資料

■ 文化財調査事務所

・図面資料
・写真資料
・台帳
・パネル

2－4．図書

・図書　38,069冊

═ 平成19年度大阪府教育委員会文化財保護課刊行物一覧 ═

大阪府埋蔵文化財調査報告

２００７－１　『安威城跡』
２００７－２　『島泉南遺跡』
２００７－３　『千里丘遺跡』
２００７－４　『桑原遺跡』
２００７－５　『鳳東町４丁遺跡』
２００７－６　『余部日置荘遺跡』
２００７－７　『大和川今池遺跡』
２００７－８　『安松田遺跡Ⅱ』
２００７－９　『下池田遺跡』
２００７－10　『桜井駅跡』

概要報告

『平石遺跡発掘調査概要・Ⅱ』

『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報　11』

普及啓発資料

『大阪考古名所圖會―摂津名所図会に見る大阪の遺跡―』　文化財あれこれブックレット№3

═ 平成 19 年度資料貸出・掲載・閲覧事業一覧 ═

実物資料・複製資料長期貸出

	申請者	遺跡	資料内容・点数	目的（展示内容等）
1	国立歴史民俗博物館	池上曽根遺跡	石庖丁3　計3点	総合展示『稲と倭人』
2	大阪府立狭山池博物館	池尻城跡 大和川今池遺跡	冑金1 鋤 1　計2点	常設展示『中世の土地開発と狭山池』
3	大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）	大坂城跡	美濃焼小鉢1・天目茶碗1・鉄釉丸椀1・鉄釉皿2・灰釉折縁皿1・灰釉菊皿1・灰釉皿1・志野向付1・皿1・中国製白磁1・青花皿1・ベトナム製色絵皿1・金箔瓦4　計17点	常設展示（リフレッシュコーナー）
4	大阪府立西成高等学校	喜志遺跡 八尾南遺跡 萱振遺跡 崇禅寺遺跡 陶器南遺跡	弥生土器甕1 土師器直口壺2・小形丸底壺1・高杯1・台付甕1 土師器甕1 須恵器杯身1・有蓋高杯蓋3・有蓋高杯身3・はそう1・壺1 須恵器片コンテナ1箱　計16点　コンテナ1箱（須恵器片）	授業・展示
5	大阪府立大手前高等学校	大坂城跡	金箔丸瓦1・飾瓦1・軒平瓦1・文字入り平瓦1・軒丸瓦1・天目茶碗1・須恵器短頸壺1・分銅1・白磁香炉1・美濃水滴1・鳥文青花大皿1・鍔1・笄1　計13点	授業・展示
6	大阪府立三国丘高等学校	向泉寺跡	軒丸瓦10・軒平瓦8・斧瓦3・雁振瓦1・瓦器椀7・土師皿11・すり鉢1・土師質羽釜1・陶磁器5・硯1　計48点	授業・展示
7	大阪府立茨田高等学校	茨田安田遺跡	弥生土器壺2、須恵器杯5・高杯3・碗1・甕4・こね鉢1・その他1、韓式系土器甕1、土師器壺3・甕2・高杯3・碗1・皿4、瓦器碗31・皿1・火鉢1・釜1、磁器碗1、砥石1、下駄2、箸2、人形首1、土錘1、キセル1、加工骨1　計76点	授業・展示
8	大阪府立四條畷高等学校	更良岡山遺跡 雁屋遺跡	円筒埴輪3、須恵器短頸壺1・甕1・提瓶1 弥生土器壺7・長頸壺1・無頸壺1・無頸壺蓋1・鉢3・鉢蓋1・甕7・台付鉢2・台付甕1・器台3・高杯3・手焙り形土器2、黒色土器椀1、土師器壺2、須恵器平瓶1・無蓋高杯1・蓋杯蓋1・蓋杯杯身2・はそう1・壺1、砥石4、石鏃5　計57点	授業・展示
9	大阪府立八尾北高等学校	萱振遺跡	弥生土器壺1・長頸壺1・無頸1・壺蓋1、土師器壺1、須恵器有蓋高杯1・高杯蓋1・杯身1・杯蓋1・はそう1、円筒埴輪1・蓋形埴輪6、勾玉4・紡錘車2、臼玉8　計31点	授業・展示
10	大阪府立茨木高等学校	新庄遺跡	弥生土器壺2・甕2・鉢2・蓋3、磨製石斧5　計14点	授業・展示
11	能勢町歴史資料室	上椿遺跡 尾道遺跡 九ノ坪遺跡 大里遺跡	須恵器甕1 須恵器杯身1・杯蓋2・円面硯1、土師器高杯1 黒色土器椀2、土師器小皿3 弥生土器片1・甕3・無頸壺1・鉢1・蓋1・高杯1、土師器壺1・甕3・器台文字瓦6、軒丸瓦8、軒平瓦1、石製巡方1　計46点	能勢町歴史資料室（能勢町ふるさと会館内）常設展示
12	豊能町立郷土資料館	余野城跡	瓦器椀7・瓦器片20、土師皿4、須恵器片3、砥石1　計35点	豊能町立郷土資料館常設展示
13	吹田市立博物館	吉志部瓦窯	軒丸瓦1、平瓦1、緑釉陶器片2、緑釉瓦片6、窯道具6　計16点	常設展示『桓武朝平安宮瓦窯』
14	藤井寺市立図書館	三ツ塚古墳	小型修羅1　計1点	図書館展示室常設展示
15	堺市立みはら歴史博物館	余部遺跡	瓦器椀27・皿6、土師器皿1、瓦質羽釜1、鋳型片29、鞴羽口18、鉄製刀子1、青銅製品2、鉄塊系遺物7、砥石7　計99点	常設展示『河内鋳物師』
16	太子町立竹内街道歴史資料館	伽山古墓	銀製帯金具（レプリカ）一式	常設展示（第2展示室）
17	池上曽根弥生学習館	池上曽根遺跡	炭化米（No.286）1ケース	常設展示
18	和泉市いずみの国歴史館	府中遺跡 坂本寺跡 大園遺跡 池田寺跡 信太寺跡 和泉寺跡 池上曽根遺跡	弥生土器高杯1・壺7・甕2・蛸壺形土器2 軒丸瓦6・軒平瓦5 有舌尖頭器2、子持勾玉2、滑石製勾玉1・紡錘車1 文字瓦6、軒丸瓦8、軒平瓦1、石製巡方1 平瓦（人物画像）1・文字瓦4、軒丸瓦1、軒平瓦1 平瓦2・軒平瓦1・軒丸瓦3 弥生土器甕1・水差形土器1・高杯3・鉢3・壺7、木製品高杯1・把手付鉢1・鉢1・斧の柄1・布巻具（経巻具）1・用途不明品1・小型四脚付盤2・臼1・杓子2・鍬3・簪5・石錘2・大型石庖丁2・環状石斧2・石斧9・石槍9・投弾3・ヒスイ勾玉1・管玉5・ガラス片3、イノシシの下顎骨1・鹿角1・骨製ヤス2・骨器未製品5・銅鏃2・八稜鏡1　計141点	常設展示

19	宮崎県立西都原考古博物館	陶邑窯跡群	須恵器	計109点	常設展示コーナー『考古学研究所』
20	サイエンス・サテライト	三軒屋遺跡 池上曽根遺跡	縄文土器1 弥生土器1	計2点	常設展示『くらしの中の放射線利用』
21	吉志部神社	吉志部瓦窯	軒丸瓦1、軒平瓦1、緑釉瓦片2、トチン2	計6点	社務所玄関ロビーに展示

実物資料短期貸出

	貸出先(申請者)	遺 跡	資 料 名／点 数	展覧会名称等
1	柏原市立歴史資料館	鳥坂寺跡	軒丸瓦7 軒平瓦1 鴟尾1、せん仏1、箆書銘平瓦1、戯画平瓦1	夏季企画展『河内六寺の輝き』
2	福井県立歴史博物館	木の本遺跡	馬鍬1	特別展『古代のテクノロジー～継体大王の時代の人と技』
3	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	アカハゲ古墳	黄褐釉円面硯2	秋季特別展『金の輝き、ガラスの煌きー藤ノ木古墳の全貌ー』
4	大阪府立近つ飛鳥博物館	藤の森古墳	轡1 鉄鏃8 鉄釘5 鎹2	秋季特別展『横穴式石室誕生ー黄泉国の成立ー』
5	大阪府立狭山池博物館	吉野遺跡 大坂城跡	丹波窯甕1 備蓄銭一式 鋸2 鉋1 台鉋1 錐3 鑢1 砥石2 鍬先2 墨壺1 くじら尺1 ものさし1 裏尺1 包丁2 鎌2 鍋1	特別展『国土を拓いた金物たちー採鉱冶金技術と土地開発ー』
6	太子町教育委員会	岸之本南遺跡	韓式土器1 土師器高杯1 土師器鉢1 須恵器高杯1 須恵器甕1 須恵器壺1	企画展『女帝誕生ー推古天皇の即位と治世ー』
7	和泉市教育委員会	野々井2号墳 野々井9号墳 野々井28号墳 野々井30号墳 檜尾塚原2号墳 檜尾塚原6号墳 檜尾塚原8号墳 檜尾塚原8号墳 檜尾塚原9号墳 檜尾塚原9号墳 檜尾塚原9号墳 牛石7号墳 牛石7号墳 牛石14号墳 陶器南遺跡 名子山古墳	石製紡錘車1 石製子持勾玉1 耳輪2、須恵器杯蓋1・杯1・高杯1・壺1 石製紡錘車1、須恵器台付壺1・壺蓋1・脚付壺1・高杯1 陶棺1、陶製当て具1 琥珀玉1 須恵器短頸壺1・壺蓋1・脚付壺1・台付ハソウ1、剣1、鞍1、管玉9、ガラス玉14、棗玉1、水晶製丸玉1 須恵器蓋杯2・高杯2・ハソウ1・脚付壺1・壺蓋1、剣1・鏡板1・鉄鏃5・袋状鉄斧1・鎌1 棗玉7・ガラス玉＋碧玉管玉1連・水晶製勾玉1 馬具 鏡板1 杏葉3 辻金具2 鞍2 銀環1 ガラス玉47 空玉5 土製小玉1連 琥珀製玉1 塼3 須恵器窯道具5 鉄製武具 胡禄一式 銅製素文鏡1	特別展『陶器のムラに眠る人々ー陶邑と周辺地域の古墳を考える一』
8	千早赤阪村教育委員会	大坂城跡 堺環濠都市遺跡	一石五輪塔1 一石五輪塔10	企画展『一石五輪塔の世界』
9	香芝市二上山博物館	加納2号墳 玉手山10号墳 玉手山東横穴群	黒漆塗鞘入大刀1 須恵器杯2 須恵器台付壺1 金環1 捩文科鏡1 刀子1 金環類4 銀鈴1 紡錘車1	冬季企画展『二上山麓の考古学ー古墳時代編ー』
10	弥生文化博物館	堺環濠都市遺跡 東郷遺跡	陶磁器4 新羅土器1	冬季特別展『発掘された日本列島2007(地域展)発掘された大阪2007ー水都大阪の国際交流史ー』
11	滋賀県立安土城考古博物館	お亀石古墳 新堂廃寺	平瓦1 軒丸瓦3 軒平瓦2 文字瓦1 鬼瓦1 塼仏2 螺髪1 鴟尾1	春季特別展『仏法の始め、茲(これ)より作(おこ)れりー古墳から古代寺院へー』
12	藤井寺市教育委員会	津堂遺跡・谷川遺跡・伽山遺跡	瓦器・土師器	『中世城館調査報告』の作成

資料撮影、写真・図面等貸出・掲載

	依頼者	撮影 掲載 貸出	種類	遺跡	資料内容／点数	目的／掲載誌
1	藤井寺市教育委員会	掲載	写真カラー	鞍塚古墳	発掘状況1	ホームページ「歴史探報」「古代からのメッセージ」
2	藤井寺市教育委員会	掲載	写真カラー	国府遺跡 土師の里遺跡	人骨出土状況2 竪穴式住居1	ホームページ「歴史探報」「古代からのメッセージ」
3	大阪府立近つ飛鳥博物館	掲載	写真カラー	お亀石古墳	石槨外護施設1	春季特別展『河内古代寺院巡礼』図録
4	柏原市立歴史資料館	掲載	写真カラー	鳥坂寺跡	軒丸瓦7、軒平瓦1、鴟尾1、せん仏1、箆書銘平瓦1、戯画平瓦1	夏季企画展『河内六寺の輝き』図録
5	(財)交野市文化財事業団	掲載	図面	車塚古墳群	配置図1　第3号墳実測図1、第4号墳実測図1、第5号墳実測図1	『交野市の埴輪』
6	大阪府立旭高等学校	撮影 掲載	写真カラー	陶邑窯跡群	泉北考古資料館　資料館展示須恵器	第54回NHK杯全国高校放送コンテスト出品作品
7	日本放送協会	撮影 掲載	写真カラー	陶邑窯跡群	泉北考古資料館　資料館展示須恵器	特集番組『北大路路山人』
8	福井県立歴史博物館	撮影 掲載	写真カラー	木の本遺跡	馬鍬	特別展『古代のテクノロジー～継体大王の時代の人と技』図録
9	東京法令	掲載	写真カラー	三ツ塚古墳	修羅出土状況1	高校歴史資料『新日本史総覧(仮称)』
10	藤井寺市観光協会	貸出 掲載	写真カラー	三ツ塚古墳	修羅出土状況1	絵葉書セット
11	大阪大学総合学術博物館	貸出 掲載	写真カラー	蔀屋北遺跡	SK940馬全身骨格出土状況	展示パネル・映像等
12	都城市教育委員会	貸出 掲載	写真カラー	池上曽根遺跡	環濠検出状況1 方形周溝墓1	展示パネル・パスター・チラシ等
13	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	掲載	写真カラー	寛弘寺75号墳	鍍金銀製空玉1　金銀装小刀1　小刀柄頭金製飾金具1	秋季特別展『金の輝き、ガラスの煌き－藤ノ木古墳の全貌－』図録
14	大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出 掲載	写真モノクロ	藤の森古墳	石室全景1　石室奥壁1　石室袖部1 玄室からみた羨道部の閉塞石1	秋季特別展『横穴式石室誕生－黄泉国の成立－』図録
15	河出書房新社	貸出 掲載	写真モノクロ	はさみ山遺跡	住居跡(旧石器時代)	『考古学の世界－旧石器時代』
16	大阪府立狭山池博物館	撮影 掲載	写真カラー	吉野遺跡 大坂城跡	丹波窯甕1　備蓄銭一式 鋸2　鉋1　台鉋1　錐3　鑢1　砥石2　鍬先2　墨壺1　くじら尺1　ものさし1　裏尺1　包丁2　鎌2　鍋1	特別展『国土を拓いた金物たち－採鉱冶金技術と土地開発－』図録
17	個人	貸出 掲載	図面	百済寺	軒丸瓦8　軒平瓦10 軒平瓦3	『百済寺の軒丸瓦とその同笵関係』
18	太子町教育委員会	貸出 掲載	写真カラー	岸之本南遺跡	岸之本南遺跡全景1　井戸遺物出土状況1	企画展『女帝誕生－推古天皇の即位と治世－』図録
19	藤井寺市郷土研究会	撮影 掲載	写真カラー	三ツ塚古墳	修羅出土状況1	世界遺産登録に向けた応援パネル
20	泉佐野市教育委員会	掲載	カラー写真 図面・表	坂本寺 畠中遺跡 要池遺跡 大園遺跡 長滝遺跡 机場・日根野遺跡 日置荘遺跡	講堂跡1 遺構図1 遺構図1 遺構図2 遺構図1 遺構図1 中世区画一覧表1	『新修　泉佐野市史』第1巻通史編

21	和泉市教育委員会	貸出 掲載	写真カラー	陶器千塚 陶器千塚3号墳 野々井9号墳 檜尾塚原3号墳 檜尾塚原8号墳 檜尾塚原9号墳 檜尾塚原9号墳 牛石13号墳 名子山古墳	周辺航空写真1 盗掘坑断面に見える主体部1 子持勾玉1 全景1　横穴式石室1 主体部全景1 第2主体全景1　第3主体検出状況全景 第3主体須恵器検出状況1 牛石13号墳全景1 名古山古墳出土土器 名古山古墳全景1　墓道1　羨道側から玄室を望む	特別展『陶器のムラに眠る人々ー陶邑と周辺地域の古墳を考えるー』図録
22	有限会社ハユマ	貸出 掲載	写真カラー	陶邑窯跡群		『図解　日本古代史』
23	堺市教育委員会	掲載	写真モノクロ	史跡土塔	土塔全景・調査風景	『史跡土塔—遺構編—』
24	韓国馬山文化放送	撮影 掲載	ビデオ	陶邑窯跡群	泉北考古資料館　資料館展示須恵器　復元TG61号窯1	ドキュメンタリー番組『韓国の古代歴史案羅伽耶』
25	フォト・オリジナル	貸出 掲載	写真カラー	陶邑窯跡群	初期須恵器集合	中学生教材『歴史の教材』
26	千早赤坂村教育委員会」	貸出 掲載	写真カラー	大坂城跡 堺環濠都市遺跡	一石五輪塔1 一石五輪塔10	企画展『一石五輪塔の世界』
27	寝屋川教育委員会	貸出 掲載	写真カラー	蔀屋北遺跡	馬骨出土状況1	『寝屋川市史』第10巻本文編
28	香芝市二上山博物館	貸出 掲載	写真モノクロ	北玉山古墳 北玉山古墳 壺井御旅山古墳 壺井御旅山古墳 加納2号墳 シショツカ古墳 シショツカ古墳 ツカマリ古墳 ツカマリ古墳 玉手山東横穴群 寛弘寺古墳群 松岳山古墳 松岳山古墳	墳丘全景1　前方部粘土槨全景1　航空写真1 鏡銅・鉄剣出土状態1　捩文鏡1 前方部東斜面・くびれ部1　葺石・壺出土状況1 前方部東斜面1　三角縁神獣鏡1　壺形土器1 前面状況 金糸・銀糸1　大刀責金具1　鞍金具1　銀象嵌大刀柄頭1　第6トレンチ石室前面1　奥室1 壇・墳丘全景1　墳丘第1・2段南面中央1 墳丘全景1 横穴群遠景1 調査区全景航空写真1 石棺北方発掘状態1　西南から見た石棺外形1 石棺身全景1　勾玉・管玉・丸玉・小玉1・石釧2	冬季企画展『二上山麓の考古学ー古墳時代編ー』
29	大阪府立弥生文化博物館	撮影 掲載	写真カラー	堺環濠都市遺跡 東郷遺跡	陶磁器4 新羅土器1	冬季特別展『発掘された日本列島2007(地域展)発掘された大阪2007ー水都大阪の国際交流史ー』
30	有限会社コーベット・フォトエージェンシー	貸出 掲載	写真カラー	はさみ山遺跡	旧石器時代の竪穴住居	高校歴史資料集『新日本史総覧』
31	フォト・オリジナル	掲載	写真カラー	陶邑窯跡群	須恵器集合	中学生副教材『入試WIN』
32	河内長野市教育委員会	貸出 掲載	写真カラー	陶邑窯跡群	復元TG61号窯1 須恵器の変遷6	シリーズ河内長野の遺跡2『大師山古墳・三日市遺跡ー古墳時代の河内長野ー』
33	関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター	掲載	写真カラー	大坂城跡	豊臣大坂城三の丸の石垣	『豊臣期大坂城を掘る』講演会案内チラシ・ポスター
34	香芝市二上山博物館	掲載	写真モノクロ	壺井御旅山古墳	三角縁神獣鏡1　壺形土器1	冬季企画展『二上山麓の考古学ー古墳時代編ー』図録
35	韓国光州放送	撮影 掲載	ビデオ	陶邑窯跡群	復元TG61号窯1	KBC特集ドキュメンタリー『忘れられた歴史、陶器』
36	古代瓦研究会	掲載	図面	正法寺跡	軒丸瓦1	『第11回古代瓦研究会シンポジウム飛鳥白鳳の瓦づくりＸＩ—藤原宮式軒瓦の展開ー』

37	滋賀県立安土城考古博物館	貸出掲載	写真原板カラー	新堂廃寺	鴟尾1	春季特別展『仏法の始め、茲(これ)より作(おこ)れり－古墳から古代寺院へ－』
38	大阪歴史博物館	掲載	写真カラー	高井田廃寺	箆書平瓦1	大阪歴史博物館『共同研究成果報告書』2
39	藤井寺市総務部	掲載	写真カラー	三ツ塚古墳	大修羅1　大修羅・小修羅・てこ棒1	『藤井寺市勢要覧』
40	法政大学出版局	貸出掲載	写真原板モノクロ	大園遺跡	SK250竪櫛出土状況1 SK251細部1	『井戸』(ものと人間の文化史シリーズ)
41	池田市立歴史民俗資料館	掲載	写真カラー	横枕遺跡	縄文土器写真1　縄文土器出土状況1	『池田学講座』
42	ニューサイエンス社	掲載	写真モノクロ	旧府庁跡	「授産所」刻印煉瓦	『月刊　考古学ジャーナル』
43	鹿児島大学総合研究博物館	掲載	写真カラー	蔀屋北遺跡	SK940馬全身骨格出土状況1 遺構全景1 輪鐙1　木製鞍(後輪)	『鹿児島大学総合研究博物館』 News Letter No. 18
44	個人	複写	著作物	加納古墳群・平石古墳群	『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要』 『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要』Ⅱ 『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要』Ⅲ 『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要』Ⅳ	古代河内の氏族と後期古墳の関係についてに研究
45	藤井寺市教育委員会	掲載	写真カラー・モノクロ	三ツ塚古墳 土師の里遺跡 津堂城山古墳 西小山古墳	修羅出土状況2 大修羅1小修羅1・土師器杯1 土師氏の竪穴住居 坪井正五郎による石棺の調査 淡輪古墳群の円筒埴輪片	『巨大古墳の時代をめぐって』
46	個人	掲載	図面	池上曽根遺跡	石杵1	『古代』早稲田大学考古学会
47	Z会	貸出掲載	写真カラー	陶邑窯跡群	須恵器集合	小学5年生向け『エブリスタディアドバンス小5』
48	個人	掲載	図面	新庄遺跡	石杵1	『古代』早稲田大学考古学会
49	泉佐野市教育委員会	掲載	図面	大仙遺跡	城舘跡構造模式図1 『大仙遺跡発掘調査概要Ⅱ』	『新修泉佐野市史』第1巻通史編
50	松原市教育委員会	貸出掲載	写真カラー	高木遺跡	発掘調査状況6　出土遺物1	松原市文化財広報誌『たじひのだより』No. 7
51	近つ飛鳥博物館	掲載	写真カラー	ツカマリ古墳	ツカマリ古墳全景1	リーフレット『よみがえる－須賀古墳群』
52	大阪市立大学重点研究	掲載	写真カラー	高井田廃寺	箆書平瓦1	『都市文化創造のための比較史的研究』

資料閲覧

	申請者(所属)	遺跡、その他	資料内容
1	(財)大阪市文化財協会	蔀屋北遺跡	製塩土器
2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	シショツカ古墳・アカハゲ古墳	金銅製指輪・金糸・銀糸・銀線・ガラス玉・ガラス管玉、黄褐釉円面硯
3	奈良県立橿原考古学研究所	小島東遺跡、西浦橋遺跡、太平寺遺跡、萱振遺跡	製塩土器
4	(財)大阪府文化財センター	正法寺	軒丸瓦
5	立命館大学大学院	安威遺跡・八尾南遺跡	初期須恵器・土師器・韓式系土器
6	奈良大学	大坂城跡	遺構全体図
7	大阪府立近つ飛鳥博物館	藤の森古墳	鉄釘・鉄鏃・馬具
8	関西学院大学	国府遺跡・八尾南遺跡・はさみ山遺跡・西大井遺跡	旧石器
9	(財)大阪府文化財センター	蔀屋北遺跡	鞍
10	大阪府立近つ飛鳥博物館	藤の森古墳	写真資料
11	富田林市教育委員会	八雲遺跡・田井中遺跡	剥片・細石刃・石鑿・石小刀
12	韓神大学	蔀屋北遺跡	韓式系土器
13	大阪府立狭山池博物館	大坂城跡	鋸・台鉋・鑢・鉄鍋・錐・ものさし・砥石・墨さしなど
14	立命館大学大学院	萱振1号墳	円筒埴輪
15	和泉市教育委員会	野木々井古墳群・牛石7号墳・檜尾塚原古墳群・名古山古墳	須恵器・円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀・鉄鏃・馬具・装身具など
16	交野市文化財事業団	陶邑窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
17	大阪府立狭山池博物館	吉野遺跡	銅銭
18	福井県立歴史博物館	木の本遺跡	馬鍬
19	個人	蔀屋北遺跡	製塩土器
20	太子町教育委員会	岸之本南遺跡	韓式系土器
21	交野市文化財事業団	陶邑窯跡群	須恵器
22	明治大学	陶邑窯跡群	須恵器
23	美里町遺跡調査会	神山丑神遺跡・蔀屋北遺跡・陶器南遺跡	須恵器・陶質土器
24	堺市教育委員会	正法寺跡	軒丸瓦
25	交野市文化財事業団	陶邑窯跡群	須恵器(TK230-1号窯出土資料)
26	大阪府立近つ飛鳥博物館	藤の森古墳	鉄釘・鉄鏃・馬具
27	個人	池上曽根遺跡	木器
28	早稲田大学会津八一記念博物館	西陵古墳・宇土墓古墳・西小山古墳・林1号墳	石器
29	(財)大阪市文化財協会	陶邑窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
30	東北芸術工科大学大学院	陶邑窯跡群	須恵器
31	和泉市教育委員会	檜尾塚原2・8・9号古墳・野々井9号墳	写真資料(遺跡、出土資料)
32	和泉市教育委員会	名古山古墳・陶器千塚古墳群	写真資料(遺跡、出土資料)
33	千早赤阪村教育委員会	堺寛環濠都市遺跡・大坂城跡	一石五輪塔
34	大阪府立弥生文化博物館	堺寛環濠都市遺跡・大坂城跡	外国産陶磁器
35	大阪大学大学院	陶邑窯跡群	須恵器
36	二上山博物館	北玉山古墳・加納2号墳・ツカマリ古墳・玉手山東横穴	捩文鏡・大刀・須恵器・緑彩陶棺片・金環・刀子・銀鈴
37	京都大学	寛弘寺1号墳	鍬・鋤先・手鎌・鎌
38	奈良大学	崇禅寺遺跡	土器(S字甕)
39	京都大学	板持3号墳	鉄鏃・銅鏃
40	広島大学	馬子塚古墳	斜縁二神二獣鏡
41	堺市生涯学習交流サロン	陶邑窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)

42	大阪大学大学院	陶邑窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
43	大阪大学大学院	陶邑窯跡群	須恵器(TK230-1号窯出土資料)
44	大阪大学大学院	誉田山古墳群	土師器
45	奈良大学	崇禅寺遺跡	土器(S字甕)
46	大阪府立弥生文化博物館	堺寛環濠都市遺跡・大坂城跡	外国産陶磁器
47	宮崎県立西都原考古博物館	陶邑窯跡群	陶邑窯跡群出土須恵器
48	水戸市教育委員会	陶邑窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
49	交野市文化財事業団	陶邑窯跡群	須恵器(TK230-1号窯出土資料)
50	高槻市教育委員会	谷川遺跡・余部遺跡	瓦器椀・土師器
51	愛媛大学	観音寺遺跡・陶邑窯跡群	初期須恵器
52	個人	崇禅寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡	土器
53	大阪府立弥生文化博物館	シショツカ古墳	銀象嵌龍文鞘金具
54	藤井寺市教育委員会・千早赤坂村教育委員会・富田林市教育委員会	津堂遺跡・伽山遺跡・谷川遺跡	瓦器椀・土師器
55	(財)大阪府文化財センター	新庄遺跡	緑釉・灰釉陶器
56	名古屋大学	新堂廃寺	軒丸瓦
57	(財)大阪府文化財センター	岸部瓦窯跡・白頭瓦窯跡	緑釉陶器・窯道具・軒丸瓦・丸瓦・平瓦
58	韓国考古環境研究所	蔀屋北遺跡	土器
59	滋賀県立安土城考古博物館	お亀石古墳・新堂廃寺	平瓦・軒平瓦・軒丸瓦・文字瓦・鬼瓦・塼仏・螺髪・鴟尾
60	なにわの海の時空館	蔀屋北遺跡	井戸枠転用船材
61	光州放送局	蔀屋北遺跡	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
62	群馬県埋蔵文化財調査事業団	陶邑古窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
63	個人	萱振遺跡	土師器
64	大阪歴史博物館	普賢寺遺跡	密教法具一式
65	鹿児島県歴史資料センター黎明館	陶邑窯跡群・深田橋遺跡	須恵器
66	山形県埋蔵文化財センター	陶邑古窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
67	韓国国立文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所	蔀屋北遺跡	須恵器・土師器・韓式系土器
68	大阪大学	陶邑古窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
69	奈良大学	陶邑古窯跡群	須恵器(泉北考古資料館・基準資料)
70	長野県立歴史館	蔀屋北遺跡、南花田遺跡・大和川今池遺跡	輪鐙・鞍・轡、石器
71	大阪大学・宇治市歴史資料館	陶邑窯跡群TK230-Ⅰ号窯	須恵器
72	南山大学	砂遺跡・田井中遺跡・久宝寺遺跡・上遺跡・淡輪遺跡・林遺跡・更良岡山遺跡	縄文土器
73	北陸学院短期大学	田井中遺跡・木ノ本遺跡	土師器
74	奈良大学大学院	堂山古墳群	埴輪
75	なにわの海の時空館・大阪市港湾局	蔀屋北遺跡	井戸枠転用船材
76	大阪府立茨木高等学校	新庄遺跡	弥生土器
77	奈良大学大学院	更良岡山遺跡	円筒埴輪
78	大阪府立狭山池博物館	白山家資料	折形類
79	(財)大阪府文化財センター	陶邑窯跡群TK230-Ⅰ号窯	須恵器(TK230-1号窯出土資料)
80	伊賀市教育委員会	陶邑窯跡群TK230-Ⅰ号窯	須恵器(TK230-1号窯出土資料)

═ 平成 19 年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図 ═

課長
参事

【文化財保護課】
TEL 06（6941）0351（代表）

- 保存管理グループ
- 指定文化財グループ

調査管理グループ	資料総括	主査	平田喜一	積算及び竣工等
分室長	主査　宮野淳一	主査	三宅正浩	遺物整理、泉北考古資料館協力等
玉井　功				写真・保存処理、資料貸出等
		主査	山上　弘	センター指導・調整 事業量調査等
		主査	亀島重則	遺物整理等
		技師	藤田道子	遺物整理
調査第一グループ	調査第一総括	主査	辻本　武	発掘調査・調整・指導（豊能・三島）
調査第一補佐	主査　岩崎二郎	主査	岡本敏行	発掘調査・調整・指導（中・北河内）
瀬川　健		主査	大楽康宏	発掘調査
		副主査	小浜　成	発掘調査
		技師	奥　和之	発掘調査
		技師	岩瀬　透	発掘調査
		技師	小川裕見子	発掘調査
調査第二グループ	調査第二総括	主査	小山田宏一	発掘調査・調整・指導（南河内）
調査第二補佐	主査　西口陽一	主査	橋本高明	発掘調査・調整・指導（泉州）
高島　徹		副主査	上林史郎	発掘調査
		技師	枡本　哲	発掘調査
		技師	阿部幸一	発掘調査
		技師	杉本清美	発掘調査
		技師	土屋みづほ	発掘調査

【文化財調査事務所】
TEL 072（291）7401

大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 12
発行日　平成 20 年（2008 年）11 月 28 日
発　行　大阪府教育委員会
〒 540-8571
大阪市中央区大手前 2 丁目
TEL 06-6941-0351
編　集　大阪府教育委員会文化財調査事務所
〒 590-0105
堺市南区竹城台 3 丁 21-4
TEL 072-291-7401
印　刷　（株）中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号
TEL 06-6976-8761